
バカとテストと万能演人（オールアクター）

那家乃ふゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと^{オールアクター}万能演人

【Nコード】

N9450P

【作者名】

那家乃ふゆい

【あらすじ】

人とはかなり変わった能力『変身』を持つ少年、五月雨^{さみだれ} 愛斗^{まなと}。これは、そんな彼と彼を取り巻く仲間たちが織りなす、日常痛快学園ラブコメです。

第一問 物語の始まりは大体どの作品でも同じような感じ（前書き）

新作です！ まだまだいたらないところもあるでしょうが、優しく見守ってください！

第一問 物語の始まりは大体どの作品でも同じような感じ

（化学）問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（　　）　　すごく強い』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

五月雨愛斗の答え

『合金の例……超合金Z』

教師のコメント

ロケットパンチは男のロマンです。

俺達がこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇ってい

る。別に花を愛するほど雅な人間でもないけれど、その眺めには一瞬目を奪われる。

でも、それも一瞬のこと。

今俺の頭にあるのは春の風物詩ではあるけれども、桜の事じゃない。

俺の頭は今年一年を共に戦い抜いていく戦友と教室
要する
に新しいクラスのこと一杯になっていた。

「五月雨、遅刻だぞ」

玄関の前でドスのきいた声に呼びとめられる。声のした方を見るとそこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツ然としたゴリラが立っていた。

「あ、ゴリ じゃなくて、西村先生。おはようございます」

軽く頭を下げて挨拶をする。危ない危ない。生活指導に向かって思わず霊長類最強の生物を言うところだった。

「今、ゴリラって言わなかったか？」

「いえいえ、気のせいですよ」

「ん、そうか？ それにしてもお前が遅刻とは珍しいな。何かあったのか？」

「いえ……彼女がなかなか行かせてくれなくて」

「彼女？ お前そんなもんがいたのか」

「はい。五回も選択肢もやり直したんですよ……いやー、大変でした」

「……恋愛シュミレーションもほどどにな……。まあいい、ほら、受け取れ」

先生が箱から封筒を取り出し、俺に差し出してくる。宛て名の欄には『五月雨愛斗』と、大きく俺の名前が書いてあった。

「あ、どもつす」

一応頭を下げながら受け取る。

「五月雨、今だから言うがな」

「はい、なんすか？」

くそつ、この封筒なんでこんなに固いんだ？ こうなったらいつそハサミで……。

「俺はお前を去年一年見て、『もしかすると、五月雨はアホなんじゃないか？』なんて思ってたんだ」

「それは大いなるミスですね。俺の点数でアホなんて思ってたなら、更に『脳なし』なんて渾名をつけられちゃいますよ？」

「ああ、振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ」

「そうですか。それはどうも」

鞆からハサミを取り出し、上の部分を切る。中には、一枚の紙が入っていた。

「喜べ五月雨。お前への疑いはなくなった」

そこにはこう記されていた。

『五月雨愛斗……全科目名無しにつき、Fクラス』

「お前は大アホだ」

こうして俺の最低生活が幕を上げた。

……しくじったなあ……

第一問 物語の始まりは大体どの作品でも同じような感じ（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第二問 最悪はある意味全てにおいて最強（前書き）

この主人公と、『バカテスの一存』の主人公は全くの別人です。

第二問 最悪はある意味全てにおいて最強

(国語) 問 以下の問いに答えなさい。

『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』 『(2)悪いことが立て続けに起こること』

姫路瑞希の答え

『(1) 弘法も筆の誤り』

五月雨愛斗の答え

『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

「……なんだこの王室は」

三階に上がりまず最初に目に入ったのは、信じられないほどバカでかい教室だった。おそらく、これがＡクラスというやつだろう。ここまで豪華だと、逆に暮らし辛そうな気がする。

「あら？　愛斗じゃない。どうしたのこんなところで」

と、ここで一人の美少女が俺に話しかけてきた。

木下優子。俺の小学校からの幼馴染だ。肩まで伸ばしたふんわりとしたセミロングで、前髪をヘアピンで横に流している。そのかわいさは文月で一位を誇るであろう……異論は認めない。

「よっ、今日も元気そうだな」

「おかげさまでね。で、中に入らないの？ もちろん愛斗もＡクラスなんでしよう？」

「えっ」

優子の何気ない一言に全身の動きが止まる。優子は俺と同じクラスになるために死ぬ気で勉強を頑張ってきた。で、努力報われＡクラス入りとなったんだが……肝心の俺はこのアリサマだ。

まずい……Ｆクラスになったなんてバレたら、俺は中国雑技団もビツクリな軟体動物になっちまう。

優子は冷や汗を流す俺を見て、「まさか……」と優しく微笑みかけてくる。それヤメテ、逆に恐いから。

「まさか、振り分け試験でしくじったなんて言わないわよね？」

「いやー、恥ずかしながら全科目無記名でＦクラスになっちゃいました。テヘツ」

ダッ 俺が全速力でその場を立ち去る音

ガシッ その俺を優子が一瞬で捕える音

メキョツ！ 俺のなにかが粉碎する音

「ぐぎやあああつ！！」

「愛斗のバカ！ せつかく一緒のクラスになれるかと思ったのにいいいつ！！」

「スンマセン！ だから俺が新世代の人類になる前に手を離してえええつ！」

はあ……はあ……危うくターミネーターもビックリの体になるところだった……。

「まったく……相変わらずなんだから……」

「返す言葉もございません」

「もういいわよ。そのかわり今日の放課後に駅前のクレープおごってもらうから、いい？」

「ちよつ、それは俺の小遣いが……」

「い、い、わ、ね？」

「姫様の仰せのままに」

「よろしい。じゃあ早く行きなさい。みんな待ってるわよ」

じゃあね、と手を振って優子が教室に入っていく。俺の財布に深刻なダメージを与えて。

「……じゃあ行きますかっ」

俺は我らが級友たちの待つ、Fクラスへと足を進めた。

「失礼しますっ、坂本雄二と吉井明久は死んだ方がいいと思う」
「「急に!?!」」

俺のちよつとした悪ふざけに反応する二人の生徒。親友の坂本雄二と吉井明久だ。詳細は……メンドくさいから言わない。

俺はクラスメイトに挨拶しながら、雄二の前の席へと座る。

「おい」

とここで雄二が後ろから話しかけてきた。

「なに? その『なんでお前がここにいるんだ?』的な顔は」
「その通りだバカタレ。なんでAクラス候補のお前がここにいる?」
「いや……なんか全科目名無しだったみたいでさ。やんなっちゃうよな」

「……まあいい。戦力が増えるのは大歓迎だ。よろしくな、相棒」
「おう! こちらこそな、相棒」

ガシッと雄二と腕を組む。こいつと知り合ったのは中学の時。『悪

鬼羅刹』の名で恐れられていたこいつとたまたま街でぶつかり、喧嘩することになった。お互い一步も譲らない好勝負の結果は引き分け。それがきっかけでいつの間にか仲良くなっていた。そんなこんなで俺の親友の一人だ。

「あ、愛斗もFクラスだったんだ。今日からよろしくね」

俺によやく気付いた明久が笑顔で近づいてくる。俺はニコツと笑い、優しく呟いた。

「ちっ、台所の黒光りかよ」

「違う！ 僕は決してゴキブリなんかじゃない！ っていうか、挨拶ぐらいちゃんとしてくれよ……」

「冗談だつてば。よろしくな、明久」

パンッと軽く肩を叩く。

吉井明久。この学園一のバカにして観察処分者だが、行動力と優しさ（雄二以外）は天下一品というよく分らない奴。高校生になって俺が最初に知り合った生徒で、今は雄二に続き俺の親友の一人となっている。

ガラッ

そのとき、突然教室のドアが開き、冴えない風体の初老の男性が入ってきた。おそらくこのクラスの担任だろう。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくおねがいします」

先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。チョークすら用意されてないのかよ……。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は用意されていますか？ 不備があれば申し出てください」

卓袱台と座布団って……寺子屋より酷いだろ、コレ。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

と、クラスメイトの誰かが設備の不備を申し出る。

「我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れてます」

「後で木工用ボンドで直してください」

「センス、窓が割れてて寒いんですけど」

「わかりました。ビニールとセロハンテープを申請しておきましょう」

Fクラス……想像以上の魔窟だ。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね……廊下側の人からお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

ん？ だれかと思えば秀吉じゃんか。優子の双子の弟だが異常にそっくりで、長年一緒にいる俺でさえ間違えてしまうほど。まあその度に優子に殺されかけているんだが……俺が。特技は声帯模写だ。

「……………土屋康太」

おっ、今度は康太か。ある商會を立ち上げていて、生徒達にはなくてはならない存在、土屋康太。かくいう俺もその商會の一員だったりする。

「です。海外育ちで、日本語は會話はできるけど読み書きが苦手です」

と、ぼーっとしているうちに、また次の人。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は吉井明久を殴ることです」

誰だ？ こんなアブナイ趣味を持つ奴は？

「はろはろー」

笑顔で明久に手を振るのは、

「……………あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

島田美波。ドイツからの帰国子女で、明久とのファーストコンタクトからなにかと絡んできている明久の天敵だ。

と、そんなこんなで明久の番となった。軽く息を吸い、立ち上がると、笑顔で言った。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいな。」

『ダアアーーーーリイーーーーン!!』

野太い声の大合唱。もちろん俺も参加した。

明久は苦笑いを浮かべながら席に着く。おそらく本当にそう呼ばれるとは思いもなかったのだろう。

「さて、次はあなたの番ですよ。五月雨君」

ありゃ、もう俺の番か。先生に促され、立ち上がる。さて、一体どんなアピールをしようかな。たくさんの友人を作るためにも、俺が気さくなところをアピールしないと。よしっ、軽いジョークでも入れていこう。

ニコツと作り笑いを浮かべながら、俺は自己紹介を開始した。

「五月雨愛斗さみだれ まなとです。特技は空手。趣味は……ゲームと読書です。で、最後に一言。『Aクラスの木下優子に手を出そうとした奴は全力で潰す』から。……今年一年よろしくお願いします」

「……はい」

なぜだろう？ ふざけて言っただつものなのにクラスメイトの半数以上が俯いている。心当たりでもあるのだろうか……早急に対処せねば。

その後もしばらく名前を告げるだけの単調な作業が続き、いい加減眠くなってきた頃に不意にガラリとドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

第二問 最悪はある意味全において最強（後書き）

感想お待ちしています。

第三問 本当の勇氣とは人の為に動けるかどうかだと思ふ

「あの、遅れて、すいま、せん……」
『えっ？』

クラスメイト全体から驚きの声上がる。そりやそうだろう。俺だつて、事情を聞いてなかったら同じ反応をしていた。

先生は騒がしくなるクラスをやりわりと収めながらその少女に話しかけた。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもよろしくお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

小動物のように体を小さくする姫路。……かわいい。

「（ゾクウツ！！）」

そう思つた瞬間、背中に走る冷たい殺気。そおつと廊下を見ると……。

「……………（ニコオオオオオツ…………）」

我が幼馴染が額に青筋浮かべながら、良い笑顔で立っていた。

「……………（ぱくぱく）」

ん？　なんか言ってるのか？

ひたすらに口パクをする優子。不思議に思い、頑張って読み取ると……。

「（あ、ん、た、あ、と、で、ほ、ん、と、う、に、こ、ろ、す、わ、よ？）」

「（すいませんでしたっ！！）」

光速で土下座を実行。今日俺は財布の中身と共に抹殺されそうだ。

それでも許してくれないのか、優子は「こっちにおいで？」と俺に向かつて手招きをしてくる。

……………いくしがあるまい。

「せんせー、ちょっとトイレ行かせてくださいーい」

「あ、はい。構いませんよ」

先生の許可を貰い、廊下へと出る。そこには案の定修羅の気を纏った優子が佇んでいた。

「や、やあ優子。なんの用かな？」

「……あんたさつき姫路さんを見て鼻の下伸ばしてたでしょ？」

「はっはっは。そんなことあるはずないではございませんか」

やばい……確実にバレてる。

「……本当？」

まだ疑ってくる優子。仕方ない、さっさと教室に戻るためにも渾身の嘘で解放してもらおう。

「本当だって。ただ……」

「ただ？」

「姫路の胸は巨乳だから良いなあ、って思ったただけだって」

「……………（ブチッ）」

しまったあつ！ 思わず本音が出てしまったあつ！

「ふうん……そんなこと思ってたんだあ……………」

「ちょっ、優子さん？ 俺の腕を持ってなにをするおつもりでありますのかな？」

「……………悪かったわね」

「はい？」

「胸がちっちゃくて悪かったわねええええつ!!」

「あんぎゃあああああつ!!」

腕がつ、腕が取れる!

「……ふん! 放課後絶対にクレープ以外もおごってもらつから……
いいわね?」

「……ぎよ、御意」

「ふん!」

プンス力怒りながら、優子はAクラスへ戻っていく。

……た、助かったあ……。

想像していたよりは軽い罰で良かった。てつきり冥府まで送られる
ものかと。

教室に戻ると、みんなすつかり談笑モードだったので俺は秀吉の席
へと向かう。

「よつ、秀吉。一年間よろしくな」

「なんじゃ、愛斗か。お主もアホじゃのう。無記名でFクラス入り
なんじゃから……姉上はご立腹だったじやろつて」

「いや、もう既に放課後クレープをおごることになっちまった……
さつき教室を出たのもその続きだよ」

「……自業自得じゃな」

苦笑気味に笑う秀吉。昔からの付き合いなのでお互いの事はよく分かっている。知り合いの多いこのクラスにおいても、一番話しやすい相手だろう。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

と、そのとき先生がパンパンと教壇を叩き、明久達に注意をした。

「あ、すいませ

」

バキィツ パラパラパラ……

教壇がゴミ屑と化した。

「どんだけ最低な設備だよ……」

「まあこれがFクラスというもののなのじゃろう……」

はあ……と二人で溜息をつく。なんかもう初日から嫌になってきた。大丈夫なのだろうか、このクラスは。

「雄二、ちよつといい？」

それを見た明久は真剣な面持ちで雄二に声を掛けていた。

「ん、なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

立ち上がって、廊下に出る二人。

「あの二人はどうしたのじやろうか？」

「さあ……ちよつと盗み聞きでもしてくるよ」

「お主は……本当に相変わらずじやな」

秀吉との話を止め、こつそりと廊下へと向かう。二人はヒソヒソと
なにかを相談していた。

「……なにが目的だ？」

「……姫路さんのためだよ」

「なんだ、やけに素直じゃねえか。どうしたんだ？」

「去年愛斗に言われたんだよ。『人に協力を頼む時は、そいつが信用できなくても本当の事を話すべきだ。そうしないとお互いの信頼関係は成り立たない』って。だから嘘はつかない。姫路さんのために、Aクラスへの試召戦争をやりたいんだ。協力してほしい」

「……おいおい、今さらそんなよそよしくすんなよ。俺はお前のマジな頼みを断るほど落ちぶれちゃいねえぞ？ それに、俺だってAクラスをぶつ潰してやろうと思ってたところだ」

「世の中学力だけじゃないってことを思い知らせてやりたいの？」

「そのとおり。よく分かってるじゃねえか」

「まあね。伊達に一年も雄二の親友やってるわけじゃないんだから」

なるほど…… Aクラス相手に試召戦争か。おもしろい。

俺はバツと立ち上がると、雄二達の下へ向かう。

「おいおい、俺の事は除け者扱いか？ 酷いじゃんか」

不意に後ろから話しかけると、二人はビクウツと体を反応させる。

「ま、愛斗！？ いつからそこに……」

「最初からだな。で、やるんだろ？ 試召戦争。協力してやんよ」

そう言っつて、右手を二人に突きだす。二人はポカーンと口を開けていたが、俺の言葉を理解すると慌てて右手を乗せた。

「じゃ、打倒Aクラスってことで……頑張るぞっ！」

「「おー……」」

気合いを入れたところで、教室へと戻る。

「坂本君、後はキミだけですよ。お願いします」
「了解」

先生に呼ばれて、雄二が席を立つ。ゆつくりと教壇に歩み寄るその姿はクラスの代表に相応しい貫禄を纏っていた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は坂本でも代表でも、好きなように呼んでくれ。……さて、皆に一つ聞きたい」

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、リクライニングシートらしいが……不満は無いか？」

『『『大ありじゃあつ！！』』』

おおっ！ さすがはFクラス。素晴らしいまでの魂の叫びだ。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！』

……そこまでの不満がよくもまあすぐに出てくるな。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友達の反応に満足したのか、自身に満ち溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

これから戦友となる仲間達に野性味満点の八重歯を見せ、

「
FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよう
と思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第三問 本当の勇氣とは人の為に動けるかどうかだと思ふ（後書き）

感想おまちしています。

第四問 勝利の鍵を握っているのは優秀な奴じゃなく案外落ちこぼれなバカ（前

テスト勉強が……キツウウイッ!!

第四問 勝利の鍵を握っているのは優秀な奴じゃなく案外落ちこぼれなバカ

（英語）問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

五月雨愛斗の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚だ」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 「 * ?

」

教師のコメント
できれば地球の言語で。

Aクラスへの宣戦布告。

それはこの最低Fクラスにとっては雲を掴むような提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

誰だ？ 最後の、姫路にラブコールを送った奴は？

「そんなことはない、必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな圧倒的な戦力差を知りながらも、雄二はそう宣言した。

『なにを馬鹿なことを』

『できるわけがないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

みんなの否定する声が響き渡る。

こいつらは……文句言つなら自分から動こうとしろよ……。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

こんな雄二の言葉を受けてクラスのみんなが更にざわめく。
根拠か……まあ、普通に考えたらねえよな。学年最低グループなんだし。

「それを今から説明してやる……おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

姫路、今さら慌てたつて遅いと思うぞ？ そいつの機動力はサイバ
○ター並だから。

つてか、流石に凄いな……あそこまで恥も外聞もなく低い姿勢から
覗くなんて……。

「土屋康太。こいつがかの有名な寡黙なる性識者だ」
ムッリーニ

ムツツリーニ。その名の通りムツツリスケベなのだが、その行動力で手に入れる写真などは生徒間でも取引されている。男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリーニだと……？』

『バカな、ヤツがそうだというのか……？』

『だが見る。あそこまでの明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

をい……感動するところはそこなのか？ もっと別なところで感動しろよ……。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。ウチの主戦力だ。期待している」

もし試験召喚戦争に至るとしたら、確かに彼女ほど頼りになる戦力はいないだろう。
だから明久。そんなほんわかな顔で姫路を見るな。変態か何かと勘違いされるぞ？

「木下秀吉だっている」

秀吉ははっきり言ってバカだが演劇部のエースだ。なにかと役に立つだろう。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って小学生の頃は神童とか言われてなかったか？』

なにいつ！？ ケンカバカの雄二が神童！？
マジかよ……落ちこぼれたな。

「それに……おい、愛斗。ちょっとこっちに來い」
「ほえ？ なんで俺？」

仕方なしに教壇の前へ。

「みんな、こいつはな……あの伝説の『ロド・オラ・オタク萌えの王者』だ」
『『『なにいつ！？』』』

「おいっ！ ちょっと待て、なんだその中二病全開フルバーストな
二つ名はっ！ 全然かっこよくねえし、ってか『王者』ってなんだ
よ！ 誰基準なんだ！？」

「みんなもその名のことはよく知ってるだろう……」

「だあかあらあっ！ 人の話を聞けえっ！！」

『萌えの王者……その名の通り、オタクの頂点に登り詰めた男。ア
ニメ、ゲーム、恋愛シュミレーションをこよなく愛する伝説の男が
こいつだというのか……』

「せっかく趣味まで隠してたのにあからさまに全部バラすなよ！
頂点って何！？ そんなモンになった覚えは無いわあっ！！」

俺の叫びをよそに、クラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

雄二がその名を出した瞬間……。

……シーン……

上がっていた士気はどん底まで落ちた。

「ちよつと雄二！　どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！　明らかに必要ないよね！　オチ扱いだよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！　せつかく上がりかけてた士気が一気に下がっちゃってるし　　って、なんでみんな僕を睨むの？　これは僕のせいじゃないでしょっ！」

明久が涙目で叫ぶ。

そこからは観察処分者の説明があつたのだが　　割愛させてもらおう。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された！」

あきらめる。お前の想いはずえつたいに届かないから。

「皆、この境遇は大いに不満だろ？」

『当然だ！！』

「ならば全員武器を取れ！　出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！　Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー……」

異常な程の熱気に思わず吐き気を催す。

うええ……ムサ苦しい。これじゃ男子校となんら変わらない……。

「Dクラスの宣戦布告だが……」と、雄二が明久の方を向く。

ふっ、明久に行かせるつもりか……しかし！ そんな面白そうな役割を俺がしないわけがない！

バツと手を上げる。

「雄二！ 俺が行こうじゃないかっ」

「明ひ……は？ 愛斗、正気か？」

「つたりめえよっ！ こんなおもしろそ

もとい、大役は

俺にしかできねえぜっ！」

「ああ、いや、それならいいんだが……じゃあ、頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、俺は意気揚々とDクラスへ向かって歩き始めた。

第四問 勝利の鍵を握っているのは優秀な奴じゃなく案外落ちこぼれなバカ（後

感想お待ちしています。

第五問　あまりにも空気を読まないと逆に痛い目を見る（前書き）

今回はかなり短いです。

第五問 あまりにも空気を読まないと逆に痛い目を見る

ガラッ

「たのもー！ クラス代表に話があつて来

「おおっ、愛斗じゃんか。どうしたんだ？」

「綾斗？ どうしてここに……？」

Dクラスに入つて、まず俺の目の前に現れたのは、親友であり悪友の時雨^{ときなめ}綾斗^{あやと}だった。

成績良し、運動良し、顔良しのパーフェクト男子だが、俺と同じ趣味を持つオタクでもある。

無論、成績上位者のこいつがDクラスにいるはずがないのだが……。

「ああ、いや。テストの途中でどうやら寝ちまったみたいでさ。んで、Dクラスってわけ。まあ、別にこのクラスも楽しいっちゃ楽しいんだけどな。あっはっは」

快活に笑う綾斗。

マズイ……これは予想外だ。急いで雄二に報告しないと……！
とりあえずさっさと用事を済ませてしまおう。

「なあ、綾斗。代表に話があるんだけど、呼んでくれないか？」

「ん？ ああ、オッケー。おい！ 源二い、お前にお客さんだぞ！」

綾斗の声に何人かがこちらを振り向く。

そのうちの一人が頭に？マークを浮かべながら、歩いてきた。

「お前がDクラスの代表か？」

「そうだけど……何の用？」

「ふっ、聞いて驚け見て驚嘆しろ……。今日の午後、我々Fクラスは貴様らDクラスに試験召喚戦争を申し込む！」

……シン

え？ あれ？ なんでそんなにシラけた空気に？ って、そこのお前！ 「何言ってるのコイツ」みたいな目やめろ！

あまりの空気に耐えられなくなった俺はゆっくりと後ろを向くと、Fクラスへと走り出した。

『『『な、なにいいいいいいいつ！？』』』

背後から聞こえた叫び声は、走り去る俺の耳にしっかりと刻まれた。

第六問 本当のリーダーとは言葉だけで仲間を安心させられる奴（前書き）

久しぶりです。

こっちの小説はなかなか更新が捗りませんねえ……。精進せねば。

第六問 本当のリーダーとは言葉だけで仲間を安心させられる奴

「ただいまー」

「おお、愛斗よ。無事じゃったかの？」

教室に入ると、秀吉が心配そうに俺の方に歩いてきた。

「ああ、大丈夫。なんともないさ。それより……雄二！」
「なんだ？ 俺になんか用か？」

キョトンとした顔でこちらを向く雄二。こいつは……俺がDクラスに行ってたこと忘れてるんじゃないかねえのか……？
ふつふつと沸いてくる怒りを必死に抑えつけ、雄二に綾斗のことを報告する。

「Dクラスに時雨綾斗がいた」

「なんだと？ ……分かった。情報ありがとな」

そついうと雄二は明久達に声をかけ、外に出て行った。肝心の明久は、ムツッリーニと二人でウダウダと話し込んでいる。

「ほら、吉井。アンタも来るの」

と、そんな明久をぐいつと島田が引つ張った。明久の奴……明らかに話し合いを拒んでいるな。

「あー、はいはい」

「返事は一回！」

「へーい」

「……一度Dasbrechen
……」 ええと、日本語だと…

Dasbrechen? ドイツ語か?

「……………調教」

近くから聞こえるムツツリーニの声。いや、だからなんでそういう単語だけ知っているんだ、おまいは。

「そう。調教の必要がありそうね」

「島田。せめて教育とか指導って言ってやらないか? 明久が間違はなく死ぬから、ソレ」

「じゃ、中間とつてZuchtingung」

「……………それは分からない」

普通そうだろ。

「確か、日本語だと折檻だったかな?」

「それ悪化してるよね」

「そう?」

「なんでろくに漢字も読めないのにそんな単語だけ知ってんだよ…
…」

こいつこそ調教してやるべきではなからうか。

「というかムツツリーニ。なんで『調教』なんてドイツ語を知っているの?」

さっき俺も思ったことを明久がムツツリーニに尋ねる。彼は、ふ

つと笑うと言い放った。

「……一般教養」

「よし、ムツツリー二。お前は間違いなく変態確定だ。」

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の雄二が屋上の扉を開き、太陽の下へ。春風と共に訪れた陽光に、スカートを凝視しているムツツリ野郎を除いて、俺達は全員が目を細めた。

「愛斗。宣戦布告はしてきたな？」

「あ？ うん。一応今日の午後に関戦予定って言ってきたぞ」

「それでは、先にお昼御飯ってことかの？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べるよ？」

「そう思うならパンでも奢ってくれと嬉しいんだけど」

「いや、だからまともなもんを持ってくるとかできないのか、おま
いは」

「えっ？ 吉井君ってお昼食べないんですか？」

姫路が驚いたように明久を見る。まあ、普通はそうなるわな。昼
飯食わねえ奴なんて珍しいし。

「いや、一応食べてるよ」

「……あれは食べているといえるのか？」

雄二がすかさず横槍を入れる。

「何が言いたいのか？」

「いや、お前の主食って」

と、そこで雄二が言いにくそうに口をつぐんだので、俺は残りの

言葉を続けた。

「水と砂糖と塩だな」

「失礼なっ！　ちゃんとオリーブオイルだって食べてるさ！」

「あの、吉井君。水と砂糖とオリーブオイルって、食べるとは言いませんよ……」

「舐める。が表現としては正解じゃろうな」

みんなが妙に優しい目で明久を見る。ううつ、あれは辛いだろうな……。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「それでも食費優先だろ、普通」

「う……そ、そういう愛斗だって、仕送りを全部趣味に使っているじゃないか！　僕に言う資格ないだろう」

「いや、俺は優子の家で飯を食わせてもらっているから、食費に関しては一切問題ない！」

「……えっ！？」

と、ここで場の空気が固まった。ん？　今俺なんかおかしいこと言っただけか？

俺が頭に疑問符を浮かべていると、意を決したように島田が口を開いた。

「ねえ五月雨」

「なんだ？　なにか聞きたいことでも？」

「あ、いや、そうじゃなくて……木下さんに、ご飯を食べさせてもらっているのよね？」

「そうだけど……それが？」

「それって……あんたようするに『ヒモ』ってことじゃないの？」

「……………え？」

「「島田^{さん}　　っ！！　あえて皆が言わなかったことをなんで堂々と口に出すんだあ　　っ！！」「」

「え？　あれ？　禁句だったの？」

叫ぶ男性陣に、冷や汗を流す島田。いや、そんなことよりも今は……………。

「俺が……ヒモ？」

俺がヒモであるのかどうかだ。

「ち、違うのよ五月雨！　これは口が滑って……じゃなくて、本音がポロっと……ってあれ？」

「もう君は喋るな！　島田さん！！」

「……言われてみればそうだな。ははっ、なんだ俺ヒモだったのか。男として最低の部類に入る、ヒモだったんだ。そりゃ、優子が振り向いてくれるはずないよなあ……こんなヒモに」

さあてっ！　こんなヒモ野郎人生とも早急におさらばするとしますかつ。

「落ち着くのじゃ愛斗！　なぜお主はフェンスの方へ歩いて行くとする！？」

「なあ秀吉、知ってるか？　人間でも、鳥みたいに空を飛べるんだぜ？」

「愛斗！？　それは言葉通りの意味にとつていいのか！？　そもそも、お主が死んだら姉上が悲しむのじゃから、飛び降りはやめいっ！」

「気休めはよしてくれ！　こんなヒモ野郎がいなくなったところで、悲しむのは工事現場のおっちゃんかリアクション芸人ぐらいのものだろっ！」

「お主は一体いつから命綱にランクアップしたのじゃ！？　ヒモじやなかったのか！」

「秀吉にまでヒモって……！？　うわあああんっ！　もう死んでやるう！　死んで優子の入浴タイムに化けて出てやるう……！」

「何気に自分の欲望を吐露するでない！　だいたい、姉上はお主のことを嫌ってなどおらん！」

「え、マジで？」

「大マジじゃ！」

「……………」

「……………」

「……………きゃっ（はあと）」

「お主はやっぱり死にさらせえっ……！」

ドゴンツ　秀吉が俺を床へ叩きつける音

「ひでぶうっ……！」

くっ…………この俺をここまで追い込むなんて…………木下秀吉、恐ろしい子っ！

「…………じゃあ、バカが消えたところで話を進めるぞ」

「あ、あのっ！　さっきの話なんですけどっ、良かったら私がお弁当を作ってきましたようか？」

「えっ、いいの？」

「はいっ、もちろんですっ」

明久が姫路の料理…………男が好きな女に料理…………俺が優子の料理！

「ふぬをおおおお……かはっ」

「……おとなしくしろ」

復活しかけた俺に、すかさずスタンガンを当てるムツツリーニ。

「……ずいぶ……だけに……」

「わか……みなさ……すね」

あれ？　なんか意識が……。

遠くなる意識の中、俺が最後に見たものは、決意を固めたクラスメイトの顔だった。

第六問 本当のリーダーとは言葉だけで仲間を安心させられる奴（後書き）

近々CLANNADの小説を書きますので、よろしくお願いします。

第七問 ヒーローは遅れてやってくるって言っけど、あれって実際は準備が二番

はい、どうも、ふゆいです。

いやー、やっと入れましたよ、試験召喚戦争編。なんでここまで六話もかかったんでしょうねw

さ、それじゃあとつと本編に向かうとしましょうかね……。

第七問 ヒーローは遅れてやってくるって言うけど、あれって実際は準備が二番

「で、俺達は何をすればいいんだ？」

Dクラスとの試召戦争が始まり、俺と姫路は別室で回復試験を受けていた。理由は簡単。二人とも、諸事情により無得点だからである。そんなわけで、長くなりそうだった回復試験も意外と早く終わり、現在俺達はFクラスで雄二からの支持を待っている。

雄二は、「そうだな……」と考え込むと、実にわかりやすい命令を下した。

「姫路はまだ教室にいてくれ。お前がFクラスにいることは、できるだけ秘密にしておきたい。愛斗は今すぐダッシュで明久達の援護に向かえ。そろそろみんなが疲労してきたころだろうからな」

「「おう（はい）……」」

雄二の指示通り、廊下へと出る。さあて、行くとしますかっ！

「さあ来い！ この負け犬が！」

「て、鉄人！？ 嫌だっ！ 補習室は嫌なんだ！」

『黙れ！ 捕虜は全員、この戦争が終わるまでは補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるか分からんが、たつぷりと指導してやるからな！』

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐えられる気がしない！』

『拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わるころには趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『お、鬼だ！ 誰か、助けっ
ン、ガチャ』 イヤアア (バタ)

……なんだこの地獄絵図は。

目の前で、Fクラスの仲間達が次々と補習室へと拉致されていく。

『イヤアア (バタン)』

『うぎやあああ (ガチャ)』

「おっと、こんなところで呆然としている場合じゃない。明久達はいた！」

渡り廊下の中央で、明久は島田と共にいた。

「明久、島田、無事か！」

「愛斗！ 丁度良かった。中堅部隊に伝えて欲しいことがあるんだ！」

「ん、何？ 作戦？」

明久の言葉に、島田が首を傾げる。島田、明久が作戦なんか立てられるハズないだろ……。

明久は、いたって真剣な顔で、言い放った。

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

島田が明久を殴った。目をチヨキで。……やっぱり。

「目が、目があつ！」

「目を覚ましなさい、このバカ！ あんたは部隊長でしょうが！
臆病風に吹かれてどうするのよ！？」

「いや、その覚ますべき目に指を突っ込むなよ……。明久、すっげえ痛がつているぞ？」

「おい、吉井！ 島田！」

と、ここでFクラスの報告係が。

「どうしたの？」

「島田！ 前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

「さっきの明久の鈍痛は何だったんだ

！！」

「よし、逃げよう。僕達には荷が重すぎた」

「まだなにも部隊らしいことはやってないだろ！？」

まずい、このままだとこいつらは撤退してしまう。……特にこいつらが。こうなったら……。

「明久あつ！」

「なに？ 愛斗。僕もう退却しなきゃ

」

「今、ここで残って戦えば、アニメキャラの戦うシーンが見られるぞ？」

「……………総員、突撃しろお

！！」

「え、ちよつ、吉井！？」

よし、とりあえずは作戦成功だ。ここで退かせるわけにはいかな
いんでね。

「見て、吉井！ Dクラスの奴ら、化学教師を引つ張ってきたわよ
！」

島田の叫びで渡り廊下の奥を見る。そこには二年生化学担当の五
十嵐教諭と布施教諭がいた。なるほど、一気に片をつけようってわ
けか。

「島田、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ」

「明久は？」

「聞かないで……」

「この役立たずが。……仕方ない。このままこっそり主任のところ
まで行くぞ」

「高橋先生のところね？ 了解！」

既に戦闘が行われている廊下で、目立たないように隅へと移動す
る俺達。皆、見るがいい。これがFクラス中堅部隊主力隊の雄姿だ！

「あつ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉さま！ 五十
嵐先生、こっちに來てください！」

「くっ！ めかったわ！」

Dクラスの清水に、島田が見つかったしまった。ヤバいな。この
ままじゃ三人揃って仲良く補習室送りだ。かくなるうえは……。
明久も、同じ結論に行き当たったようで、叫んだ。

「よし。島田さん、ここは君に任せて僕達は先を急ぐよ!」

「ちよっ……! あんた達なに言ってるのよ!？」

「頑張るんだ! あと少し粘れば、愛しの秀吉がきつと助けに来てくれるから!」

「え? それならいいかも……って、違う! そういう問題じゃなくて普通は『ここは僕達に任せて先を急げ!』じゃないの!？」

「『そんな台詞、現実世界じゃ通用しない!』」

「こ、このバカ共! ゲス野郎!」

なんとも言う方がいい。

「お姉さま! 逃がしません!」

「くっ、美春! やるしかあないってことね……!」

五十嵐教諭から10M以上離れて、ゆっくりと島田の様子を伺う。戦いは既に始まっていた。

第七問 ヒーローは遅れてやってくるって言うけど、あれって実際は準備が二番

はい、今日は時間がないのでここまでとさせていただきます。

「いつにも増して、短すぎるものではありませんか？ と、ミサカは愚痴ります」

む、なんだねチミは。某『バカ努力』を見て即興で配置されたミサカ10032号のくせに。

「いえ、初めての顔見せなので、読者の皆さんに忘れられないような強い印象を作っているのですよ。と、ミサカは心の内を明かしてみます。ぴーす。いえーい」

見事なまでの無表情っぷりだね……。と、とりあえず、今日はもう時間もないのでここでお別れと参ります。

「この小説を読んでくれる人にお礼を申し上げます。と、ミサカは心からお礼を申し上げます。……あれ？ 台詞がダブっちゃいました。てへ」

う……。と、とにかく！ また次回お会いしましょう！

「感想なども待っています。と、ミサカはしれっと要求します」

さよーならー！！

追伸：五月十九日、「スーパーロボット対戦」のところを、「アニメキャラの戦うシーンに変更しました」

第七問 ヒーローは遅れてやってくるって言うけど、あれって実際は準備が一番
久しぶりです。

まだまだ序盤なんですよねえ……頑張ります。

お知らせ：第七問（前編）の愛斗の台詞「スーパーロボット対戦が見れるぞ？」を、「アニメキャラのバトルシーンが見れるぞ？」に変更しました。

第七問 ヒーローは遅れてやってくるって言うけど、あれって実際は準備が二番

「試験召喚！」

島田の喚び声に反応して、足元に幾何学的な魔方陣が現れる。同時に、召喚獣が姿を現した。

長ったらしいのもアレなので、ざっと説明させてもらうと、『軍服姿でサーベルを持った島田美波』といった感じだ。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の思いで待っていました……」

「ちよつと！ いい加減ウチのことは諦めてよ！」

「嫌です！ お姉さまはいつだって美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ ウチは普通に……お、『男の娘』が好きなの！」

「それは絶対普通じゃないだろ……」

島田の失言に思わずツツコミを入れる。

このツンデレポニーテール少女の島田美波は、今の言葉からも分かる通り、秀吉に好意を寄せているのだ。

一度本人を問い詰めてみたところ、明久にちよつかいをかけているのは、秀吉の近くにいられるから……だそうだ。

んで、まあいろいろあつて俺は二人をくつつけるためにアレコレやっているというワケだ。秀吉は兄弟みたいなものだし、島田も友人だからな。……ぶっちゃけ、面白そうだからというのもあるが。

「いきます！ お姉さま！」

清水の召喚獣が剣を抜き放って島田の召喚獣との距離を詰める。いよいよ戦闘が始まったようだ。

「はあああつ！」

「やあああつ！」

正面からぶつかり合い、力比べが始まる。あちゃー、真正面から行ったら……。

「えいやあつ！」

「きやつ！」

案の定、島田は清水によって武器を落とされていた。あのバカ……点数低いんだから負けるに決まってる……。

「ここまでです！」

「くっ……」

そのままの勢いで島田の召喚獣が押し倒される。頭上には参考として二人に戦闘力が浮かび上がっていた。

『Fクラス	島田美波	VS	Dクラス	清水美春
化学	53点	VS	94点	』

島田のヤツ、サバ読んでいたな。60点にすら届いてねえじゃんか。

「さあ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「い、嫌あつ！ 補習室は嫌あつ！」

「補習室？ ……フツ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますよ？」

「さ、五月雨助けて！」

完全に退路を失ったポニーテールが俺の方を向いて助けを請うてくる。

……はあ、面倒くさいからやめようかと思っていたけど……助けてやるか。

「仕方ねえな……試験召喚」

足元に現れる俺の召喚獣。

格好にはこれといったものはない。上下は標準の学生服（学ラン）で、右手にはヒートホーク。両肩にはそれぞれシールドとスパイクアーマーが付いているだけだ。簡単に言うと『ザク装備の高校生』といった感じかな？

「なんですか？ その貧弱装備の召喚獣は」

「おいおい、貧弱とは言ってくれるじゃないか。……とりあえず、構えろ。瞬殺してやつからよ」

「……美春とお姉さまの時間を邪魔した上に、随分とナメた態度ですネ……後悔しても知りませんよ！」

清水の召喚獣ががむしゃらに突っ込んでくる。俺はそれを、右肩のシールドでいなし、思いっきりヒートホークを叩きつけた。

「おりゃあっ！」

「きゃああああっ！」

為す術もなく切り裂かれる清水の召喚獣。

「な、なんで……！？」

「点数を見てみな」

呆然とする清水に、俺は召喚獣の頭上を指差した。

『Fクラス	五月雨愛斗	VS	Dクラス	清水美春
化学	198点	VS		41点
				』

「なっ……！ 約200点!？」

「俺は文系だから化学は苦手なんだけど……お前らみたいなDクラスごときには負けないんだよ」

「この……！ 覚えておきなさい五月雨愛斗！ このままで済むと思わないでくださいね
(ボタン、ガチャ)」

鉄人に連行されていく清水を笑顔で見送る。隣では、島田も同じような笑顔で立っていた。

……………さて。

「明久」

「は、はいっ！ なんでありましようか隊長殿！」

柱の陰に隠れて何もしなかった観察処分者の処遇を決めるとしよう。

少しばかりは予想していたのか、明久は素晴らしいほどの気を付けの姿勢で俺を見ていた。

「……言い残すことはないか？」

「ち、違っんだよ愛斗！ 僕も手伝おうとは思っていたんだよ？でも、愛斗がすぐに倒しちゃったから……ね？ 仕方ないんだって」

「……………言い訳は終わったか？」

「……………命だけは助けてください」

地面に額をこすり付ける謝り方

通称『D O G E Z

A』を披露する明久。毎度思うんだがこいつにはプライドというものは無いのだろうか。

俺は「はぁ……」とため息をつく、罪人である明久に一つの命令を下した。

「んじゃ、お前は今から島田と一緒に秀吉の援軍に行つてこい」

「え？ そんなんでいいの？」

「ああ、ぶっちゃけお前に折檻したところで戦局が変わるわけじゃないからな。だから、早く行つて来い。そろそろあいつらも消耗しているだろうから」

「う、うん！ 行こう、島田さん」

「ええ！」

Dクラスの教室へと走っていく二人の背中を見送る。

二人が見えなくなってきたところで、俺は背後へ向けて言い放った。

「……いい加減出てきたらどうだ？ 時雨綾斗とその部下たち？」

「……………ちつ」

舌打ちと共に、柱の陰から出てくる綾斗と数人のDクラス生徒。

ひい、ふう、みい……ざつと五人つてところか。

綾斗は、肩を回しながら、俺を見ていた。

「……よく俺達がここに隠れているって分かったな」

「まあねえ……さすがにそんなに大勢でいたらバレると思うんだけど」

「ふっ……………それもそうか」

試験召喚」

『試験召喚！』

間髪入れずに召喚を開始する綾斗達。どうやら、戦いは避けられないようだ。

第七問 ヒーローは遅れてやってくるって言うけど、あれって実際は準備が二番

いやあ、更新したー。

「結局、明久はアニメキャラのバトルシーンを見ていませんよ？
と、ミサカは指摘します」

ん？ ああ、あれはあくまで明久を引き留めるための方便だから。
でも、まあ、アニメキャラのバトルシーンはありますよ。次回ぐら
いに。

「話は変わりますが、ある作者さんに指摘された、文章構成は直つ
たのですか？ と、ミサカはあなたの努力を問うてみます」

うーん、どうだろ？ 自分じゃよく分らないんだよねえ……。

「……ダメ作者ですね、とミサカはあなたを軽く罵倒します」

う……頑張ります。

感想、待ってまゝす

第八問 あんなに大量のゲーセンコインを持っている御坂美琴って実はかなりの
こんにちは。

今回で愛斗と綾斗の秘密が明らかになります。

第八問 あんなに大量のゲーセンコインを持っている御坂美琴って実はかなりの

「はぁ……できれば戦いたくないんだけどねえ……」

ため息をつきつつも、綾斗の召喚獣を見る。

上下を執事が着ているような燕尾服で固めていて、両手には某初代ガンダムのシールドとビームサーベルを持っていた。

やる気のない俺の姿を見て、綾斗は、気に食わない、という風な表情を見せる。

「なんだよその無気力っぷりはよ……それでもお前は『オールアクター万能演人』か、ああん？」

「まさか『ヒーローエンブレム主人公属性』にそんなことを言われるなんて、思いもしなかったよ……」

お互いを二つ名で呼び合う俺達。

その名を聞いて、綾斗の周りにいたDクラス生徒たちが、焦りの表情を見せた。

「『万能演人』に『主人公属性』だと……！？」

「も、もしかして、あの、『変身能力』保持者のことか……？」

「ウソだろ、おい……」

おー、さすがに一年もたつと知られてるもんだな。

そう、俺と綾斗には昔から特別な能力があるのだ。それは……『変身能力』

名前の通り、自分の想像したキャラや人の、容姿や能力をそっくりそのままコピーするという能力である。

俺の場合は、男でも女でも変身することができる。が、なぜか綾

斗は主人公にしか変身できない。

ちなみに、俺と綾斗の他にも、後一人だけこの能力を持つ人がいたりする。まあ、この人については後々話すことになるだろうから、今は保留とさせてもらおう。

召喚獣の頭上に点数が表示される。

『Dクラス 時雨綾斗 & Dクラス生徒五人 VS Fクラス
五月雨愛斗

現国 426点 & 平均98点 VS 4
83点 『

うん、まあ、俺が言うのもなんだけど、綾斗の点数高いなあ……。綾斗は、口元に冷たい笑いを浮かべていた。

「やっぱ現代国語は十八番か？」

「まあね。逆にこれしかできないっていうのもあるけど」

「そうかい。……じゃあ、いくぜ！ 『変身』！」

「っ！？ 初めから腕輪の能力を使うのかよ！ へ、『変身』！」

起動パスワードを唱えると同時に、俺たちの体をまばゆい光が包み込む。

余談だが、俺たちの召喚獣の腕輪は、自分たちの能力と同じものに設定してある。しかも、召喚獣の変身と同時に俺達も変身することになるのだ。つまり、何が言いたいかというと

「かかってこいよオ、格下ア！」

「そのキャラっていうのは、ちょっと卑怯なんじゃないの！？」

この現実世界において、二次元キャラ同士の戦いが起こってしまうということだ。

「「「……………」」」

なんか後ろの五人がすっかり取り残されてしまっているが、そんなことはどうでもいい。

『私』は目の前に佇む、『最強』に目を向けた。

「さすがに一方通行はないと思うんだけど……………」

「なんだア？ 何か文句でもあンのか第三位さんよオ」

綾斗が変身したのは、某禁書目録において『最強』の『一方通行』だ。ベクトルを操り、様々な物の向きを自由自在にコントロールする。

んで、私は『超電磁砲』の『御坂美琴』。電気とかを操るのが得意かな？

あ、ちなみに、なんで話し方が変わっているのかというと、この能力の副作用みたいなもののな。姿や能力をコピーする代わりに、口調がそのキャラと同じになるのね。だから、今の私はれっきとした『御坂美琴』という女の子なのです。

…………さて、んじゃ、とっとと始めますか！

「ちえいさー！！」

掛け声とともに、体を回転させて回し蹴りを叩きこむ。普通なら、これで沈むんだけど…………。

「甘エぞ格下ア！」

「あちゃー、やっぱりムリかあ……………」

一方通行のベクトル反射によって、傷一つ付けることはできなか

った。逆にこっちがダメージを受けている。

『Fクラス 御坂美琴（五月雨愛斗） 483点 425点』

むう……このままじゃ一方的に自爆していくだけだなあ……。

まあ、しかし、今現在は為す術がないというのが現状だ。勝機が見つかるとまで時間を稼ぐしかない。

「ほらほらア！ 逃げ回ってばかりじゃいつまで経っても勝てねエぞー！」

「ちっ！ 全く……相変わらずムカツク能力を使うわね、アンタ！」

一方通行の攻撃（空気のベクトルを変えて打ち出す、いわゆる『空気砲』）を避けながら、対策を練る。

どうする……ただこのまま逃げ回っても仕方がない。どうにかしてダメージを喰らわせないと……原作じゃ、どうやってたっけ……。

……あ。

ザッ、と動かし続けていた足を止める。私の行動に、一方通行が首を傾げていた。

「なんだア？ まさか、もオ諦めて大人しくやられますなんて言う気じゃねエだろオナア？」

「そんなわけないでしょ？ ……アンタを倒す策が見つかったのよ」

「はっ！ 何だ何だ何ですかア？ 『超電磁砲』がこの俺に勝ったってエ？ おいおい、冗談にしてはちよつとばかり笑えねエなア。

そんなことができるなら……ほら、やってみるよ。格下ア」

「そう……だったら、お望み通りやってあげるわ！」

ポケットからコインを取り出し、指で弾く準備をする。

『超電磁砲』。私の必殺技ともいえる技だ。

フレミングの左手の法則によって、弾を音速の三倍の速度で打ち出すことができる。

原作では、一方通行に対して何の効果も上げられなかった技だが……。

「喰らいなさい！」

コインを一方通行に向かって弾く。放たれたコインは一発の弾丸となって、一方通行に襲い掛かった。

「いいねいいねエ！ 性懲りもなくそんなことやるなんて、見上げた根性だぜエ！」

一方通行は動かない。おそらく、自分の体に働いている『反射』で跳ね返すつもりなのだろう。

コインが一方通行に当たる。……………その瞬間。

コインが一方通行の鼻先でピタリと停止した。

「は？」

思わず間の抜けた声を上げる一方通行。それもそうだ。自分を攻撃するはずのコインが、急に行動をやめたのだから。

しかし、私は笑っていた。

「一方通行、ここでひとつ物理のお勉強です。物質が動く際には、必ずその方向に力が働いています。勿論、私が放ったコインも、放たれた方向、つまりアンタに向かって力が働いています。さて、ここで質問です。動いていた物体が停止するときには、どちらの方向に力が働いているでしょうか？」

「っ！ まさか！」

「今頃気付いても遅いのよこのバカ！」

「グ……ガアアアアアアアアアアアアアア！」

一方通行の召喚獣が、動き出したコインをもろに喰らって地面に倒れこむ。

ちなみにさっきの問題の答えは「最初に働いていた方向とは逆の方向」だ。

一方通行のデフォルトは「反射」つまり、向かってきた物体のベクトルを反対の方向に跳ね返すということ。

それならば、跳ね返す寸前に停止した物体はどうなるか。答えは簡単だ。

一方通行に向かって「反射」されるに決まっている。

私の攻撃を喰らったことで、一方通行の頭上の点数が減っていた。

『Dクラス	一方通行（時雨綾斗）	426点	164点』
-------	------------	------	-------

おー、これまた随分と減ったわねえ……。

第八問 あんなに大量のゲーセンコインを持っている御坂美琴って実はかなりの

感想、お待ちしております。

主人公紹介（前書き）

ここでは、主人公『五月雨愛斗』のプロフィールを紹介したいと思います。

主人公紹介

名前：五月雨愛斗
さみだれまなと

年齢：十六歳

身長：165cm

体重：56?

外見：髪質のいい黒い髪を、男にしては少し長めにしている。簡単にいうと『吉井玲』の少し短い感じ。中性的な顔立ちだが、周りからは普通に『男』として見られるレベル。中の上。

誕生日：七月十八日

備考：昔から、『変身能力』を持っており、自分の想像したキャラや人間に変身できる。能力もコピー可能。

召喚獣：上下は標準型の学ラン。右肩にシールド、左肩にスパイクアーマーを付けている。いわゆる『ザク』装備。武器はヒートホーク、ザクマシンガン、ザクバズーカ。

腕輪：『変身』……自分自身と全く同じ能力。召喚獣が変身すると同時に自分も変身するという付与条件が備わっている。

番外編 『小女神』と『万能演人』の日常（前書き）

どうも、ふゆいです。

本編が全く進んでいないような気がしますが、今回はコラボです。相手はGAUさん作『バカと雲雀と召喚獣』です。

GAUさんに怒られないことを祈りつつ、書きました。それでは、どうぞ。

番外編 『小女神』と『万能演人』の日常

五月雨
SIDE

俺　五月雨愛斗には、『変身能力』というちよつとばかり特別な能力がある。

能力の詳細は、簡単に言うと『自分の想像したキャラや人間の姿、能力をコピーする』というものだ。

知り合いは勿論のこと、アニメキャラや二次元キャラも自由自在。そのため、俺に『変身』を希望する依頼者も少なくではあるが、いる。

ちなみに、俺自身はそこまで嫌ではない。小遣い稼ぎにもなるし、アニメキャラに変身するのは意外と楽しいからな。……中性的な顔立ちのせいで、昔から女装させられてきた影響というのもあるが。そんなわけで、日常生活の中でも『女子』になる機会があるのだから……。

「うはー！ やっぱり金髪ツインテールに限るにや〜。ツンデレ最高！」

「ね、ねえ五月雨、今度はこの服を着てみない？　ウチの家にあつたやつなんだけど……このゴスロリ」

「五月雨君って意外と女装が似合うよねえ。アキくんや木下君ほどじゃないけど、普通の男子にしては……うん！ 次はこのメイド服を着てみよう！」

「だ、ダメですよ！ 五月雨君にはこのナース服を着てもらうんですから！」

「てめえらしい加減にしゃがめええええええええええつ！！」

無理やり『女子』にならされて喜ぶような変態じゃねえっ！

俺は、俺を着せ替え人形のごとく扱っていた女子共に吼えた。

「教室に入った瞬間囲まれて何をされるかと思ったら女装かよ！お前ら一体どういう趣味してやがるんだ！？俺みたいなヤツの女装見て嬉しいのか！そういうのは秀吉と明久にでもやらせればいいじゃねえか！」

「明久君と木下君の女装は、見慣れているからいいんです！」

「それよりも、アンタの女装の方がよっぽどレアでしょう？」

「大丈夫だよっ、まなっち！ちゃーんと種類は用意してあるからねっ」

「そういう問題じゃねえ！大体、いつもならツツコミ役の支倉が、なんでこういう時に限って姫路やウエストロードと一緒に暴走してんだよ！」

「いやさ……可愛いものは愛でなくなるのが女の子ってものでしょ？」

「知るかああああああああああつ！！」

畳に膝をついて、あまりの不幸に涙しているところに、突然ポンポンと両肩が叩かれる。

振り向くと、そこには、明久と秀吉がイイ笑顔で俺を見ていた。

俺が頭に疑問符を浮かべていると、二人はこちらに向けて親指を立ててきた。

「「ウエルカム（キリッ）」」

「なんだそのムカツクほど爽やかな笑顔とサムズアップは……！」

女装仲間が増えたことがそんなに嬉しいのか、こいつらは……。そろそろ色々なものが限界になっていた俺は、立ち上がり、叫んだ。

「『変身』！」

合言葉と共に俺の体が光に包まれる。
こいつらから逃れるためには……コイツだ！
光が止み、俺の全身が露わになった。

「……………え？」

支倉が、間の抜けた声を上げる。まあ、無理もないだろう。

今、『あたし』が変身しているのは、『支倉ひばり』
本人なのだから。

「いくわよ！ あたし！」

『本人』の手を掴んで、全速力で教室を脱出する。その際に、坂
本君や土屋君とすれ違ったけど、そんなことは無視！

「あつ、ちよつ…………えええええつ！？」

右手を掴まれながら、絶叫する『本人』を連れて、あたしは屋上
へと走り出した。

NOSIDE

「ふう……ここまで来れば大丈夫でしょ。……………」『変身解除』」

愛斗は屋上の扉にバリケードを作ると、『変身』を解いた。
彼の隣では、ひばりが目を回してノックアウトされている。

「あ、あうう……………」

「なにをそんなに疲れ切っているのやら……………」

「し、仕方がないでしょう!? あたしはそんなに運動が得意じゃないのに、五月雨君が学園中を走り回ったんだから!」

「あれはウエストロード達から逃げ切るためだから文句言っなよ……」

……………」

「つていうか、なんであたしを連れてきたの? あたしも五月雨君で遊んでた内の一人なんだよ?」

「んー、特にこれといった理由はないんだけどな……………あえて言うなら……………」

「言っなら?」

ひばりが首を傾げる。

愛斗は、その小動物のような仕草に苦笑しつつも、笑顔で答えた。

「なんとなく、お前と走り回ってみたかった、つていうことかな……………」

愛斗の子供のような無邪気な笑顔に、ひばりは思わず顔を真っ赤に染めた。

（あ、危なかった……………アキくんに惚れてなかったら、今ので五月雨君に惚れちゃってたかもしれないよ……………。べ、別にそこまで二枚目

じゃないくせに、なんでこういうところだけ格好いいかな、この人は……。優子ちゃんがゾッコンなのも分かる気がするよ……）」

「ん？ どうした、支倉。顔が真っ赤だぞ？ 熱でもあるのか？」

「な、なんでもないよ！」

「そうか？ ならいいんだが」

「疲れたー、と背伸びをする愛斗に気付かれないよう、ひばりはため息をつく。

既にHRは始まってしまっているが、途中から入るのもはばかれるため、二人はしばらく雑談をすることにした。

「ねえ、五月雨君」

「なんだ？」

「あのさ、五月雨君は、その……自分の『変身能力』のこと、どう思っているの？」

「また唐突な質問だな……。……昔は、嫌だったぞ。これのせいで学校でも虐められるし、近所でもいろいろと言われてきたしな」

「い、虐められてたの？」

「そりゃなあ。自分とは明らかに違う奴がいるんだ。虐められない方が不思議ってもんだろ？」

「う、うん……」

俯きながら返事をするひばり。

確かに、今の愛斗の言葉は的を得ていた。

（五月雨君も、あたしと同じ……。望んだわけでもない境遇に苦しめられてきたんだ……）

「でも、自分と同じ境遇の奴に出会えたことで、気が楽になったん

だ」

「……時雨君のこと？」

「そう。まあ、三年生にも一人だけいるんだが……いや、今は忘れてくれ」

身震いしながら言う愛斗。その人物によつぽどのトラウマがあるのだろう。

ひばりは愛斗の願いどおり、その人物には触れず、話を促した。

「それで？」

「さっきも言った通り、綾斗達に出会ったおかげで、俺は自分の能力を好きになることができたんだ」

「……そう、なんだ」

「……支倉だつて、同じだろ？」

「え？」

愛斗の発言に、ひばりは思わず愛斗の顔をまじまじと見る。

愛斗は、優しく微笑みながら、そつとひばりの頭を撫でた。

「明久や姫路、ウエストロード達と出会ったから、今のお前があるんだ。昔の支倉じゃない。周りの奴らに虐められていた、そんなじゃない。みんなと仲良く笑っている、文月学園二年F組の支倉ひばりがな」

ひばりは、思わず言葉を失った。

今の台詞を聞いたとき、確かに、心が暖かくなったのを感じたからだ。

他の誰でもない、自分と同じ境遇にあった愛斗の言葉だからこそ、ひばりの心に深く残った。

（そっか、そうだよね）

よいしょ、と言ってひばりが立ち上がる。愛斗もそれに続いた。

「そろそろ戻ろっか」

「そうだな。早くしないとFFF団に余計なことをされかねん」

「よし！　じゃあ、行こっ！　五月雨君！」

「おう！」

（ありがとう、五月雨君）

その呟きは、誰にも聞かれることなく、春の風に攫われていった。

「ただいま戻り

」

『諸君。ここはどこだ？』

『『最期の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

『宜しい。これより　　二・F異端審問会を開催する！』

「さらばだっ！」

『あ！ 異端者が逃走したぞ！』

『絶対に逃がすな！ 我らの小女神を誑かした罪を後悔させてやるのだ！』
リトルゴッドス

『『ラジャー！ サーチアンドデエエエエスッ！！』』

「須川あああああつ！！」

教室に入った途端、FFF団に囲まれた愛斗は、一心不乱に教室を飛び出した。その後をFFF団員達が追いかけていく。

それを見て、いつものFクラスの日常を見て、ひばりは本当に楽しそうに笑っていた。

「どうしたの？ ひばり」

「アキくん。やっぱり、みんなと楽しくできるのっていうのは幸せだね！」

「？ う、うん。そうだね」

「フフッ……」

「？ ……ま、いつか。ひばりが楽しいなら、それで」

何故か微笑み続けるひばりに軽く首を傾げる明久だったが、どうでもよくなったらしく、優しい表情でひばりを見つめていた。

文月学園第二学年Fクラス。

そこには、様々な思いを持った者達が、今日も楽しく過ごしている。

番外編 『小女神』と『万能演人』の日常（後書き）

どうでしたか？ ひばりのキャラが崩れていないかどうか心配です。

GAUさん、お叱りは感想にて聞きますのでどうかご勘弁を
！！

第九問 「禁書目録」最終巻の一方通行さんはマジで泣きました（前書き）

どうもです。

今回はなんかいろいろとグダグダな感じですが……見逃してくれる
と嬉しいかな？

それではどうぞ。

第九問 「禁書目録」最終巻の一方通行さんはマジで泣きました

「て……めエ……」

息も絶え絶えに起き上がる一方通行（時雨綾斗）。なぜか本人がダメージを受けているんだけど、これは私達の能力の付与効果みたいなもの。

姿がシンクロしているのと同時に、召喚獣の操作も、ある程度影響しているって言えばいいのかな？ ようするに、『変身能力』を持った『観察処分者』みたいな感じ。物質干涉もできるしね。

と、まあ、そういうわけで、私の『超電磁砲』を召喚獣にモロ喰らった一方通行は、フィードバックを受けたってこと。ま、私達も本体同士で超能力使ってドンパチやってるんだけどね。

「あら、さっきまでの余裕はどうしたの？ もしかして最初っから虚偽脅しだったとか……」

「雀みてえにピーピー囀なみずってンじゃねエぞ、第三位！ まぐれ当たりが一回成功したぐらいで良い気になってンじゃねエだろオナア！」

「アンタもよく吠えるわねえ……。原作での『木原神拳』の原理を応用したの。それなのに、まあ同じ技に引っかけたのね。第一位が笑わせるわ。何が『最強』よ。どれだけハイスペックな演算能力積んでても、学習能力がゼロスベックなんじゃ、ザコも同然ね」

「……………てめエ」

虫をも殺せそうな眼力で睨んでくる一方通行。おー、こわいこわい。

「……………まアいい。とにかく今からそのおしゃべりな口をスタスタに引き裂いてやるからよオ……………覚悟しやがれ」

「ふうん……何？ どうせ『黒翼』でしょ？ そんなのはもう見飽きたっつうの」「

「ほざいてろ、格下ア！ おおオオオオああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ

絶叫。

それに伴って、一方通行の背中から、爆発的に黒い翼が広がった。一気に伸びあがった翼が、壮絶な武器と化して私へと振り下ろされる。

「死ぬエエエええええええええええええええええ
ツ???」

..... 十五分

「あア？……何っ！？」

その瞬間、天井を覆い尽くさんとばかりに広がっていた翼が、霧のように消滅した。……彼自身のタイムリミットによって。

「何……だと……？」

「アンタ、自分の能力の制限時間ぐらい覚えておきなさいよね。十分五分、もう経っちゃったわよ?」

「制限時間？ 俺には、そんなものは
もしかして、忘れちゃったの？」

私は、状況が掴めていない一方通行を小馬鹿にするように一瞥すると、言った。

「アンタは十五分制限の一方通行にしか変身できないってことを」

そう。『時雨綾斗』は、『制限付き一方通行』にしか、変身できないのだ。それは昔、綾斗自身がそう決めたから。「一番制限の短いバージョンの方が、カッコいいじゃん」と言っ、自分に制限をかけたからだ。

それを、どうやらコイツは忘れていたようである。

「んじゃ、まあ、能力の使えない第一位さんには、とっとと補習室にでも行ってもらうとしますかっ …… 吹っ飛べ！」

「グ……」

『Dクラス 一方通行（時雨綾斗） 164点 0点』

点数がゼロになる。それと同時に戦闘が終了したため、俺と綾斗の変身は解除された。ちなみに、さっきまで近くにいたDクラス生徒五人は、綾斗の黒翼に巻き込まれて戦死したようです。ご愁傷様。

「はあ……勝てると思ったんだがなあ……」

「ま、俺の作戦勝ちということだね。お疲れ様」

「けっ、相変わらず嫌な性格してんな、お前。……………それじゃ、俺は行くよ」

「おうっ、精々補習を頑張ってこいよ！」

「ふん……」

鉄人に連れられて補習室へと向かう綾斗。ふう……まあ、なんとか勝てたな……。

「よし、俺も前線部隊の援護に向かうとしますかっ」

第九問 「禁書目録」最終巻の一方通行さんはマジで泣きました（後書き）

ふう……。

「なにをそんなに疲れているのですか？ とミサカは素直に疑問をぶつけてみます」

あ、久しぶりだね。御坂妹。

「はい。かれこれ一か月ぶりです、とミサカはあまりの酷い扱いに思わず涙します。うえーん」

涙流さずに声だけで泣かれてもねえ……。ゴメンゴメン。高校が始まってから忙しくてさ、時間がなかったんだよ。

「……もう、いいです。それよりも今回のおさらいをしましょう」

ん、それもそうだね。

「今回は一方通行が悲惨でしたね、とミサカはポテトチップス片手に述べます」

急に不真面目モード全開！？ ……俺的には、もうちょっとどうかしようと思ってたんだけど……いやー、戦闘描写ってむずかしいですね。

「何を今更……と、ミサカは呆れてため息をつきます。はあ」

ま、とりあえず今回も無事に更新できたからよしとしてよ。

感想はいつでも大歓迎です。コラボもよければ是非やらせてください。

それでは次回

第十問 バカにはバカなりの戦い方がある！（前書き）

こんにちは。テスト期間真っ最中のふゆいです。
現代社会め、我を謀りおって……！

第十問 バカにはバカなりの戦い方がある！

【現代社会】問 以下の問いに答えなさい。

『1995年に提唱された、資源の使用効率を高め、廃棄物がゼロになることをめざすという構想の名称を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『ゼロエミッション』

教師のコメント

よくできました。

五月雨愛斗の答え

『循環型社会推進構想』

教師のコメント

循環型社会推進基本法が混ざってしまったのでしょうか？ しっ
かりと覚えておくようにしましょう。

吉井明久の答え

『サブミッション』

教師のコメント

島田さんの関節技はキレが鋭いですね。

これまでのあらすじ！

綾斗との戦いに勝利した俺、五月雨愛斗は、前線部隊の援護へと向かった。しかし、既に前線部隊は撤収した後であったため、俺はFクラスへと足を進めたのであった……。

教室に戻ると、明久が何故か両手に凶器を持ったまま、雄二と話していた。

「どうしたんだ？ 明久。そんな物騒なモノ持って」

「あ、愛斗じゃないか。無事だったんだね？」

「まあな。……で、何してるんだ？」

「うん。それなんだけど……雄二、愛斗、須川君がどこにいるのか知らない？」

ひきつった笑顔で、須川の所在を求める明久。もしかして、さっき流れた放送の件だろうか。船越先生を呼ぶためのあの放送。そんな明久に対し、雄二はあっけらかんと返事をしていた。

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「そうなんだ……やれる、僕なら殺れる……」

「殺るなつての」

「お前ら、字が違わないか？」

マズイ、このままでは須川が廃棄物と化してしまう……。しかし、そんな俺の予想は、一瞬で外れることとなった。

「ちなみに、だが」

雄二がニヤニヤしながら明久に話しかける。コイツ、まさか真犯人なんじゃ……。

「あの放送を指示したのは俺だ」

やっぱりか！

「シャアアアアッ！」

明久が鋭く踏み込みコンパクトに包丁を突き出す。どうやら、狙いは避けにくく致命傷になりやすい肝臓のようだ。右手の即席ブラツクジャックを死角となる雄二の頭上から　　って、ちょっと待て！

「落ち着け、明久！」

「離して愛斗！　僕にはこのバカの命を刈り取るという使命があるんだ！」

「そんな訳のわからない使命があつてたまるか！」

「よし。じゃあ俺達はDクラス代表の首でも取りに行くとするか」

「そうじゃな。ちらほらと下校している生徒の姿も見え始めたし、頃合じゃろっ」

「……………（コクコク）」

「おっしや！ 決着をつけに行くぞ！」

『おうつ！』

「あ、コラ！ 俺を見捨てて行くんじゃねえっ！」

「逃がすか、雄二いつ！」

「お前は落ちつけ！」

無情にも、教室から出ていく仲間達。くそう……………なんで俺が殺人未遂の現行犯を取り押さえねばならんのだ……………。

教室から、人の気配がなくなったところで、俺は明久の腕を離れた。

「お前なあ……………少しは自分の感情を抑える努力をしろ……………」

「なんで？ 悪いのは雄二じゃないか！」

「それはそうだけでも……………ってか、そんなことで一々キレていたら、お前は卒業するまでに何回警察のお世話になると思ってたんだ？」

「う……………それは……………」

「とりあえず、凶器は使うな。雄二に制裁を加えるのはいいとして、殺したら元も子もないだろう？」

「……………分かったよ」

「なら、よし。んじゃ、俺らも平賀を打ち取りに行くとしようぜ」

「……………うん！」

やっとこさ落ち着いた明久を伴い、渡り廊下へと向かう。すると、下校中の生徒に混じって戦闘を行っている両軍の光景が目に入った。

「下校している連中にうまく溶け込め！ 取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

雄二の声が戦場に響き渡る。

「そつちから回り込め！　俺はコイツに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を」

「日本史で」

うちのクラスの皆がDクラスの連中を取り囲んでいる姿がそこら中に見て取れる。下校中のドサクサに紛れて敵に近づき、取り囲んで討ち取るという姑息な作戦だ。

『Dクラス塚本、討ち取つたり！』

一際大きな歓声上がる。

先ほどから苦勞させられていた塚本をうまく討ち取ったようだ。各クラスのHRも終わり、先生たちを捕まえやすくなったおかげもあって、この作戦はうまくいっている。

「援護に来たぞ！　もう大丈夫だ！　皆、落ち着いて取り囲まれなように周囲を見て動け！」

どうやら、Dクラス代表の平賀源二のご登場のようだ。

「Dクラスの本体だ！　ついに動き出したぞ！」

うちのクラスの誰かの声が聞こえる。

これでこの廊下には双方の主戦力が集っていることになるな。

「本体の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！　他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

『おおー！』

平賀の号令の下、あつという間に雄二の周りがDクラスメンバーで囲まれた。

雄二も自分の周りに本隊がいるからそうそうやられはしないけど、こうなってくると戦況はかなり厳しいだろう。

「Fクラスは全員一度撤退しろ！ 人ごみに紛れて攪乱するんだ！」

相変わらずよく聞こえる雄二の声。

確かに状況はよくない。ここは一度退くべきだろう。

「逃がすな！ 個人同士の戦いになれば負けはない！ 追いつめて討ち取るんだ！」

見れば、本隊の奴らも分散し、追討にかかっているようだ。その分、平賀の防備が薄くなるが、平賀はDクラス代表。つまり最も点数の高かった人。Fクラス相手なら取り囲まれない限り負けはない。この戦力が分散した状況でその判断は正しいと言えるだろう。

戦況を窺っている俺の視界に、平賀の姿が入った。もう間に邪魔な近衛部隊がないほどに防備が薄くなっている。

「明久、今のアイツは無防備だ。今ならお前でもやれるかもしれないぞ？」

「ホントだ……よし、じゃあ僕は平賀君の所に行ってくるよ！」

調子づいた様子で平賀の下に駆け出す明久を見送る。さて、俺は代表様の援護にでも回るとしよう。

敵に囲まれている、長身の赤毛を見つけると、駆け寄った。

「随分と苦戦しているな。手伝うぞ」

「愛斗か！ 助かったぜ！」

「おう。どうせもうすぐ決着は着くんだろうけどな……その前にお前がやられたら全部水の泡だ。全力で守らせてもらう」

雄二を壁の方に押しやり、前へと出る。これで必然的に俺が戦うことになる。

「Dクラス瀬崎と津田がFクラス坂本に」

「Fクラス五月雨がいきます！ 試験召喚！」

「くっ、近衛部隊か……」

「臆するな！ 所詮、Fクラスだ！」

楽勝、といった様子で召喚を開始する二人。さて、その余裕がいつまで続くかな？

頭上に、点数が表示された。

「なんだと……！」

「そんな……バカな！」

二人の顔が驚愕に染まる。どうやら、想像していたのとは全く違う相手に、危機感を覚えているようだ。まあ、そうだよな……。

『Fクラス	五月雨愛斗	VS	Dクラス	瀬崎隼人&津田良平
古典	397点	VS		106点&1
15点	』			

Fクラス如きにここまで圧倒的な点数差をつけられているんだからな。

「勉強してから出直してこいや！」

馬鹿二人を一太刀の下に切り伏せて、補習室へと送り込む。もつと相手をよく見てから挑むんだな。

後ろでは雄二が俺に賞賛の言葉を送っていた。

「流石だな、愛斗」

「どうも。さて、それじゃあ明久達の所にも行くか？」

「いや、その必要はないと思うぞ？」

「は？ なに言ってるんだよ。急がないと明久が戦死

『くっそおおおおおおおっ！』

『やったね！ 姫路さん！』

『はいっ！』

その瞬間、Dクラス代表平賀源二の所から、一つの悲鳴と二つの歓声が上がってくる。

雄二は、野性味あふれる満面の笑顔で俺に笑いかけていた。

「決着が着いたみたいだからな」

第十問 バカにはバカなりの戦い方がある！（後書き）

如何だったでしょうか？

「やつとDクラス戦が終了しましたね、とミサカは思ったよりも長かった戦いに一つ安堵のため息をつきます」

そうだね。もうちょっと短くできるかな？ なんて思ってたんだけど……結果はこんな感じです。自分なりには纏めた方だと思います。

「今回は敗戦処理ですか？ とミサカは一応の確認を取ります」

そのつもりだよ。少しオリジナルが入ってくるかもしれないけど。

感想、お待ちしていますね！

それではまたお会いしましょう！

第十一問　あまりに調子に乗りすぎると逆に痛い目を見る（前書き）

こんにちは。連続投稿のふゆいです。

Dクラス戦も無事に終了したので、今回と次回は日常パートです。

そして、今回はあのAクラス三人娘の登場です。

それではどうぞ～

第十一問 あまりに調子に乗りすぎると逆に痛い目を見る

「ふう……さて、優子を迎えにでも行きますかね」

歓声に包まれるFクラスを後にし、俺はAクラスへと向かった。
た。

Dクラス戦の敗戦処理も終わったため、各自自由解散となっていたのだ。

テクテク歩くこと約三分。目的のAクラスに到着した。

下校時間はとくに過ぎているが、自習している生徒もいるだろう。やや控えめ気味にドアをノックした。

『はいはい。今開けますよ (ガラッ) 』

聞き覚えのない声と共にドアが開かれる。

開かれたドアの向こうには、見覚えのない女子生徒が立っていた。ショートカットの少女は、俺を観察するようにまじまじと見つめると、ニコツと笑う。

「やあ、もしかして君は五月雨君かな？」

「あ、えと……そうだよ」

急に話しかけられたため、やや緊張した返事になってしまった。そんな俺に、少女はまたもや快活に笑いかける。

「あははっ、そんなに緊張しなくてもいいよ？ ボクは工藤愛子。一年生の終わりに転入してきたんだ」

「へえ、そうなのか。通りで見たことがないと思ったよ」

「それじゃ、これからはよろしくねっ。……それで、うちのクラ

スに何か用かな？」

「ん？ ああ、木下優子はいるか？」

「オツケー、優子だね。着いてきなよ、連れてってあげるから」

工藤の後に続いて、Ａクラスへと入室する。

それにしても、すごい設備だな……。

Ｆクラスの六倍はあろうかというぐらいの広さに冷暖房完備の快適さ。ドリンクバーも備え付けで、どうやら冷蔵庫も置いてあるようだ。……Ｆクラスの教室とは月とスッポンだな。

「おーい、優子にお客さんだよっ」

工藤が俺を隠すように壁に押しやりながら優子に話しかける。一生懸命勉強に取り組んでいた優子は、ワンテンポ遅れて顔を上げたため、俺に気付くことはなかった。

「……あれ？ アタシにお客さんなんじゃないの？」

「そうだよ。でも、普通に会わせるだけじゃ面白くないでしょ？ 誰が来たのか当ててみてよ」

「いや、そんな面倒なことする必要あるの？ その人だってアタシを待ってるんだろっし、早く会いに行かないと」

「……むー、優子のマジメさん。分かったよ、じゃあ今から連れてくるから、優子は勉強に集中でもしてて」

「そうしてくれると助かるわ……」

そう言って、再び勉強にのめり込む優子。全く……相変わらずの集中力だな。周りのことが一切見えていないんじゃないか？

「……五月雨君っ、五月雨君っ」

工藤が、優子にバレないように俺に手招きをしてくる。俺は頭に疑問符を浮かべながらも、そちらへと向かった。

「どうした？」

「ちよつと優子を驚かせてやろうと思ってね。今の優子は周りが全く見えていないから、チャンスなんだっ」

「それは構わないが……具体的に？」

「お、ノリノリだね、五月雨君」

「まあな。面白そうなことには真っ先に首を突っ込むっていうのが俺の信条なのさ」

「それは素晴らしいことで。それじゃあねえ……優子の目の前に顔を置いてくれない？ 後はボクに任せてよ」

「ん、りょーかい」

言われた通りに、優子の前に移動する。

目の前には、一生懸命に問題を解く優子の顔があった。

難しい問題に差し掛かれれば、悩む表情になり、それが解けると、わずかに笑顔を浮かべている。うん。やっぱり優子は可愛いなあ……。

工藤は、俺の後ろに立つと、優子の名前を呼んだ。

「優子、呼んできたよー」

「うん、分かったわ」

「

顔を上げた優子は、しばしの間沈黙していた。……まあ、目の前にニヤニヤしている男の顔があったら、思わず驚く気持ちはわかる。そして、優子は叫び声と共に、俺の顔面へ渾身の右ストレートを放ったのだ。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ????」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアッ??？」

鼻っ柱を中心に、顔中に鋭い痛みが走る。折れる！ 鼻が折れる！
優子の予想外の行動に、工藤が慌てて止めに入った。

「お、落ち着いて優子！ それ以上やったら死んじやうよ！」

「いやっ！ いやっ！ （ボコッボコッ）」

「ぐはっ！ ゆ、優子、やめ……」

「あぁっ、もう！ 代表！ 優子を止めるのを手伝って！」
「……分かった」

工藤が近くにいた一人の少女に助けを求め、ようやく優子を落ち着かせることに成功した。

俺は、命の恩人であるその少女に礼を言つたために話しかける。

「あ、ありがとな。俺は五月雨愛斗。君は？」

「……霧島翔子。このクラスの代表」

「へえ……君が学年主席か」

「……うん」

コクンとつながずく霧島。なんだか日本人形みたいな人だな。……
ん？

突然、くいつくいつと後ろから服を引っ張られる。振り向くと、
やや沈んだ表情をした優子が俺を見上げていた。

「ま、愛斗……ゴメンね？ 動揺しちゃったとはいえ、あんなこ
として……」

「あー、うん。いいんだよ、気にしてないから」

落ち込む優子の頭を優しく撫でる。これは昔からよく優子にして

いる慰め的一种だ。

優子は、わずかに顔を赤らめたものの、気持ちよさそうに目を細めていた。

「わお　優子もスミに置けないねえ」

「……とても微笑ましい」

工藤と霧島が温かい目でこちらを見ている。オイコラ工藤。俺はお前の作戦で死にかけたんだが？

数分経ったところで、優子を離す。

「……ありがとう」

「いえいえ。……それじゃ、行くとしますか」

「え？　行くとどこに？」

首を傾げる優子。くっ……コイツめ……自分から提案しといてその反応かよ……可愛いから許すけど。

俺はため息をつきながら、ジト目で返した。

「どこって……今朝約束したじゃないか。行くんだろ？　クレープ」

「あっ……覚えてくれたんだ……」

「そりゃ、あそこまで痛い目見れば、嫌でも覚えるだろうよ……」

「ゴ、ゴメン……」

「だから謝らなくていいって。……それじゃ、俺と優子は帰るよ。じゃあな、工藤、霧島」

「うん　デート楽しんできてね」

「……応援してる」

「ちよっ、愛子に代表！？　これはデートとかじゃないってば！」

からかってくる二人に、顔を真っ赤にしながら反論する優子。

そんな微笑ましい光景に笑顔を浮かべながらも、俺と優子はAクラスを後にした。

第十一問 あまりに調子に乗りすぎると逆に痛い目を見る（後書き）

「今回は愛斗が酷い目に遭いましたね、とミサ力は主人公の自業自得っぷりに必死に笑いをこらえます。……ぷぷっ」

おい、こらえきれてないぞ……。さて、遂に登場しました、自称『得意科目は保健の実技』少女と、『ある特定の人物に限ってヤンデレ』少女が。

「なぜ、普通に名前で呼ばないのですか？ とミサ力はあなたの意味不明な行動に冷淡な表情で返します」

べ、別にいいだろっ！ 少しは作家さんっぽくやってみたかったんだよ！

「自作自演ワロタ、とでも返しておきましょうか？」

……放っておいてくれると助かります……。

「あらら、作者が落ち込んでしまいました。仕方がないので後はミサ力が締めるとしましょう」

「今回もこの作品を読んでくれてありがとうございます。まだまだ始まったばかりですが、どうか読者の皆様を落胆させないように一生懸命頑張っていきたいです」

「それでは、また次回お会いしましょう。感想もお待ちしています」

第十二問 五月雨愛斗の日常（前書き）

こんにちは。

今回はアンチ根本の人たちにとってはちょっと許せない内容かな？
まあ、楽しんでください。

第十二問 五月雨愛斗の日常

「うーん、楽しみだわ」

「クレープでそこまで喜ぶもんかねえ……」

あの後、Aクラスを出た俺と優子はクレープを食べるために、街へと出ていた。当然、二人とも制服のままである。

校門を出る際に、優子が『せつかくの機会なのに制服だなんて……はあ』とため息をついていたが、俺はただ苦笑するだけだった。

さて、今回の目的地は駅前にある喫茶店『ラ・ペデイス』。割と近くにあり、値段もそれなりにお手頃なので、文月学園生徒御用達の店になっている。

しかし近くと言ってもそれなりに距離があるため、俺と優子は暇つぶしついでにウィンドウショッピングをすることにした。

ピタリ、と優子とある洋服店の前で足を止める。

ジーツとショーウィンドウを見つめているので、そちらに視線を移すと、白い上着とセットで置いてある、薄緑のワンピースがあった。

「あ……あの服可愛いな……」

「そうか？　つてか、お前は基本家から出ないし家の中でも割と軽装だから、あんな服いらな俺の右腕の関節が大変なことない

っ……」

「ツギハ、ホンキデ、オル」

「笑顔で物騒なこと言わんでください！」

ゆるやかな動作で腕ひしぎを決めてくる我が幼馴染。いつも思うんだがコイツはどこでこんな技を覚えてくるんだ……？

いつまでもそこから離れようとしないうちに見て、俺は一つため

息をついた。

「買ってやろうか？」

「え？ ……いい、いいわよ別に。そこまでして欲しいわけじゃないんだし……」

俺の提案を、両手をブンブン振りながら拒否する優子。まったく頑固というか不器用というか……。

俺は再びため息をつく、優子の手を取って洋服店のドアを開けた。

「あっ……ちよっ……」

「これはお前が欲しかったわけじゃない。ただ、いつもの礼に俺がお前に買っただけだ。……それなら、いいか？」

「……あ、ありがと……」

「俺の希望で買ったから礼なんて言うなよ。ま、とりあえずお前はもう少し素直になった方がいいぞ」

「よ、余計なお世話よ……」

「へいへい」

さて、今月はちよつとばかり生活費を切り詰めますかな。

「えへへ……」

「すっげえ嬉しそうだな、お前」

早速、買ってやった服を着て笑顔になっている優子に俺は苦笑を返す。ちなみに、制服は今紙袋に入れて俺の腕に提がっている。

『よっしゃあ！ これで俺の三連勝だぜ！』

『少しは手加減してくれよ……』

『代表って意外とシューティングゲーム苦手なんだね……』

『きょーちゃんは頭脳派だからね……』

『だいひょー、次は私とやろうよー』

『もう、ダメだよ律子。代表が可哀想でしょ？』

『お前ら言いたい放題だな……』

と、前方のゲームセンターで何や聞き覚えにある声がした。
俺と優子は思わず顔を見合わせると、そちらへと足を進めた。

「ようしつ！ それじゃ、いっくよーっ！」

「これ以上負けてたまるか！」

「……何やってんだよ、恭二」

俺は、懷から百円玉を取り出し、勢いよく入金している男子

根本恭二に呆れの視線を送った。

根本恭二。文月学園では『卑怯者』として名が通っている男子である。『喧嘩に刃物はデフォルト装備』だとか、『球技大会で相手に一服盛った』とか。しかし、この噂は実は全部デマなのだ。というか、恭二があえて自分から流した噂だし。

本来の根本恭二は、多少根性がひん曲がっているものの、自分の周りの人を守るためなら全力を注ぐような良いヤツなのである。ま、そうでなきゃ悪友やってる俺がバカみたいなんだけだな。

「ん？ 見ての通りゲームだが？」

「そう言う意味じゃねえよ……」

「なんだよ。……お、そっちにいるのは木下姉じゃねえか」

「こんにちは、根本君」

挨拶を交わす優子と恭二。

優子も恭二とは中学からの知り合いということもあって、『卑怯者の演技をしていない』恭二を知っているため、割と仲がいいのだ（ちなみに秀吉も）。

「あ、まなつちだ！ 久しぶり！」

「やっぱりお前もいたか、雪奈」

恭二の背中に張り付いていた148？の少女

安藤雪奈

が太陽のような笑顔で俺のところに来る。恭二を最も昔から知る少女で、いつも恭二と行動を共にしている。

四人で和気あいあいと話していると、二人を取り巻くように立っていた残りの四人が俺の肩を叩いた。

「ん？ ああ、誰かと思えば、Bクラスの集まりだったのか」

「今まで無視できてたあなたにビックリよ……」

「まあまあ、五月雨君も悪気はないんだしさ」

「それにしてもこんなところで会うなんて奇遇だな」

「僕達が目立ちすぎてたから声かけただけなんじゃないの？」

二番目から順に、岩下律子、菊入真由美、工藤信二、芳野孝之。

四人ともBクラスのメンバーである。

岩下が、拳銃型のコントローラーを画面に向けながら、俺に話しかけてきた。

「でも、やっぱ噂って信じるものじゃないわよねー」

「は？ 突然どうしたんだ？」

「いやさ、だいひょーって『卑怯者だ』って言われてるじゃない？ 私も、今日までその噂を信じてただけだよ……」

「今日一日Bクラスで過ごしてみて、その噂がデタラメだって分かったのよ」

岩下の言葉を菊人が引き取る。

工藤と芳野が笑顔で続けた。

「いやあ、最初はマジでビビったぜ。なんたって、初っ端の挨拶が予想外すぎたもんな」

「『みんなは俺のことを卑怯者って思っているだろう。それは俺も認める。でも、これだけは分かってほしい。俺は代表として、一人の人間として、このBクラスのみんなを大切にしていくつもりだ。絶対に、このクラスは守り抜く』だったけ？ 最初の挨拶で一氣に僕達が持ってた『根本恭二』っていう人物像が木端微塵に崩れ去ったもんねえ」

そう言うと、四人は笑った。

どうやら、とある事情により『悪役』となった我が悪友にも、やっと友人ができたようである。

恭二が、恥ずかしそうに、頬をかいていた。

「……ちつ。なんで愛斗にまでバラすんだよ……」

「まあまあ、そんな顔しないで。さ、次行ってみよー！」

『おー！ー！』

「って、また俺の奢りかよ！？」

「だってだいひょーが大富豪弱いんだもん」

「罰ゲームなんだから我慢しろよ、な？」

「な？ じゃねー!!」

「それじゃ、僕達は行くね？」

「二人共、また明日ー!!」

嵐のように過ぎ去っていくBクラス集団。それを見送りながら、俺と優子は恭二の様子を見て笑っていた。

やっぱりアイツも、仲間と一緒にいる方が幸せそうだよ。

「んじゃ、とつとと食いにいきますかー」

「そうね。もうお腹すいちゃったー。早く食べて、早く家に帰りましょ？ せっかくだしアタシン家で何か美味しいものでも作ってよ！」

「へいへい。姫様の仰せのままに」

優子の手を取り歩き出す。一瞬、顔を赤らめていた優子だったが、すぐにいつもの調子になり、俺の腕に抱きついてきた。

やれやれ、これが幼馴染のスキンシップ以上っていう気持ちになつてくれるとありがたいんだけどなあ……。

「ただいまー」

「お邪魔しまーす」

『ラ・ペディス』で念願のクレープを食べ終えた俺達は、途中ス

パーで晩飯の材料を買い、優子の家へと向かった。俺の家も隣にあるため、一度家に帰ってもいいのだが、優子を待たせるわけにもいかなかったため、そのままの状態である。

「おかえりなさいなのじゃ。ん？ 愛斗も一緒かの？」
「どうも、秀吉」

既にパジャマ姿となっている秀吉が玄関へ姿を現した。ヘアピンも外しているため、今の秀吉は優子と見分けがつかないぐらいである。

「今日は愛斗が御飯作ってくれるってさ」
「む、そうなのか？ それは楽しみじゃのう」
「お手柔らかに頼むぜ……」

買い物袋を台所に置き、調理の支度を始める。ちなみに優子の話によると、今日は両親が出張のため不在らしく、丁度良かったようだ。

「あ、それじゃ、アタシはお風呂入ってくるねー」
「うむ。分かったのじゃ」

そういうと、着替えを持ったまま優子が脱衣所へと向かう。ほう、風呂か……。

「待つのじゃ愛斗。包丁を置いてどこへ向かうつもりかの？」
「いや、ちよつと……トイレまで」
「トイレは廊下じゃ、そっちにあるのは風呂場じゃぞ」
「……………ちつ」

「お主今舌打ちをしたな！？ 自分のやろつとしていることをよく

考えてみるのじゃ！」

「大丈夫。昔はよく一緒に風呂に入っただろ？」

「小学校低学年の話じゃけどな！　今それをしたら確実に警察へ一直線じゃぞ！？」

「……わかったよ……大人しく調理に入りますよ」

「最初からそうしてくれればよいものを……」

人參の皮を剥き、包丁で一口大に切っていく。うん、我ながら見事な包丁さばきだ。

『ふんふんふん』

風呂から聞こえてくる優子の鼻歌をBGMに切った野菜を鍋の中へ。さて、今のうちに肉を切りますかね。

『きやつ、もう、秀吉め……シャワーの温度、冷たくしたままじゃないの……』

サアアッ……と水の音が響き渡る。テレビも点いていないため、その音が一層よく聞こえるのだ。

切った肉を入れ、カレールーを投入する。今日の晩御飯はカレーなのだ。

『むう……まだ大きくならないなあ……アタシだって、いつかは代表や姫路さんみたいに……』

優子の苦悩の音が聞こえてくる。おそらく、自分のある一点の成長度合いを心配しているのだろう。やれやれ、乙女は悩みが多いってか？

ご飯を盛り付け、その上からカレーをかけていく。よし、完成…

…っと。

『あつ、ちよつ、やつ、シャワーが変なところに当たって……ひゃうっー』

……。

……。

「……………もう、限界だ……………」

カレーライスをテーブルに置き、ユラリと立ち上がる。目指すは……優子の艶姿だ。

「ま、愛斗よ、落ち着くのじゃ。確かにお主はよく耐えた。あの精神をガリガリと削る姉上の無防備ボイスに、お主にしては随分と頑張ったものじゃが……………」

「どけ、秀吉。男には時にやらねばならぬことというのがあったよ」

「それは決して今じゃなからう!？」

「くつ、なら、優子を島田に変換して考えてみる！ お前なら耐えられるのか!？」

「そ、それは……………」

「ほら！ 想像してみろよ！ 島田がすぐ近くで服を脱いでいて、島田がすぐ近くで一糸纏わぬ姿になっていて、島田がすぐ近くでシャワーを浴びていて、島田がすぐ近くで微かな嬌声を上げている状況をさ！」

「……………ワシの……………負けじゃ……………」

秀吉が、地面に膝をつきながら右手で鼻を抑えている。どうやら、結構完璧に想像してしまったようだ。わずかに前屈みになっている

のは、あえて触れないでおく。

さて、俺はターゲットの姿を拝みに行くとしますかね。

「ま、愛斗……やめるのじゃ……」

まったく外傷がないのに何故か息も絶え絶えな秀吉の制止を振りほどき、脱衣所のドアに手をかける。

ふふふ、ついに我が悲願を達成するときが……。

「どりゃあああ！」

思いつきドアをオープン！
そこには我が幼馴染が

しっかりとパジャマを着こんだ姿で立っていた。

「馬鹿なああああああっ！！」

なぜだ！　なぜ既に服を着てしまっているんだ！　神よ！　我を見捨てたのですかあああああ！！

「なっ……なっ……！！」

優子が顔を真っ赤にしながら俺をまじまじと見る。突然の状況に、頭の処理が追いついていないのだろう。

俺は、そつと脱衣所のドアを閉めた。

『……まああああなああああとおおおおっ！！』

その晩、俺が命を落としかけたのは言うまでもないだろう。

第十二問 五月雨愛斗の日常（後書き）

はい。いかがでしたでしょうか？ 今回は、雑談コーナーをお休みして、少しだけシリアスな話をしたいと思います。

さて、今作の根本の扱いですが、気に食わないという人も多いでしょう。原作では、姫路の手紙を盗んだり、様々な卑怯な手を使っていました。

しかし、僕はこう思うのです。

他の作者さんの作品の中で、根本は凄まじいほどのクズとして扱われている。確かに、仕方のないことだろうが、少しぐらい彼にも幸せがあってもいいんじゃないか？ と。もう、十分なくらい報いは受けたんじゃないか？ と。

だから、僕は根本を『卑怯者の皮を被った善人』として、書くことを決めました。

これは偽善かもしれませんが、綺麗事かもしれませんが。

それでも、それでも僕は、彼に幸せを与えてやりたいのです。人間らしい人生を歩ませてやりたいのです。

長々と書きましたが、これが今回、根本をこういう風に扱った理由です。

分かってくれる人は少ないとは思いますが、それなりに考えてくれると幸いです。根本がなぜあんな噂を自ら流したのかは、また後日書きたいと思います。

それではまた次回お会いしましょう。

感想、お待ちしております。

第十三問 必殺料理人（前編）（前書き）

こんにちは。 中間考査で驚愕の点数を取ってしまい焦りに焦っているふゆいです。

いや、勉強しろって話なんですけどね（笑）
とにかく、第十三問です。

第十三問 必殺料理人（前編）

翌朝、俺、優子、秀吉の三人はいつも通り学校へ向かった。
新校舎と旧校舎の間にある渡り廊下で、優子と別れる。

「それじゃ、アタシはこっちだから」

「うむ」

「ああ、また放課後な」

今日は試召戦争で消費した点数を補給する為にテスト漬けのはずだ。頑張らないとな。

「ちーっす」

「おはようなのじゃ」

教室の戸をガラガラと開ける。

相変わらずの畳と卓袱台。Dクラスの設備はもったいなかったんじゃないか、と思わないこともないが、雄二にも作戦があるようなので気にしないことにした。

「おはよー、愛斗、秀吉」

「二人とも、ギリギリだな」

既に到着していた明久と雄二が後ろの卓袱台で胡坐をかいている。教科書を持っていることから、大方、テスト前の悪あがきでもしているのだろう。

明久が、「そういえば……」と口を開いた。

「皆には何も言われなかったの？」

「ん？ 何がだ？」

「Dクラスの設備のこと」

「あ、そういやそうだな。折角勝ち取ったのに占領しないなんて、普通は不満に思うだろうし」

「そのことなら大丈夫だ。皆にもきちんと言明をしたからな。問題ない」

「ふーん」

皆が素直に言うことを聞いたのは昨日の雄二の働きを評価してのことだろう。もっと上を狙えるかもしれないとわかった以上、Dクラス程度の設備には興味がなかったところだろうか。

そんな話をしていると、いきなり雄二がニヤニヤしながらこんなことを言い始めた。

「それより明久、昨日の後始末は良いのか？」

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かっていながら行動するなんてありえないよ」

「いや、雄二の後始末のことじゃないだろ」

「え？ じゃ、一体なんなのさ？」

「お主ら、さつきから何の話をしておるのじゃ？」

と、荷物を置いた秀吉が俺達のところに来てきた。

俺は、今までの流れを軽く説明する。

「ふむ。なるほどのう。大体の状況はわかったのじゃ」

「それじゃ、後始末がどういう意味かわかったの？」

「うむ。その意味はじゃな」

「木下っ！」

「じぶあつー！」

秀吉の台詞が突然の拳で遮られる。驚いてそちらを見ると、随分といきりたったご様子の島田が、拳を握って立っていた。島田よ、理由は知らないが、そんなに恐怖のオーラを出さないでくれないか？ 明久がロデオマシンのような震えを見せてるから。

地面に叩きつけられていた秀吉が、頬をさすりながら立ち上がった。

「し、島田、おはようなのじゃ……」

「おはようじゃないわよっ！ アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、得意の演技で、ウチを消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね……！」

「あ、あれには日本海溝よりも深い理由が……」

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない！」

「まだ上がる余地があつたのかよ……」

「あゝ？ 何か言つた？ 五月雨」

「なんでもありません」

光速で上半身を直角に曲げて謝罪する。どうやら、触れてはならない部分に触れてしまったようだ。くわばらくわばら。

秀吉が、胸ぐらを掴まれたまま、必死に反論していた。

「あ、あれは仕方なかったのじゃ！ あの状況で逃げ出すためには、ああするしかなかったんじゃないの……」

「それじゃあランキングの件はどうしてくれるのよっ！？」

「ワ、ワシ的にはライバルが減って逆に一安心なんじゃが……」

「とりあえず、向こうで話しあいましょうか。五月雨、このバカを少し借りるわね」

「愛斗、助けてくれ！ このままではワシの命の灯が！」

「……すまねえ秀吉。俺も自分の命が惜しい」

「愛斗！？ 愛斗オオオオオオオ

（ズルズル）」

世紀末に立ち会ったような表情で地獄へと連れて行かれる秀吉。とりあえず後で葬式の値段を確かめておくとしよう。

一時間目のチャイムが鳴る。俺と雄二は教室の脱出口の全てを塞ぐと、先ほどの答えを明久に提示してやった。

「明久、一時間目の数学のテストだが」

「うん」

「監督の先生、船越先生らしいぞ」

「さらばだっ！」

その名を聞いた瞬間、身を翻す明久。しかしそうは問屋が卸さない。

教室の窓にはすべて鍵がかかっている上に、後ろのドアでは島田と秀吉が『O H A N A S I』中だ。よって抜け出すためには教室の前のドアから出るしかないのだが……。

「ここは通さないぜ、明久」

「そういうこと。大人しくお縄に付けよ。我が親友さん」

「あんたらは最低の親友だ！」

五分後、教室にとある観察処分者の悲鳴が響き渡った。

「うあー……づがれだー」

明久が机に突っ伏している。

とりあえず四教科が終了。ただでさえテストは疲れるのだが、更に明久は船越先生と一悶着あったため余計に疲れていた。

ちなみに船越先生には俺の近所のお兄さん（三十八歳／独身……お兄さん？）を紹介しておいた。これ以上明久を追いつめるのも可哀想だし。

「ま、確かに疲れたな」

「ワシも同感じゃ」

「……………（コクコク）」

いつのまにか秀吉とムツツリー二が近くに来ていた。なぜか明久がポニーテール状態の秀吉に顔を赤らめているが、あえて触れずにおく。

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日にはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「どついう体の構造してんだよ、お前」

「カロリーが異常に高そうじゃのう」

勢いよく立ち上がり、食堂へ向かおうとする雄二に秀吉と二人でツツコミを入れる。体のかいやつは食いしん坊と相場が決まってもいるのだろうか。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「む、島田か。別に構わんぞい」

「それじゃ、混ぜてもらうね」

「……………（コクコク）」

ムツツリーニが頷いているのは下心のせいだろう。秀吉もそう考えたようで、ボソツと呟いていた。

「島田に色気を求めても無駄だろうに」

「なんか言った？ 木下」

「滅相もございません」

なんて恐ろしい感なんだ。

まあ、とりあえず今は待ち望んだ昼休み。美味しいものでも食べて元気を出そう。学食だからそこまで美味しいというワケでもないが。

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを」

「あ、あの。皆さん……………」

明久が立ち上がり、学食に行こうとしたところで声をかけられた。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……………、お、お昼なんですけど……………その、昨日の約束の……………」

姫路がもじもじしながら俺達の方、主に明久を見ている。どうしたんだろうか？

「おお、もしや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と、身体の後ろに隠していたバッグを出してくる。

おお……飯だ！ 金銭的にも空腹的にも非常にヤバい俺と明久にとつては、救世主、いや、女神のようだぜ！

「迷惑なものか！ な、明久！」

「うん！ もちろんさ！」

輝く瞳でサムズアップ。今、俺達は猛烈に感動している！

「そ、そうですか？ 良かったあゝ」

ほにやっとな嬉しそうに笑う姫路。明久に近づけたことが嬉しいのだろう。

「う、ウチだつて頑張れば弁当ぐらい……木下にも……作れるもん……（ごによごによ）」

隣で顔を俯かせながらぼそと呟いているポニーテールもなかなかのお年頃だ。

「それじゃ、せっかくのご馳走だし、こんなカビ臭い教室じゃなくて屋上にでも行こうぜー」

「そうじゃな」

こんな廃屋のような環境で食べていいような物じゃない。屋上の気持ちいい空間で最大級の感謝を持って食すべきだろう。

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ。飲み物を買ってくる」

「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「む、島田よ、ワシが行くからお主は待っておくのじゃ。女の子が労働をする必要はないぞい」

珍しく労働を買って出る秀吉。島田に気遣いができるところを見せようとしているのがバレバレだ。

「そ、そう？ それなら、よろしくね」

「うむ。それじゃ、行くとするかの、雄二」

「ああ。ちゃんと俺達の分までとっておけよ」

秀吉と雄二は財布を持って教室を出て行った。きっと一回の売店に行ったのだろう。

「俺らも行くか」

「そうだね」

姫路が抱えていたバッグを明久が受け取り、屋上まで歩く。結構重そうだ。随分と大量に作ってくれたんだな。感謝感謝。

「天気が良くてなによりね」

「そうですねー」

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空。美少女二人がよく映える。

「あ、シートもあるんですよ」

姫路がバックからビニールシートを取り出す。俺も用意を手伝うとするかな。

わいわいと準備を始める。幸い屋上は他に人もいなくて俺達の貸切状態だ。

「気持ちいいなー」

「……………（コクコク）」

ビニールシートに足を投げ出す。草原のような解放感が気持ちよかった。

「あの、あんまり自信はないんですけど……………」

姫路が重箱の蓋を取る。

『おおっ！』

俺達は一斉に歓声を上げた。

凄く旨そうだ。唐揚げやエビフライなどの定番メニューから、ハンバーグまで詰まっている。

「それじゃ、坂本達には悪いけど、先に」

「……………（ヒョイ）」

「もらいつー！」

「おいっ！　ずるいぞ二人共！」

動きの速いムツツリー二と食い意地の張った明久がエビフライをつまみ取った。

そして、流れるように口に運び

ボタン

ガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「……………」

「……………」

島田と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君！？ 吉井君！？」

姫路が慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落す。

「……………（ムクリ）」

「……………」

ムツツリーニが起き上がった。明久は、まだ目覚めない。

「……………（グッ）」

そして、姫路に向けて震える右手でサムズアップ。

多分、『凄く美味しいぜ、べらんめえっ！』と伝えたいんだろう。江戸っ子みたいな台詞なのは、決して俺の心の動揺ではない。決して。

「あ、お口に合いましたか？ 良かったですっ」

ムツツリーニの言いたいことが伝わったのか、姫路が喜ぶ。姫路

よ、まずは明久が一向に目を覚まさないことに不信感を覚えるべきじゃないか？

「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路が笑顔です勧めてくる。

そんなに純粋な笑顔を向けられてしまうと、思わず食べてしまおうという気にさえなってくる。

だが、俺達には目を虚ろにして痙攣している明久とムツリーニが忘れられない。

（五月雨……あれ、どう思う？）

隣で引き攣った笑みを浮かべていた島田が、姫路に聞こえないくらいの小さな声で俺に話しかけてきた。

（……どう考えても演技には見えないな）

（だよな。ヤバイわよね）

（島田。お前、身体は丈夫だろ？）

（あら、もしかしてウチみたいな女の子に行かせる気？ 木下さんに言いつけるわよ）

（くっ……卑怯な……）

表情は当然笑顔のまま。この驚愕を必殺料理人に悟られるわけにはいかない。

（なにが卑怯よ！ あんたそれでも男なの！？）

（お、女みたいな顔だからいいんだよ！）

（なぁに、木下の立ち位置を奪ってるわけ！？ あんたは正真正銘の男でしょうが！）

（お、お前だつて男みたいな性格と胸してんじゃねえか！）
（なに？ あんたもしかしてケンカ売ってる？）

何故か口論になってしまった俺と島田が、掴み合いの喧嘩をしよ
うとしたところで、

「おう、待たせたな！　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ
？」

雄二（生け贄）登場。

「雄二、これ美味しいぞ」
「そうか？　それじゃ頂くぞ」

俺の言葉に一片の疑いも持たず素手で卵焼きを口に放り込み、

パク　　　　　　　　　　ボタン　　　　　　ガシャガシャン、ガタガタガ
タガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

第十三問 必殺料理人（前編）（後書き）

感想、お待ちしております。

第十三問 必殺料理人（後編）（前書き）

久しぶりです。

バカテス、アニメ第二期が始まりましたね。海水浴に合宿、木下姉妹（笑）も入れ替わり騒動。

どれもこれも楽しみな物ばかり、続きが待ち遠しいですね。さて、それではお楽しみください。

第十三問 必殺料理人（後編）

「ゆ、雄二！？ 一体どうしたのじゃ！？」

遅れてやってきた秀吉が雄二に駆け寄る。

……うわあ、ここまでの殺傷力とは……。

釣られた魚のように痙攣を繰り返していた雄二は、俺の方を見ると、目でこう訴えていた。

『毒を盛ったな』と。

『毒じゃねえ、姫路の実力だ』

俺も目で返事をする。親友だからこそできる技。こういうときはすごく便利だ。

「あ、足が攣ってな……」

息も絶え絶えに気を遣う雄二。いや、他人を気遣う前に自分を気遣えよ。食わせた俺の台詞じゃねえけどさ。

「あつはつは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないか？」

「ええ、そうでしょうね」

「そうか？ 雄二はこれ以上ないくらい鍛えられていると思うのじやが」

事情の分かっていない秀吉が不思議そうな顔をする。余計なことを言い出す前に退場させてしまおう。

「ところで秀吉。その手についているあたりにだな」

ビニールシートに腰を下ろしている秀吉の手を指差す。

「ん？ 何じゃ？」

「さっきまで鳥の糞があつたぞ」

嘘だけど。

「そ、そんなことは早く言わんか！」

「すまんすまん。とにかく、手を洗って来いよ」

「言われなくても行くわい……」

ダッシュで階段を降りていく秀吉。これで犠牲者は最低限に抑えられるはずだ。

「木下はなかなか食事ができないでいるわね」

「全くだ」

はっはっは、と生き残り三人組で快活に笑う。

一方その後ろ側で俺達は必死に作戦会議を行っていた。

（愛斗！ 今度はてめえがいけっ！）

（無理だつつうの！ 俺のデリケートな胃袋があんな化学兵器に耐えられるとでも！？）

（大丈夫。お前なら逝けるさ）

（漢字が違う！ 俺を殺す気か！？）

（アンタは率先して坂本を犠牲にしたでしょうが……）

（っていうか、島田が行けばいいだろ！ 体丈夫なんだし！）

（ウチはか弱い女の子なの！ もういいわ、五月雨、覚悟なさい…

…）

（え、ちよつ、一体何を　　）

「瑞希！ あれは何！？」

「えっ？ なんですか？」

島田が指した明後日の方向を姫路が見る。

（隙あり！）

（もごあぁっ！？）

その隙に島田は俺の口の中一杯に弁当を押し込んだ。
同時に込み上げてくるなんともいえない痛み。

（ぐっはぁぁっ！ 胃がつ、胃がぁぁぁっ！？）

「ふう、これでよし」

「……お前、意外と鬼畜だな」

一仕事終えた棟梁のように汗を拭く島田。引き攣った笑みを浮かべる雄二。だんだんと意識がブラックアウトしていく俺。

ああ……見える、俺にも見えるよ……三途の川が。

そして、数秒もたたないうちに俺は意識を手放した。

「そつえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

地獄という名の昼食を終え、復活した皆でのんびりお茶をすすする。

「……………（ずずー）」

「……………（ずずー）」

「……………（ずずー）」

俺と明久、ムツツリー二は殺菌作用があると言われるお茶を大量に飲んでいた。

ちなみに秀吉はお茶だけにしかありつけていない。本人は憤慨していたが、島田が飯を奢ってやるということなので、秀吉的にもまあラッキーだろう。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

そういえばさっき雄二が言っていた。Dクラスの窓の外にあるBクラスの室外機に用があると。

まさか他のことに使うわけでもないの、おそらく次の標的はBクラスなのだろう。

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

島田がコクンとかわいらしく首を傾げる。秀吉、口元が緩んでいるが、気付いているか？

雄二は島田の質問に神妙な面持ちで答えた。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

「どうしたのさ雄二。いつもの雄二らしくないよ？」

「……………Aクラスの上位格は化け物レベル」

「ムッツリーニの言うとおり。特に代表の霧島はその中でも実力が段違いだ。いくら操作能力に長けている俺や明久がいても、到底歯が立たない」

「それじゃあ、ワシらの最終目標はBクラスに変更ということかの？」

秀吉が顎に手を当てて呟く。隣では島田が同じように考え込んでいた。

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

「……………なるほど。そういうことか」

「？ 坂本君の思ってることがわかったんですか？」

「ああ。つまりはこういうことだ。俺達の戦力じゃいくら戦争をしたところで上位層に一掃されるのがオチだ。だが、クラス単位で勝てなくてもAクラスに勝てる方法が一つだけある」

「……………一騎打ち」

ムッツリーニが答える。ずっとカメラの手入れしたくせにこういうときだけはしっかりと答えるんだな。

俺はそれに静かに頷いた。

「ご名答。んで、Bクラスを使ってAクラスに一騎打ちをけしかける気だろう。……………明久、試験召喚戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？ も、もちろん！」

……………知らねえな、コイツ。

「はあ、いい加減ルールくらい覚えろよな。……雄二、よろしく」
「人の役目を奪つといてよく言うぜ……。……負けたクラスは設備を落とされるんだ。つまり、BクラスならCクラスの設備、といった具合にな」

「そう。それじゃ、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「雄二、ペンチ」

「ややっ。僕を爪切りいらすの身体にする動きがっ」

「……安心しろ、爪は拾ってやる」

「骨を拾ってよ！」

涙目で叫ぶ明久。本当に本気でコイツを殺したくなるのは、仕方ないよな？

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよね？」

「姫路の言うとおりだ。だから、そのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、かの？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

雄二が自慢げに作戦を説明する。しかし、俺は一人ただ考えていた。

確かに、雄二の作戦ならAクラスを手に入れることができるだろう。同時にBクラスまで手駒にできる。しかし、本当にそれでいいのか？

Bクラスの代表は根本恭二。俺の親友であり、悪友のアイツがいるクラス。

そんなクラスを攻めることなんて……俺には、できない。

「雄二」

気が付くと俺は雄二の名を呼んでいた。雄二がゆっくりこちらを振り向く。

「どうした？ 俺の作戦に不満なところでも？」

「そうじゃないんだが……今から、Bクラスに行つてこようと思うんだ」

「……どうするつもりだ」

「Bクラスを、説得してくる」

「え？ そんなの無理だよ愛斗。だってBクラスの代表はあの根本くんなんだよ？」

心配そうに言う明久。その言葉に俺と……秀吉はわずかに顔をしかめた。

とある事情により悪役を演じている恭二。勿論、そのよつて恭二の名は悪い意味で知られてしまっている。明久の反応も極々当たり前のものだろう。

……しかし、昔からアイツを知る俺や秀吉にとってはただのくだらない、許せない噂だ。

俺はふつつと沸いてくる感情を必死に抑えながらも、雄二に言つた。

「頼む、行かせてくれ、雄二」

「……ワシからもお願いするのじゃ。愛斗を、行かせてやってはくれぬか？」

「………はあ」

雄二が諦めの表情でため息をつく。そしてパンツと俺の背中を叩いた。

「いっ！？」

「……お前にも、なにか思うところがあるんだろう？　なら、行つて来い。……絶対しくじるんじゃないぞ？」

「雄二……」

「いいから早く行けよ。説得で戦争が避けられるならそれに越したことはないからな」

「……オッケー、俺と秀吉に任せとけ」

「うむ。心得たのじゃっ」

秀吉と共に教室を出る。

……とりあえず、Bクラス戦だけはなんとしても回避しなきゃな……。

第十三問 必殺料理人（後編）（後書き）

感想、お待ちしております。

番外編 『万能演人』と『過激派筆頭』の日常（前書き）

こんにちはーす！

今回はなんと『試験召喚のすすめ』とのコラボです。

秋雨さんからのお叱りを覚悟しつつ書きました。

それではどうぞー

番外編 『万能演人』と『過激派筆頭』の日常

朝から雀も囀りそうなほどよく晴れた空。

本日も絶好のスクールライフ日和である。

いつもは悪い意味で騒がしい文月学園も、さわやかな陽の光に当てられてか、落ち着いた様子を醸し出していた。……………とある四人を除いては。

『イツシャアア

？』

Fクラスの教室に二つの雄叫びが木霊する。そんな二人の様子をクラスメート達は『またか…………』というような表情でボケーンと眺めていた。

「はあっ、はあっ…………やるじゃねえか、光一…………」

「嬉しくもなんともねえんだよ、バカ愛斗…………」

教室の中心で睨みあう二人。【過激派筆頭】の名で知られる拳銃マニアの久遠光一と【万能演人】の二つ名を持つ変身能力保持者の五月雨愛斗だ。

光一が愛用のエアガンを愛斗に向けながら言った。

「お前といい雄二といい、朝っぱらから元気なことだな…………」

「うるせえ！ 朝っぱらからお盛んなのはどっちの方だ！？ Aクラスの教室で工藤とイチヤイチャしやがって！ 羨ま憎たらしいぞこのヤロウ？」

「完璧にやつあたりじゃねえか。というか、イチヤイチャしたいなら優子の所にも行ってきたらどうだ？ 喜んで接してくれると思っぞぞ？」

「もう行つたわ！ 『朝から何変なこと言つてんのよ、アンタは？』
つて追い出されたんだよ」

「知るかよ……」

血涙を流す愛斗に顔を引きつらせる光一。そのとき彼の心の中では確実に目の前の幼馴染への好感度が著しく下がっていただろう。
まあ、当然の結果である。

「……ねえ雄二。僕達つてなんで戦っているんだっけ？」

「なんでつてそりゃ……あの二人に巻き込まれてだろ？」

「そうだったね……雄二、パンでも買いに購買に行かない？ お腹減っちゃった」

「そうだな。後はバカ二人に自由にやらせておくとするか」

そういつて教室を出ていく明久と雄二。どこかの平行世界と違って、この二人の仲はそこまで破綻していないようだ。……原作よりも少しばかり仲が良い様子である。

二人が出ていき、ほんのちよつとだけ静けさを取り戻したFクラス。しかしそれでもバカ共の怒りが収まるわけはなかった。

「とにかく、堪忍しやがれ……！」

「お前、たまに島田や姫路レベルの嫉妬を見せることがあるよな……」

「せからしか！ 御託はいいけんさつさといひよ？」

「何故に博多弁！？」

律儀に突っ込みながらもエアガンを放つ光一。愛斗は上半身を最低限捻ることでその全てを回避した。

そして、被弾した卓袱台がけたたましい音を立てて粉碎する。

「……………！」

「ちっ、相変わらず嫌な反射神経してやがる」

「お前絶対殺す気だっただろう！？　どんな攻撃力なんだよ、そのエアガン！」

「俺の拳銃をそんじょそこのエアガンと一緒にされてもらっちゃ困るな。……これは、フルチューンバージョンだ」

「そんな情報は聞きたくなかった！」

元々攻撃力が高い武器を更に改造してどうするのか、というツツコミも頭に浮かんだが、それを口に出す暇は全くない。

光一は一ミリたりとも遠慮せずにゴム弾をぶっ放す。

「ほらほら、どうしたどうした！　逃げてばかりじゃいつまでたっても勝てねえぞ？」

「調子に乗りやがって……『変身』？」

キーワードを唱えると同時に愛斗の身体がまばゆい光に包まれる。そして次の瞬間には、いままでとは全く違う姿をした、五月雨愛斗が毅然とした様子で光一を見上げていた。

「いい加減にしないと、風穴開けるわよ！」

「……………小っちええ……………」

「なんですって！？」

変わり果てた愛斗の姿に思わず言葉を漏らす光一。

神崎・H・アリア。二丁拳銃と二本剣を使う、S級武偵である。

某アニメに登場するヒロインだが、今回は説明を省かせてもらおう。アリア（以下、変身が解除されるまで呼び名はこれ）は愛用のコルト・ガバメントを太腿のガンホルダーからさっと抜き出すと、光一の眉間に向けた。

「アンタ……死にたいの？」

「ちよつと待て。それは実弾か？ それともゴム弾か？」

「何言ってるの？ 武偵が偽物なんて使うわけないでしょ。勿論、実弾よ」

「はい、ダウトオオ

ッ？」

光一がアリアをビシッと指差す。どうやらさすがの光一でも相手が実弾となると恐怖心がわくようだ。

光一は冷や汗を垂らしながら捲し立てた。

「実弾とか完全にアウトだろ！ 『冗談で済むよー』とか『ちよつと痛いだけだから』じゃ収まらないからな！？ いくら俺が動体視力が良いって言ってもそれはシヤレにならん！」

「大丈夫。一発で終わらせてあげるから」

「そつという問題じゃねー？」

バンツバンツと放たれていく銃弾を必死にかわす光一。クラスメイト達も被害を被らないよう卓袱台を重ねてバリケードを作っている。

しかしまあ……普通に学校の、しかも教室でこんな銃撃戦が行われるなんて……流石は文月学園である。

数分ほど経ち、とうとう弾が切れたのか、それまで嵐のように撃たれていた銃弾がピタリと止んだ。

「ちつ……弾が……」

「隙あり！」

光一がエアガンを発射する。弾は対清水用の最高攻撃力バージョンド。

弾を詰めていたアリアは飛んでくる銃弾をなんとかかわそうと試みたものの、動作が間に合わず鳩尾にそれを喰らってしまった。

「うっ」

「？」

為すすべなくアリアは壁へと叩きつけられる。そして、同時に全身を光の粒子が包み込んだ。

「うぐう」

「やっと元に戻りやがったか」

変身が解けた状態で蹲っている幼馴染のもとへと足を進める光一。
愛斗は腹を抑えながらキツと光一を睨みつけた。

「おのれ光一……今日帰ったら覚えておけよ……」
「まだ朝なんだが？ 随分と早急な死刑宣告だな」
「うるせえ……ガクリ」

わざわざ声に出して気絶したことを表明する愛斗。光一は「はあ……」と溜息をつきながら携帯を取り出した。
無言でとある番号をプッシュし、コールする。

『……もしもし？』

「あ、優子か？ ちょっと預かってほしいバカがいるんだけど」

愛斗の人生が、終了する瞬間だった。

放課後、久遠家にて。

「愛斗、風呂沸いたぞ」

「オツケ、ありがとな」

「どういたしましーして。それにしても、鍵を壊すとはお前もホントにバカだよな」

「うつ……言い返せない……」

光一の発言に愛斗はわざとらしく胸を抑えてのけ反る。

今朝の騒動で光一から放たれた銃弾。それが見事に愛斗の鍵を粉碎したため、今夜は光一の家へと泊まりに来ていたのだ。

光一が包丁を取り出しながら台所へと向かう。

「まったく、お前も少しは落ち着けよな」

「うるせえよ。俺は昔からこんなヤツだったの」

「だから尚更言っただよ。優子も呆れてたぜ？」愛斗があのバ

カ集団と同じようなノリになってきてるわ……」ってさ」

「そう言われてもなあ……」

ポスンとソファに座り込む愛斗。

愛斗にとって、Fクラスの皆はもはやかけがえない仲間も同然だ。それはF F F団の奴らも同じ。しかも、仲間のノリにはことん着いていくというのが愛斗の信条だったりする。

愛斗は苦笑しながら言った。

「お前達に迷惑をかけているのは重々承知しているさ。優子にだつてとばかりがいつているのも。でもさ、俺はそれでもあいつらと一緒にバカ騒ぎするのが好きなんだよ。いくらお前や優子が止めたとしても、それだけはずっと変わらない」

「……まあ、いいんじゃないの？ 来たら来たで毎回返り討ちにすりゃいいだけだし」

「ははっ、そりゃ怖いな」

五月雨愛斗と久遠光一。

性格は全く正反対の二人だが、お互いがお互いを信じあっていることは確かなようである。

ちなみに、廊下のドアから某木下優子が二人の様子を顔を赤くしながらノートに書き留めていたのだが……これはまったくの余談である。

次の日から『光一×愛斗』という薄い本が女子の間で大流行することとなったのも、完全なる余談であるということをここに記しておこうと思う。

番外編 『万能演人』と『過激派筆頭』の日常（後書き）

感想、お待ちしております。

第十四問 たとえバカだろうが神童だろうが必死に考えるときは精一杯考える

こんにちは。

多すぎる宿題に今日も頭を抱えているふゆいです。

この頃小説の更新が滞ってるなあ……。

第十四問 たとえバカだろうが神童だろうが必死に考えるときは精一杯考える

「して、どうやって戦争を回避するのか、考えておるのか？」

隣の秀吉が足を進めながら質問してくる。

秀吉の質問ももつともだ。雄二に啖呵切ってまで教室を飛び出したのだから、絶対に成功させなければならぬ。

しかし……愚問だな、秀吉よ。そんなの

「無計画に決まっているじゃないか」

「……………お主、たまに明久以上のバカになるのじゃないか」

お、俺をそんな目で見るな。悲しくなるだろ。

しかしまあ、実際のところ本当に無計画。なにしろ、俺は雄二ほど頭が回るわけではないし、明久のように根性で押し通せるほど意志は強くない。

唯一の案といえば、幼馴染のよしみでなんとかするぐらいのものだ。

「とにかく、当たって砕けろだ」

「砕けたらダメじゃろ」

冷静に突っ込みを入れてくる秀吉。こんな状況でも一切動じないコイツは、やっぱり一流役者である。

そんなこんなで、新校舎のBクラス教室へと到着した。

秀吉とアイコンタクトを取り、コクンと頷く。

「……………せーのっ」

ガラツ

「根本恭二を出せええええええええええ？」
「……………は？」

Bクラスの皆様、とても良いお顔、ありがとうございました。

愛斗がBクラスへと向かっている頃。

Fクラスでは対Bクラス戦の作戦会議が行われていた。

「ということだが……何か質問はあるか？」

クラス代表の雄二が教壇に立ち、会議を仕切っている。基本的にバカしかいないこのクラスが、あれほどの複雑な作戦を実行できるのはひとえにこの少年のおかげと言っても過言ではないだろう。

雄二の作戦について、クラスメイト達が近くの人とヒソヒソと話し始める。Dクラスを下した彼らではあるが、今回は更に格上のBクラス。少しでも勝率を上げなければならぬことはバカの彼らも重々承知しているつもりだろう。

「坂本」

と、ざわめきの中で一人の男子が雄二の名前を呼んだ。雄二はその声の主を見ると少し驚いたように片眉を吊り上げる。

「お前が作戦について反応するなんて珍しいな……須川」
「うるせえよ」

後ろ髪を少し刈り上げた短髪の少年、須川亮が雄二の失礼な発言に怪訝な顔をする。Fクラス主要メンバーの雄二達ほど目立っていないが、前回のDクラス戦でもそれ相応の働きをした、主戦力の一人である。

雄二は謝罪代わりに片手を翳したが、すぐに真剣な顔つきになると、話を促す。

「それで？ 質問があるんだろ？」

「ああ。……Bクラス代表、根本恭二についてなんだがな……」

その瞬間、ザワツと教室が一段と騒がしくなる。

根本恭二。以前にも述べたとおり、卑怯卑劣で名の知れた悪い意味での有名人だ。同時に、五月雨愛斗の悪友でもある少年。

無論、このクラスでも彼は悪役としてしか知られていない。だからこそ、彼らは一様に恭二の人物像に反応を示したのだ。

亮は皆の反応に軽く頷きつつ、言葉を続けた。

「坂本はさっき、『卑怯で知られた根本恭二』って言ったよな？」

「ああ、そうだが？」

「俺も、その認識自体は間違っていないと思うんだ。実際、去年のアイツの噂だって随分とアレな内容だったしな。……でもさ、そんな卑劣な奴だってわかっているはずなのに、五月雨と木下はどう

して交渉なんていう無謀なことを考えたんだ？」

「……………さあ？ あいつらにも何か策があつたんじゃないか？ 戦争は避けられるならそれに越したことはないからな」

「でも、それにしておかしな点が多すぎる。そもそも、五月雨はあんなに突発的に行動するようなバカじゃない。それに、あのときの五月雨の表情も不可思議だった。『万能演人』や『萌えの王者』とまで呼ばれているアイツにしては、珍しいくらいの動揺っぷりだったぜ？」

「お前も随分と懐かしい二つ名を引つ張ってくるな。それを覚えている読者なんているのか？ ……………だが、言われてみればそうかもしれない。あの時の愛斗はいつもの愛斗らしくなかったな」

今の雄二の台詞に、メタな発言があつたことを心からお詫びさせてもらいたい。

亮はそんな雄二の失言に構いもせず、話を進めた。

「だろう？ 後、これは根本本人に対してなんだが……………去年もちよくちよく見かけていたことがあるんだ」

「見かけていたこと？」

「Bクラスにさ、安藤雪奈っていうロリっ娘がいるだろ？」

「ああ、あのロングヘアーのチビか。そいつがどうかしたのか？」

「その安藤がさ、いつも根本に付きまわっていたんだよ」

「……………だから？ 結局何が言いたいんだ？」

「つまりさ、滅茶苦茶卑怯な根本に、あんな純真無垢な安藤が懐いているっていうのは、おかしな話だとは思わないか？」

「……………なるほど、そう言われてみると、そうだな」

亮の言葉に、深く思考し始める雄二。確かにおかしなところが多すぎる。

雄二の肯定で自分の考えへの確信が深まったのか、亮は真剣な面

持ちで言い放った。

「おそらくなんだが……根本恭二は、本当は卑怯でもなんでもなかった上に、実は五月雨や木下が思わず庇おうとしてしまうくらい良い奴なんじゃないか？」

亮が発したその言葉によって、Fクラス42名の醸し出す空気の温度が凄まじい勢いで下がっていった。

第十四問 たとえバカだろつが神童だろつが必死に考えるときは精一杯考える

感想、お待ちしております。

第十五問 本当に大切なものは勉強でも運動でもなく……。 (前書き)

こんにちは。

最近応募用の小説を書いている、ふゆいです。

ときどきアイデアが出て来なくなるんですよね……。ま、楽しいからいいですけど！

それでは、第十五問です。最近なんだかシリアスだなあ……。

第十五問 本当に大切なものは勉強でも運動でもなく……。

「と、いうわけなんだ」

「なるほどな。つまり、お前達は俺達Bクラスに協力を申し入れに来たわけだ」

向かい合わせに並べられた席に座り、恭二に用件を述べた俺。恭二は全てを理解したようにウンウンと頷いてた。

その恭二の反応を好感触ととったのか、秀吉が目を輝かせながら恭二に詰め寄る。

「で、では承認してくれるのじゃな！」

「だが断る」

「……………は？ お主、今なんと」

「断るって言ったんだよ。木下弟」

秀吉を冷たくあしらい、おもむろに席を立つ恭二。……やっぱり、そう来たか。

呆然と立ち尽くしている秀吉を尻目に、恭二が淡々と告げていく。

「確かに、学年最底辺のお前達FクラスがAクラスを倒すためには、俺達の協力が必要不可欠なんだろう。そうじゃねえと話も聞いてくれないだろうからな」

「そ、そうじゃ！ だからワシらはこうやって頼みに」

「だが、それは俺達Bクラスにとってどんな利益をもたらすっていうんだ？」

「そ、それは……」

「最下層クラスに駒として使われた弱小クラスという肩書。それだけじゃねえ、仮にもAクラスに負けてしまったらクラス設備まで下

がっちまうんだぞ？ そんな危ない橋をそうやすやすと渡ってくれ
るでも思っていたのか？ てめえは。だとしたら、ずいぶん甘
ちゃんだぜ」

「……………」

恭二の言葉に、言葉を失い俯くしかない秀吉。確かに恭二の言う
とおりだ。

今回の戦争は俺達が勝手に始めた、ただの下剋上。他クラスにと
ってはいい迷惑でしかない意味のない争いだ。無理に手を出してペ
ナルティを受けてしまうような危険は誰だって御免被るだろう。

雄二はそれを分かっていた。だから、危険を冒してでもBクラス
を配下に付けようとして戦争の計画を練っていたのだ。

…………でも、だからって…………親友を無理やり抑えつけるような真似
は俺にはできない。だからこそ俺は雄二に無理を言ってまで敵陣に
乗り込んできたんだ。今更こんなところで退くつもりはさらさらな
い！

俺は突然バンツと威圧的に机を叩いた。いきなりの暴挙にBクラ
ス生徒達が一様に俺の方を見る。

「恭二、どうしても協力する気はないんだな？」

「…………ああ、勿論だ。俺は仲間達をみすみす危険にさらすような真
似は絶対にしたくない」

「…………オツケー、それなら、こうしようじゃないか」

そういつて携帯を取り出しとある番号へとコールする。同時にデ
イスプレイに表示される『須川亮』の文字。

何回かのコール音の後、ガチャリと電話の相手は通話を開始した。

『もしもし？ どうしたんだ？ 五月雨』

「須川、頼みがあるんだが、いいか？」

『ああ。それで、頼みって？』

「突然なんだけどな…………… Bクラスの教室に、鉄人を連れてきてほしいんだ」

『……は？ どうしてまた急にそんなことを……………』

「なに、大したことじゃないさ。ただな」

俺はそこで一旦会話を止めると、恭二を一目見て、教室中に響くくらいの声で、言い放った。

「ここの代表に、模擬試召戦争を申し込むだけのことだよ」

『ここの代表に、模擬試召戦争を申し込むだけのことだよ』
「なん……………だと……………？」

電話の向こうから聞こえた愛斗の台詞を聞いて、Fクラス代表坂本雄二はそんな驚きともとれる眩きを漏らした。

突如として亮にかかってきた電話。不審に思った雄二はそれを横から聞いていたのだが……………思っていたよりもずいぶん切迫している内容であるようだ。

「貸せっ」
「のわっ」

背筋に悪寒が走った雄二は、乱暴気味に亮から携帯を奪い取ると、大声で怒鳴った。

「おい、愛斗！ てめえ何考えてやがる！」

「……雄二か。なにをキレているんだ？ お前は」

「なんでじゃねえよ！ 勝手に先行しまくった拳句最終的には『代表に一騎打ちしかけます』だと！？ 少しくらい俺達に相談してから決めろよ！」

「……すまん。でも、そんな状況じゃないんだ」

「……………どういうことだ」

愛斗の静かな物言いに思わず押し黙る雄二。愛斗は一旦溜めるように黙ると、真剣な口調で言った。

『雄二達には悪いと思っている。作戦全部ふいにしてその上自分勝手な行動してんだからな。でも、それでも俺は、コイツを……恭二を説得しなきゃいけない。それが俺なりのお前達への誠意だし、なにより幼馴染としてコイツとやりあわなきゃ、お互いに意見を聞かねえと思うんだ』

「……………だったら、どうするんだよ」

『模擬試召戦争で、恭二を倒す。それで、俺達の要求を飲んでもらう。……………それだけだ』

《クラスの命運を俺に任せてくれ》

つまり愛斗はそう言っているのだ。『そんな屁理屈……』と雄二が再度文句を言おうとする。……………そのときだった。

「愛斗にさ、任せてみない？」

突然発せられたキーの高い声。雄二が思わず音源の方を振り返る。

「明久……」

「ねえ雄二。愛斗にだって何か策があるはずだよ。今までだってそうだったでしょ？ いっつも何か作戦を立ててから行動してたよね。『萌えの王者』とか『万能演人』とか言われている愛斗なんだ、絶対にやってくれるさ」

「……お前は、いいのか？」

「うん。僕は愛斗を信じている。アイツなら百%勝つと思っているし、負けるわけないじゃないか。なんたってFクラスの要なんだから」

そういうと明久はニコツと笑った。

（……そう、だな……）

「信じてみるか」

雄二が再び携帯を顔に当てる。そこには、さっきまでのような陰しい表情は全く存在しなかった。

「愛斗」

『………なんだ？』

「俺達はお前に賭けることにした。俺も、明久も、ムツツリー二も、姫路も、島田も、須川も……そして、クラスの皆も。お前が絶対勝つことを信じている。……だから、絶対に負けてくんない。………それだけだ」

『……サンキューな、雄二』

「いいさ、ただし、負けたら承知しねえからな！ 相棒？」

第十五問 本当に大切なものは勉強でも運動でもなく……。 （後書き）

感想、 コラボの承諾、 お待ちしています。

第十六問 それぞれの思い（前書き）

こんにちは。後期補習真つ最中のふゆいです。
三人称と一人称、使い分けが難しいですよね。
それではお楽しみください。

第十六問 それぞれの思い

文月学園体育館。

愛斗と恭二は、お互いを睨みつけるかのように対峙していた。

Bクラス代表とFクラス生徒との一騎打ちという聞いたこともないような無謀な戦い。その噂をどこからか聞きつけて、学年クラス問わず多くの学生がこの戦いを観戦しに、野次馬根性丸出しで集まっている。

「……それでは、準備はいいか？ 二人とも」

立会教師の鉄人こと西村宗一が二人に確認をする。

「もちろん、いつでもいけるぜ」

「はい、大丈夫です」

相変わらず敬語を使わずに返事をする愛斗と落ち着き払った様子の恭二。

そんな二人の周りでは、数えきれないほどの観客が試合開始を今か今かと待ち續けていた。

「な、なんか凄いね……」

Fクラス専用特設座席に座っている吉井明久が顔をひきつらせながら会場の雰囲気冷や汗を垂らす。

最初は二年生だけの戦争だったのにもかかわらず、いまや全校クラスの規模になってしまっているこの戦争。そもそも、最下位クラ

スであるFクラスが上位クラスを下したという事実が最早信じられないものである為、他学年の生徒は、そのFクラスとはどんなものなのかに多大なる興味を示していた。

そんな明久の呟きに、隣に座っていた坂本雄二が腕を組んでふんぞり返りつつ言葉を返す。

「そりゃあ、俺達みたいな落ちこぼれがここまで善戦していたら、どんな奴らでも興味は持つと思うぜ？」

「それはそうだけどさあ……まさか、こんな大袈裟になるなんて思ってもみなかったよ」

「……それは同感だな。学園長は一体何を考えているのやら」

本来ならばBクラスの教室だけで収まっていたはずなのだが、どこから駆けつけた学園長の藤堂カヲルがこんなことを言い出したのだ。

『どうせなら、学園総出で行おうじゃないかい』

Fクラスが勝利すれば勉強の苦手な生徒への励みになるし、Bクラスが勝てば上位層の自信にも繋がる。

そんな考えがあったのだろうが、生徒たちにとってみればただのイベントと変わらず、その上授業もつぶれるので一石二鳥だった。

「しかし……勝てるのか？ 五月雨は。相手は一応Bクラス主席だぜ？」

「須川の言う通りかもしれないわね……いくらAクラス候補の五月雨と言っても、隙を突かれれば負けかねないわ……」

亮の呟きに美波が同意を示す。それほどまでに、このクラスの差は大きかったのだ。

そんな二人の反応に、秀吉と瑞希、そしてムツツリー二が反論した。

「勝てるに決まっています！ 五月雨君を信じましょうよ！」

「そうじゃ！ 愛斗は絶対に負けたりはせん！」

「……………愛斗をナメるな」

Fクラスメンバーのテンションは、もはや最高潮に達していた。

Dクラス用観客席

「まったく……………なんで美春があんな豚野郎の試合を見なければなら
ないのですか？」

「まあそう言っくなよ美春。アイツは一応俺の親友なんだからさ」

溜息をつきながら嫌そうな顔をしている少女とそれを必死になだめる少年。清水美春と時雨綾斗だ。

学期初日の試召戦争でFクラスに敗北を喫した彼らだったが、Fクラスの戦況が酷く気になっていたようだ。

静かにもめる二人をジト目で見ながら、Dクラス代表平賀源二がこっそり溜息をついた。

「はあ、ウチと違ってFクラスは人材が豊富みたいだね……………」

どうやら彼も相当苦勞しているようである。

Bクラス専用特設座席

「きょーちゃん……大丈夫かな……」

椅子にちょこんと座っている小動物のような少女、安藤雪奈が心配そうな声を漏らす。

そんな彼女を励ますかのように、Bクラス二人娘の岩下律子と菊入真由美が快活な台詞を言う。

「そんな心配しないでまだいじょーぶだってー！　なんとってあの
だいひょーだよ？　負けるはずないよー」

「そうそう、代表は頭いいんだから、大丈夫大丈夫」

「うん……」

しかし、雪奈の表情は未だに暗いままだ。

「……ちよつと工藤君、なんとかしなよ」

「俺に言うなよ……そういう芳野が安藤を励ませばいいだろう？」

「僕は基本的に異性とかかわりは苦手なんだよ……」

「それなら言うなつての……」

はあ、と大袈裟にため息をつく二人……工藤信二と芳野孝之。

Bクラスは少しばかり弱気な雰囲気にも包まれていた。

Aクラス用観客席

「あつ、優子優子！ 五月雨君だよっ」
「そんな大声出さなくても分かつてるわよ……」

愛斗を指差してはしゃいでいる少女と、少女に呆れた視線を送る少女……工藤愛子と木下優子だ。

愛子は優子の反応に「ぶー」と不貞腐れたように頬を膨らませた。

「優子、ノリが悪いなー。もうちょっと喜んだりしたら？」
「なんでそんなこと言われるかが分からないのだけど」
「だってさあ……優子の好きな人なんだよ？ 五月雨君」
「げほっ」

愛子の突然の確信をついた発言に思わずお茶を吹きだしかける優子。そして愛子をキッと睨むと、大声で叫んだ。

「き、急になんてこと言い出すのよ！」
「えー？ だって本当のことじゃん？ ボクは嘘は言っていないよ？」
「嘘じゃなかったら良いっていうわけじゃないでしょうが！ アタシの身にもなってみなさい！」
「……好きってことは否定しないんだね？」
「っ？」

愛子の指摘に優子が顔を真っ赤に染める。

「あ、愛子！」

「優子ったら照れちゃって可愛いなーもう」

「……ううっ、なんでアタシこんな目に会っているのよ……」

お約束です。

「……愛子、優子、試合が始まる」

と、騒いでいた二人をAクラス代表霧島翔子が落ち着いた口調で諭す。

「はい。ほら、しっかり五月雨君を応援しなきゃ」

「い、言われなくても分かっているわよ……」

ニヤニヤ笑いを浮かべている愛子が楽しそうに優子を茶化す。

優子はそんな愛子に呆れながらも、誰にも聞こえないような声で呟いた。

「……頑張ってね、愛斗……」

「それでは、両者準備は整ったようだな」

西村が二人の様子を見て、状況を把握する。そして、大声で高らかに宣言した！

「只今より、Fクラス特別代表五月雨愛斗対Bクラス代表根本恭二との模擬試合を始める?」

ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア

割れんばかりの歓声が、体育館を包み込んだ。

第十六問 それぞれの思い（後書き）

感想、お待ちしています。

番外編 『万能演人』と『紅の修羅』の少し変わった日常（前編）（前書き）

こんにちは。

まだ本編もともに進んでいないのに再びのコラボです。でも、見捨てないで頂けると幸いです。絶対更新しますので。

さて、今回は『バカとテストと召喚獣』紅の双子姫』とのコラボとなっています。まうさんに怒られないといいのですが……

それではお楽しみください。

番外編 『万能演人』と『紅の修羅』の少し変わった日常（前編）

とある休日のこと。

「「「……………」」」

FクラスメンバーとAクラスの二人

光國葵、坂本雄二、

木下秀吉、土屋康太、島田美波、姫路瑞希、光國楓、木下優子

は商店街の電信柱に身を隠しながら、前を歩いている二人組を訝しげにじいつと見つめていた。

「おい…………マジなのか…………？」

「あたしに聞かないでよ…………」

「……………怪しい」

雄二の呟きに葵と康太が続く。

そこにいる全員が冷や汗を垂らしながらこんな言葉を漏らしてしまつくらい、今現在彼らの目の前で起こっている事態はあまりにも不自然だったのだ。……………そう。

「ほらほらー、早く行くぞ、明久」

「あ、ま、待ってよ愛斗！（ガシッ）」

「お？ 随分と積極的だな」

「愛斗が早かったただけでしょ…………」

「そうか？ まあ別に構わないが」

…………『万能演人』五月雨愛斗（ ）と『観察処分者』吉井明久（ ）が仲睦まじく腕を組みながら歩いていたのだ。

「「「……………」」」

その場にいるメンバー全員が思わず顔を見合わせる。
そもそも、なぜこのような事態になってしまっているのか。
それは、昨日の放課後にさかのぼる

金曜日の授業が終わり、後は週末を迎えるために帰宅するだけとなった放課後。

クラスメイト達が荷物を持ち各々の目的地へと向かっていく。
それは『観察処分者（学園一のバカ）』である吉井明久も例外ではなかった。

「~~~~~」

陽気に鼻歌を歌いながら帰り支度をする明久。
荷物を纏め終わり、席を立とうとした時だった。

「明久」

突然、後ろから声をかけられる。

持ちかけた荷物を再び卓袱台に置くと、明久は後ろを振り向いた。

「ん？ 愛斗じゃないか、どうしたの？」

「よっ。帰ろうとしているところ、悪いな」

明久に声をかけた人物 五月雨愛斗が、謝罪代わりに片手を翳しながら明久の前に立っていた。

明久が卓袱台に腰掛けつつ、話を促す。

「それで、僕に何か用なの？」

「ん。用っていうか……その……」

言いにくそうにゴモゴモと口ごもる愛斗。そんな珍しい彼の様子に、明久は頭に疑問符を浮かべている。

そして、少したったとき、ようやく愛斗が口を開いた。

「あのさ、明久」

「うん」

「……………明日、二人だけで一緒に出掛けないか？」

「……………へ？」

そのときの愛斗は頬に若干の赤みが差していた、と光國葵は語った。

と、いうわけで。

「あたし達はアキちゃんと五月雨くんを尾行しているってわけよ」
「お姉ちゃん、誰と話しているの？」
「ううん、気にしないで。ちょっとした大人の事情だから」

楓の疑問にパタパタと手を振りながら葵が答える。他作品の主人公というのはいつも大変なものである。

ちなみに、今回の尾行が始まったのは、昨日の二人の様子を見ていた瑞希と康太がそれぞれ女性陣と男性陣に報告。そして、いつも通り雄二が先導して開催を決定したからである。

「それにしても、随分と仲良さげじゃのう。あの二人は」
「そうね。まるで付き合っているみたい」
「「「っ?」「」」

美波の失言に、瑞希、葵、楓の三人がビクウツと肩を震わせた。

「そ、そんなわけないじゃない。ねえ姫路さん」
「そ、そうですよつ。吉井君と五月雨君がそんな関係のわけ……ないじゃないありませんか……」

「そうだよねつ。そ、そんな非現実的なこと……ない、よね……」

だんだんと尻すぼみになっていく三人。

と、ここで不思議なことに気が付いた雄二がとある一人の方を向
きながら言う。

「ありゃ？ そういえば木下姉はどうしたんだ？ アイツも落ち込
んだりしているはずじゃあ……」

そう。木下優子は幼馴染である愛斗に恋愛感情を抱いているのだ。
あんな二人の光景を見れば、もちろん彼女も例にもれず三人のよう
な反応をするはずなのだが……。

雄二の疑問に、秀吉が溜息をつきながら優子を指差した。

「姉上は……ほれ」

秀吉が差した方向を全員が見る。

「愛斗は、自然と高鳴る鼓動……を、一生懸命抑えながら……明久
の手をギュッと握り、しめた。それと同時に、明久の頬にわずかな
赤みが、差す……」

「壮絶超展開薔薇小説『五月雨愛斗×吉井明久』バカなお前は俺の
もの」を絶賛執筆中じゃ」

「……」

そこには、今にも鼻血が出らんほどに顔を赤らめながら荒い鼻息
で携帯電話のボタンをプッシュしている優子の姿があった。

そんな彼女を見て、一同が言葉を失う。

「優子ちゃん……そんなことを……」

「木下姉だけは、マトモだと思ってたんだがなあ……」

「……予想外」

「木下さんって意外と乙女趣味なのね……」

「……へ？ みんなどしてアタシの方をそんな可哀想なものを見るような目で見ているの？」

「「「なんでもない」」」

「ぎゃ、逆に気になるんだけど……ま、いいわ」

そう言って再び執筆作業に移る優子。もう駄目だこの人重症すぎてヒロインっぽくなくなってる（地の文です）。

そんな感じで優子の真の趣味が発覚したあたりで、黙って二人の様子を伺っていた葵と瑞希が声を荒げた。

「あつ、ちよつとみんな！」

「吉井君達が喫茶店に入っていききましたよ！」

残りの全員が慌ててそちらに顔を向ける。

そこには二人で仲良く笑いあいながら喫茶店のドアを開ける二人の姿がまばゆいばかりに存在していた。

しばらくの沈黙がメンバーに訪れる。

そして、ようやく雄二が口を開いた。

「……さて、どうする？ このメンバーだと確実にアイツらにバレ

ちまう。かといってここで解散するのも勿体ねえ」

「どうするって……」

「………少数精鋭で動くしかない」

「………じゃな」

康太の言葉に、コクン、と全員が頷く。そして、瞬時に右手を前に突き出した。

雄二 グー

葵 グー

瑞希 チヨキ
康太 グー
秀吉 グー
美波 チヨキ
優子 グー
楓 チヨキ

「んじゃ、これで決定だな」

「ふう……危なかったあ」

「うう、気になりますよう」

「……………ラッキー」

「うむ、しっかりとやるかの」

「てか、ウチは実際どうでもいいんだけど」

「愛斗と吉井君の……うふふ」

「優子ちゃん、キャラが変わってるよ」

勝利した五人と負けた三人が対照的な反応を見せる。つーかアンタら、そんなにクラスメイトの秘密を知りたいのか。

「そんじゃ、後は任せておけ」

「わかりました……」

「さて、ウチも帰りますかね」

「あつ、島田よ。ワシが送っていくぞい」

「え？ でも木下はメンバーでしょ？」

「気にするでない。後から合流すればよいのじゃからの。な、雄二」

「ああ、構わねえから行ってこい」

「うむ、それじゃあ行こうぞ、島田」

「う、うん」

「お姉ちゃん、ご飯作っておくからね？」

「りょーかい。じゃーね」

四人が元来た道を引き返していく。それを見送り、葵達は喫茶店へと入っていった。

番外編 『万能演人』と『紅の修羅』の少し変わった日常（前編）（後書き）

感想お待ちしております

番外編 『万能演人』と『紅の修羅』の少し変わった日常（後編）（前書き）

こんにちは。

今回は前回の続きとなっています。
なんか無理やりな展開だなあ……。

番外編 『万能演人』と『紅の修羅』の少し変わった日常（後編）

二人の後を追って、喫茶店へと入った葵、雄二、康太、優子の四人。

愛斗達に見つかからないように、彼らからは死角となる席へと陣取った葵達は、メニューで顔を隠しながら、こっそりと二人の様子を伺っていた。

「明久はホントバカだよな」

「あ、愛斗にそんなこと言われたくないよっ」

目の前には、顔をやや朱に染め、そっぽを向いている明久と、それを見て楽しそうに笑っている愛斗の姿がある。

「……………（グシャッ）」

「落ち着け光國。お前の気持ちはよく分かるがとりあえずその今にも粉碎されそうなコップを早く置け」

二人の仲睦まじい様子に葵が怒りを露わにする。彼女の反応も無理はない。女である葵が一緒にいるときも、あんな照れたような表情はめったに見せないのだし、その上その相手が男の愛斗なのだ。込み上げてくる怒りも凄まじいものだろう。

「うう、アキくん…………」

「…………とはいったものの、流石にあれば不自然だな…………」

机に突っ伏して涙目になっている葵を慰めながらも、雄二は思考をめぐるしく張り巡らせる。

（そもそも、あいつらは同性愛者じゃねえ。それは昔からツルんで
いる俺が一番よく分かっている。明久だって、久保から好意を向け
られた時は寒気がすると言っていた。ということは別にアブノーマ
ルに目覚めたわけでもない……。一体どうなってやがんだ……？）

全く状況が掴めない雄二の額に冷や汗が流れる。……そんなとき、

「……………（クワツ）」

「？ どうした、ムツツリーニ」

突然、隣の康太がカツと目を見開き、傍らに置いてあるカメラに
慌てて手を伸ばしたのだ。

雄二がつられて康太の視線の先を見る。

「愛斗、そのパフェ少し食べさせてくれない？」

「ん？ 別に構わねえぞ」

「ありがとう……う」

「どうした？ 急に手を止めて」

「いや、その……このままだと、お互いのパフェの味が混ざっちゃ
いそうで……」

「ああ、そんなことか。……ほらよ（ヒョイツ）」

「え？ いいの？」

「仕方ねえだろ？ お互いのスプーン使っしか方法ねえんだから」

「う、うん……そ、それじゃ……あーん……」

「ん」

「（パクツ）……………うん、美味しいよ」

「そうか、そりゃよかったな。そんじゃ次はお前のをくれよ」

「うんっ」

「……………」

明久と愛斗がそれぞれのスプーンでお互いのパフェを食べさせあっていたのだ。

「くふっ」

そんな光景を目撃してしまった雄二と葵が二人そろって昏倒する。葵に至っては、両目から血涙まで流していた。

「そんな……バカな……」

「アキくん……やっぱり男の方が好きなの……？」

「……（カシャカシャ？）」

「……（ガチャガチャッ？）」

そんな二人の困惑を他所に、康太と優子はそれぞれカメラと携帯電話を巧みに操っていく。

「……掘り出し物」

「はあああ……これは売れるわ……傑作よっ」

「お前ら……この状況でよくそんなことができるな……」

二人の行動に、雄二が溜息をつく

雄二の質問に優子は「あはは」と笑いながら答えた。

「だってさ、愛斗が同性愛者じゃないってことぐらいみんな知っているでしょ？ アタシだってそんなことは百も承知よ。それに、あの二人はいつもの延長上のことをしているだけっばいし」

「延長上って……バカップルもびっくりなことやっているんだが」

「それでもね。だってあの吉井君と愛斗なのよ？ THE 鈍感コンビがあんな積極的なことするわけじゃないじゃない」

「……………いつもの調子」

「そうかなあ……………それだといいんだけど」

ようやく復活した葵がノロノロと体を起こしながら言う。

しかし、そうはいつでも心配なものは心配である。

葵達は引き続き、二人の監視を再開していた。

「あ、そういえば……………」

しばらくたった時、突然愛斗が口を開いた。

「うん？ どうしたのさ、愛斗」

「いやさ、そういえば今日、晩飯の材料買ってないなーって」

「ふうん……………じゃあさ、僕ん家に来たら？ ご馳走してあげるよ？」

「え？ でも、お前そんな金あるのか？」

「大丈夫。葵達が管理してくれているおかげで貯金があるからさ」

「そうか……………じゃ、お言葉に甘えするよ」

「うん……………今日は寝かさないよ？」

「……………！？」

明久の唐突な発言にメンバーが目を丸くする。

「なん……………だと……………？」

「い、いや、聞き間違いよ。吉井君に限ってそんなこと……………」

「……………驚愕」

「あ、アキくん……………」

他者多様の驚きを見せる四人。あんなに余裕そうにしていた優子でさえ、驚きを隠せないようだった。

怒髪天をつくを表現するかのようにおさげを怒らせている葵に慄きながらも、明久が返事を返す。

そんな中、今まで呆気にとられていた愛斗が葵と明久の間に入り込んだ。

「やめろ、光國」

「五月雨君！ アンター一体アキくんをどうするつもりなのよ！」

「まず落ち着け、話はそれからだ」

「これが落ち着いてられるかあああああああああああああああ
あ？」

ズガン、と葵が目の前のテーブルに拳を振り下ろす。

その瞬間、テーブルが小気味よい音と共に粉々に砕け散った。

「……」

いきなりの暴挙に言葉を失う雄二、康太、優子の三人。

しかし、そんな中でも愛斗だけは混乱せずに葵を必死に止めていた。

「だから、落ち着けって言っているだろ！？ お前は何か勘違いをしている！」

「勘違い！？ どこが！ あの会話のどこに勘違いする要素があったの！？」

「だあかあらあ！ ……あーもう！」

「明久が『寝かせない』って言ったのは、徹夜でゲームするってことだ！」

「「「……………へ?」「」」

シン、と喫茶店内が静まり返る。愛斗はゼーゼーと肩で息をしなから言葉を続けた。

「お前らが商店街の辺りから尾行しているってことには気づいていた。だから、どうせ俺と明久が恋仲になったんじゃないか、とか訳のわからないことでも考えていたんだろう?」

「……………う、うん」

「まったく……………迷惑なことを。とりあえずだな、さっきまでの俺と明久のアレは別にイチャイチャしていたわけじゃねえ。ただの天然だ。だから、お前らの心配するようなコトは起きてねえよ」

「じ、じゃあ、『気持ちいい』っていうのは……………」

「んあ? ゲームで勝つことが、っていう意味だよ」

「……………はあ」

葵が深い溜息をつく。自分の心配しているようなことじゃなかったのだから、安心するのもわかる。

……………しかし、

「最初から紛らわしいことしてんじゃねえよこのバカあ

」?

彼女の怒りは収まらなかった。

先日の薔薇騒動から二日後の月曜日。

葵と明久は二人仲良く登校していた。ちなみに楓は日直らしく二人より先に家を出ている。

「まったく、アキくんったら……」

「あはは、ゴメンね、葵」

怒ったように明久の前を歩く葵に力なく微笑む明久。おとこの事件から明久は葵に頭が上がらなくなっていた。

「もういいよ……ん？」

「どうしたの？」

ピタリ、と葵が突然足を止めた。不思議に思った明久が葵の視線の先を見ると……。

《完売御礼！ 『五月雨愛斗×吉井明久』バカなアイツは俺のもの
」祝・五百部完売！》

優子著、伝説の作品についての張り紙が、二年生の廊下掲示板に、でかでかと貼られていた。

「……………（プルプル）」

「あ、葵……………」

拳を握りしめ、震え始めた葵に冷や汗を垂らしながら近づく明久。

次の瞬間、葵は力の限りに叫んでいた。

「この学校はバカばかりか

？」

ちなみに余談だが、葵がこの本を楓にプレゼントされたのはここだけの話だ。

番外編 『万能演人』と『紅の修羅』の少し変わった日常（後編）（後書き）

はい、どうでしたか？

ごめんなさいまうさん。葵のキャラがうすくなっちゃいましたOTL
次回からはちゃんと本編を更新したいと思います。

……スパロが要素出そうと思っていたんだけどな……。

感想、お待ちしております。

第十七問 勝利の為にはなにかしら対価を払わなければならない（前書き）

こんにちは。今日も絶好の執筆日和ですね（笑）

今回から本編です。しかも今回は愛斗があの方に変身します。

またあいつかよ、とか言わないでくれると嬉しいです。

それでは、どうぞ

第十七問 勝利の為にはなにかしら対価を払わなければならない

「「試験召喚^{サモン}？」」

二人の喚び声に応じて、お互いの召喚獣がフィールドに姿を現す。赤コーナーには、学生服にザク装備を携えた愛斗の召喚獣。

そして、対する青コーナーには、山伏のような格好で一對の鎌を両手に持った恭二の召喚獣が存在していた。

二人の点数が召喚獣の頭上に表示される。

『Fクラス 五月雨愛斗 VS Bクラス 根本恭二
総合科目 3659点 VS 3584点』

ザワツと会場全体に動揺が走った。

『おい……なんだあの点数は……？』

『Aクラス、しかも上位並みの点数じゃないか……』

『本当に最下位クラスとBクラスなの……？』

それぞれ驚嘆の反応を見せる生徒達。しかし、彼らが驚くのも無理はない。

「学年最底辺クラス」と揶揄されているFクラス。そこに所属する生徒が自分達よりも遥かに高い点数を取っているのだ。驚きたくもなるだろう。

「へえ……随分と頑張ったみたいじゃないか、恭二」

「まあな。この試合の前に回復試験を受けさせてくれたのが有難かったぜ」

絶叫と共に、恭二があらん限りの斬撃を加えていく。

腰、肩、足……的確に、それでいて迅速な恭二の攻撃に愛斗は反応が遅れてしまった。鎌が振られる度に、愛斗の召喚獣が傷ついていく。

『Fクラス 五月雨愛斗 2763点』

「ぐっ……」

召喚獣が斬られると同時に、愛斗が苦しそうに片膝をつく。フィードバックの影響によるものだ。

『変身』能力を付与したために発生するフィードバック。召喚獣の操作性が観察処分者並に向上するという利点はあるものの、受けるダメージは召喚獣自身の五分の一と、明久が受けるフィードバックのおよそ二倍。

そんな計り知れないほどの衝撃に、愛斗の身体はみるみる蝕まれていく。

「畜……生……」

「どうした、Fクラスさんよ？ いくらAクラス候補だったといつても、この一週間の間でバカに染まっちゃったらただのクズなのか？ ああん？」

痛みに耐えながらもヒートホークで応戦する愛斗を小馬鹿にするように恭二が中指を立てる。

操作技術では恭二を遥かに上回っている愛斗だが、本隊で受けるダメージが邪魔をして上手く召喚獣に支持を送ることができない。結果的に、格下の恭二相手に苦戦を強いられている。

『Bクラス 根本恭二 2165点』

『Fクラス 五月雨愛斗 1854点』

表示される二人の点数。点数で勝っていた愛斗であったが、今や300点ほどの差をつけられている。最早、余裕なんてものは存在しない。

序盤で見せていた軽口もいつしかどこかへと消えてしまっていた。

「……さ、流石は代表なだけのことはあるじゃんかよ……」

「お前もな。Fクラスのくせになかなか善戦してくれるじゃねえか」

絶望的な状況の中、愛斗は普段使わない頭脳をフル回転させて打開策を模索し始める。

（どうする……？ こっちには俺の動きを阻害するほどのフィードバックが。対する恭二にはマイナス材料は何もない。3600点を超えているから、最終手段として『変身』が使えるが……クソッ！ 結局自分の能力に頼らねえとなにもできねえのかよ、俺は！）

ギリツと歯をかみしめる愛斗。

絶体絶命。まさにその言葉がしっくりくるこの状況。観客の大半が、恭二の勝利を半ば確信し始めているだろう。

もう、ダメなのか……と諦めかけた……その時。

「根性見せろや五月雨愛斗！ おおおおおおおおおお？」
「！？」

吼えるような喝が満身創痍の愛斗に突き刺さる。

聞き覚えのある声だった。……いや、そんな程度のものじゃない。声の主は、観客席で立ち上がり、睨むように愛斗を見据えている。

赤い鬘のような髪を雄々しく逆立てながら、坂本雄二は叫び続ける。

「てめえは俺達と約束したんだろうが！ 絶対Bクラスに勝つてよ！ それなのに、なんでこんな中途半端に諦め見せてんだボケエツ？ お前の決意はそんなものか？ その程度のものだったのか！？ …… 違っただろ！ お前は今、俺達五十五人の期待背負ってんだよおおおおおおお？」

「……………」

数秒の沈黙が場を支配する。瞬間、ボゴツという鈍い音が、体育館に響き渡った。

召喚フィールドにポタポタと赤い血液が落ちる。

五月雨愛斗が自分の顔を思いっきり殴打したのだ。

「……………礼を言っぜ、雄二」

そこには先ほどまでの弱気な表情はない。

「おかげで、すっかり目が覚めた」

能力者は、覚悟を決めて相対する敵へと向かう。

「俺は…………俺の全力を以てして、あの馬鹿を打ち倒す！」

それがどんなに厳しい戦いになろうとも、だ。

「『変身』？」

能力解放。愛斗とその召喚獣がキラキラとした光に包まれる。

愛斗の決意を表す行動に、恭二が冷や汗を垂らしながらも軽口で応戦する。

「いいねえ……そう来なくっちゃおもしろくねえよなあ!」

ダツと恭二は召喚獣に武器を構えさせ、特攻をかける。変身完了までにとどめを刺すつもりだ。

鎌を振りかぶり、首を刈り取るようにして横薙ぎに振るう。同時に、ちまつとした召喚獣のパーツが体育館を優雅に遊泳した。ガクンと召喚獣が片膝をつく。それを見て、彼は笑っていた。

鎌を持った右腕が吹き飛んでしまった、恭二の召喚獣を見て。

「て、めえ……」

「あアン? そこまで驚くようなことでもないだろオが」

悔しそつに上唇を噛む恭二に、『最強』は面倒くさそつに語りかける。

「ったくよオ、ここ一週間でドンだけ俺の姿と能力を使えば気が済むんだ、このバカは」

クク、と自分の身体を面白そつに眺めつつも、一步步、確実に恭二との距離を縮めていく。

「でもまア、理性以外の全てを俺に預けてまでも勝利にすがろオとするその根性だけは評価してやるよ」

そこにいるのは、本来存在してはならない存在。世界の理を現在進行形で掻き乱している、そんな『規格外』の少年。

体育館中で起こるとよめきを一身に受けながら、彼は面白そうに呟いた。

「そんじゃア、愛斗のヤロオの願い通り、さっさと勝ちをもぎ取ってやるとするか」

『とある魔術の禁書目録』 史上最強の超能力者、一方通行。ここに推参。

第十七問 勝利の為にはなにかしら対価を払わなければならない（後書き）

今回の『変身』はこれまでと少し違います。

それではまた次回。

感想お待ちしております

第十八問 決着（前書き）

こんにちは。最近自分の文才のなさに辟易している、ふゆいです。
すさまじいムチャクチャ展開。
どうか見捨てないでください。絶対に、原作に戻しますんで（汗）
それでは、どうぞ。

第十八問 決着

「あれは……なに……？」

Fクラス用特別観客席の一席で、『観察処分者』吉井明久は顔中に冷や汗をかきながらポツリと呟く。

愛斗の腕輪の能力が『変身』であるということは明久も知っていたし、その能力効果がいかなるものなのかということも、彼は十分理解していた。

しかし……『アレ』は何かが違う。

五月雨愛斗が変身したはずなのに、愛斗の雰囲気が全く伝わってこない。誰か、別の人物に成り代わってしまっているかのような、そんな感じ。

だからこそ、明久は思わず疑問を口にしてしまっていた。

「……………一方通行」

『とある魔術の禁書目録』という物語の中に登場する、最強の超能力者。

勿論のこと、明久も読んだことがある。確か愛斗に勧められて本を借りたはずだ。

フィールドに佇む愛斗の姿は、まさに一方通行その人だった。

『ククク……さア、セエゼエ楽しもオじゃねエか！』

一方通行（愛斗）が歪んだ笑みを浮かべ、静かに笑う。

「……………違う」

愛斗は、あんな歪んだ笑い方はしない。もっと楽しそうに、明るく、周りのみんなに溶け込むような、そんな自然な笑いをしていたはずだ。

まさか、あれが、あれこそが『変身』能力とでも言うのだろうか。

「一体どうしちゃったのさ……愛斗……」

既にこの場には欠片も存在していない親友の名を呟き、吉井明久は真実を求める。

「く……喰らいやがれ！」

恭二が、上ずった声で叫びながらも隻腕になってしまった召喚獣を突貫させる。

回転し、遠心力を利用した手法で攻撃を加えようとする恭二。

本来なら、並大抵の召喚獣、しかもAクラスレベルですら軽々と粉碎するほどの威力を持った攻撃だが、

「……効かねエなア」

それは一方通行に届くことなく、見事なまでに元きた方向へと『反射』されてしまう。

跳ね返ってきた鎌をマトモに喰らった恭二の点数が減少した。

『Bクラス 根本恭二 754点』

「ちっ……」

攻撃が……効かない。

相手が普通の一般的な召喚獣なら既に屠られていてもおかしくないような攻撃でさえ、一方通行はなんなく反射してしまう。……果たして、そんな化け物に勝ち目など存在するのだろうか。

『Fクラス 五月雨愛斗（一方通行） 1765点』

もはや、恭二と愛斗の点数差はダブルスコアになってしまっている。

点数は向こうが上。操作技術も圧倒的に向こうが有利。誰がどう考えたって、決定的な一打なんて見出せない。

（もう……駄目、なのか……？）

Bクラス代表に諦めの表情が浮かぶ。そんな恭二の気持ちが伝染し、Bクラス全体が諦めムードに包まれかけた……。ときだった。

「諦めちゃダメだよ、きょーちゃん？」

「！」

静まり返った体育館に響いた、幼い声。その声の主は、低い背を精一杯伸ばして、自慢の長髪を振り乱しつつ、叫び続けている。

「きょーちゃんはいつだって諦めなかった！　どんなことがあっても、自分がどれだけ不利な状況に置かれても、絶対に諦めたりしなかった！　中学生の頃だって、あたしを助けるためにいじめっ子達に囲まれても、最後まで諦めなかったじゃない！」

「雪奈……」

「あたしは信じてるよ。きょーちゃんはヒーローだって。あたしや、みんなのことをいつだって身体を張って助けてくれる、最高の正義の味方だって！　だってさ……」

安藤雪奈は双眸からとめどなく涙を溢れさせながらも、ぎこちなく恭二に笑いかけた。

「あたしは、そんなきょーちゃんが好きだから！」

「！？」

突然の告白に恭二が顔を真っ赤にする。そんな彼の心情を知ってか知らずか、雪奈は次々と言葉を紡いでいく。

「きょーちゃんがこの学校で卑怯者の真似をしていたのだって、周りの大切な人を守るためだったんでしょ？　自分の大切な人を傷つけないために、自分自身を貶めたんでしょ？　もう傷つくような人が自分と関わらないようにするためだったんでしょ！？　……そんなに優しいきょーちゃんが、あたしは大好きなの！」

「……………」

「だから、諦めちゃダメ！　あたしの大好きなきょーちゃんは、絶対に最後まで諦めないで、全力を尽くして、みんなの笑顔を死ぬ気で守りきる……そんな正義の味方なんだから！」

シン、と客席全体が静まり返る。

いきなりのカミングアウトに生徒たちは動揺を隠せない様子だ。

『あの根本が実は良い奴だと……？』

『ホントかよ……』

『で、でも、私この前根本君が一人で花の世話しているのを……』

次々と飛び出す生徒たちの声。

それを聞きながら、根本恭二はただ啞然とした。

「雪奈……なんで……」

「理由とか、そんなのはどうでもいいの！ きょーちゃんはただ諦めずに戦って！ それがあたし達のお願いだから！」

もうすでに涙でぐしゃぐしゃになってしまっている童顔。いつもならば輝かしい笑顔が存在しているはずのそこには、今にも崩れそうなほど脆い少女の素顔が現れていた。

……そして、

「こんなところでくたばってんじゃねえぞ、代表！」

「私達の勝利はだいひょーに懸かっているんだからね！ シャキツとしなさい！」

「頑張つて、代表！」

「みんなの願いを……託されているんだから！」

Bクラス生徒による励ましの声が次々と飛んでくる。それは、去年まででは考えられなかった事態。卑怯者としての皮を被っていた彼には、縁のなかったはずの、そんな展開。

「馬鹿野郎が……」

そんなに期待されてしまうと、

「俺を誰だと思っ*て*いやがる」

絶対に勝ちたくな*っ*てしま*う*、

「俺は二年Bクラス代表……」

それが、彼が彼たる所以、

「根本恭二だぜ！？」

誰よりも優しい男なのだから。

再び奮い立った恭二を見て、一方通行がニタァツと爬虫類のように口を開く。

「いいねエ……あの三下みてエな目エしてやがる……少しくらいは、楽しませてくれよなア！」

「いくぞコラア！」

ベクトル操作で床を滑るように向かってくる一方通行。恭二は召獣の脚を止めると、鎌を持った右手を前に突き出した。

「……あア？ トチ狂ったか？」

「『反射』って言ったな……向かってくるモノを跳ね返すならよお……」

「！ テメエ、まさか……」

眉をピクツと動かし、慌てて方向転換しようとする。……しかし、もう遅い。

恭二は勝ちを確信したように笑うと、行動を開始した。

「武器を退かせちまえば、お前の方に反射されるんだよなあ!？」
「く……グウウウウウウウウ!」

スパン、という小気味よい音と共に、召喚獣の両腕が飛ぶ。
先ほどまで一つの傷も負っていなかった彼の召喚獣は、ガクンと静かに膝をついた。

『Fクラス 五月雨愛斗（一方通行） 432点』

最早、点数差なんて歴然。恭二の召喚獣には遠く及ばないほどのダメージを受け、一方通行本人も静かに膝をついた。

「へっ、見たかこのヤロウ。やってやったぜ」
「……これがフィードバックってヤツか……案外クるな、畜生」
「どうした？ もう降参する気になったのか？」
「……………wpjk殺gysb」
「ああ？ ……ぐわっ!？」

刹那。突如として一方通行の背から漆黒の翼が生える。竜巻のようにつねりをあげるソレは、触れただけで物体を切り裂いてしまいそうなほどの高密度。

一方通行にはもはや表情はない。フィードバックで正気が吹っ飛んでしまったのだろうか。

……そして、彼の身体に変化が起こった。

「ufguwgueigd『偶然、あの能力者はどうやら私達を一度に呼び寄せてしまったらしいな』面倒くさいわね……で、誰から殺ればいいのかにゃーん?」俺もそうだが、アイツもつくづ

く常識が通用しねえ奴だな」f y o g c g d s b d c u g u ?」
「……な、なんだ、あれは……」

恭二があり得ないものを見るような目で、目の前の物体を黙視する。

……人体的に果たしてあり得てしまうのかは分からない。……だが、実際に起きてしまっているのは、隠しようもない事実。

姿は、いつの間にやら五月雨愛斗本人に戻っている。……しかし、背中に生えた翼に変化が起きている。

先ほどまで二本会った漆黒の翼は、右半分だけとなり、左半分には天使のような真っ白の翼が生えている。両手には針治療で使うような金色の鍼が。そして、彼の周りでは謎の閃光が飛び回っている。……あれは、既に人間と形容してもいいのだろうか。

「u e g u e g c d h b c h b h j u e u i f t h v h j v g f g
i w g u i v g h d s b c b i」

「ちっ！　なんだあの化け物は！」

舌打ちしながらも、召喚獣を突っ込ませる恭二。……しかし、

「g c i g v x z b v c y q e g d u i u i c v h j f u i g w c
u f」

「! ?」

愛斗が右手を突出し、左手の鍼で自分の首を突き刺した瞬間。

恭二の召喚獣は、いとも簡単に消滅してしまった。

『Bクラス 根本恭二 0点』

「なっ……！」

突然の戦死に、目を見開く恭二。

攻撃が、見えなかった。

納得いかない勝敗だが、Bクラスの敗北は決定。それに伴い、西村が召喚許可を取り消すと、愛斗の召喚獣は存在ごと消滅する。…

…そう、愛斗の召喚獣だけは。愛斗本人の変化は、未だに収まる様子を見せない。

「お、おい！ どうなつてやがんだよ！」

客席にいた雄二が、慌てて西村の下まで駆け寄ってくる。

「召喚フィールドは消したはずだろ？ だったらアイツの変身も止まるんじゃないのか！？」

「俺がそんなことを知るか！ 未知の能力に常識なんてものはないんじゃないのか！？」

「なんだよそれ……愛斗！」

「h d u i o c j b j b c g g c u g w c h h f i h c j g r u v」

雄二の叫びも空しく、愛斗はただ謎の言葉を発するのみ。

そして、愛斗はあろうことか雄二に向かって右手を突き出した。

「なっ……！」

「さ、坂本君！ 何が一体……！」

「！ 来るな！ 木下！」

あまりのタイミングで走ってきた優子を、雄二が必死の形相で止める。

……それと同時に、愛斗は雄二から目を移すと、優子にその狙い

を定めた。

「木下！」

「ま、愛斗……？ いったい、どうしちゃったのよ……」

「早く、逃げるんだ、木下！」

「cudgcui ghv sdy egf cyf yu 殺ducgeu
cgucvucgui」

「愛斗

？」

優子の叫びは届かない。愛斗はただ無情にも、その右手から閃光を発しようとして……。

「この、バカ野郎！」

「！ udwgcui gevc iweiucguqecuu？」

突如飛来した鉄拳に顔面を挟まれ、遥か後ろへと吹っ飛んだ。

その拳の本人……『観察処分者』吉井明久は憤怒の表情で、その襟首を掴む。

「お前今誰に攻撃しようとした！ よりにもよって、誰に危害を加えようとしてんだよ！」

「……オ」

「木下さんは愛斗の大事な人じゃないのか！？ 愛斗が一番大切だと想っている人じゃないのかよ！？」

「……………オレ、ハ……………」

「いい加減目を覚ましてよ！ いつまで『変身』能力なんかに喰われてんのさ！ 中二病みたいな能力に支配されるなんて、『萌えの王者』が聞いてあきれるんだよ！」

いきなり出てきた二つ名に、周りの生徒がズルッとずっこける。

第十八問 決着（後書き）

早く原作の流れに戻そう……。

感想、お待ちしております。

第十九問 想いの先に存在するもの（前書き）

こんにちは。

バカテスのアニメももうすぐ終わりですね。

第三期を期待しつつ、お楽しみください。

第十九問 想いの先に存在するもの

自分の不甲斐なさと無力さを感じたのは、いつのことだっただろうか。

保育園の頃、隣に一組の家族が引っ越してきた。

木下、と名乗ったその家族はとても優しく、温かみがあったということを覚えている。

その家には、双子の姉弟がいた。

二卵双生児でありながら、二人はまるで瓜二つ。最初のうちは全く見分けがつかなかった。

俺が幼く、彼らが大人っぽかったのもあるのだろうが、俺はすぐにその二人に懐いていた。家が隣というのも幸いしたのか、通う保育園も同じところ。

『これからも一緒に遊べるね!』

『ええ、よろしく』

『うむつ、よろしくなのじゃっ』

彼女達の笑顔が好きだった。

彼女が時折見せる、いつもの冷静な表情とは違う柔らかな笑みが大好きだった。

彼がいつも見せている、太陽のような明るい笑顔が大好きだった。だからだろうか。いつしか俺は彼女達を笑わせようと必死になっていた。

小学生になり、彼女達とは一緒のクラスになった。

今までの保育園とはまた一味違った生活。

これからの学校生活へのわくわくが止まらなかった。

……そして、入学して二年ほど経ったとき、

彼女達が、イジメにあった。

イジメといっても、そこまで酷いものではなく、馬鹿な坊主達が二人に向かつて『同じ顔ー！』とからかうくらいの優しいもの。

……しかし、彼女達は明らかに笑顔を失っていた。

今までの輝かしい笑顔。俺がすべてだと思っていた、あの笑顔をどこにやったのか。

『同じ顔ー！ 気持ちわりーんだよー』

『クローンとかじゃねーの？』

『あははっ、そりゃケツサクだ！ おい、クローン。あっち行けよ』

アイツらは笑っていた。

彼女達が傷ついていたにもかかわらず、ヤツらは虐げるように意地汚く笑っていたのだ。

ドウシテ、オマエラガワラッテイル……？

『な、なんでアタシ達がそんなこと言われないといけないの……』

ドウシテ、カノジヨタチガナイテイル……？

『も、もうやめるのじゃ……』

カノジヨタチガワルイノカ？

……チガウ。オレガワルインダ。

カノジヨタチ……を……守りきれなかった、俺が……。

俺に、もっと力があれば。

物語の主人公みたいに、人を守り抜くことができるような、強い力があれば。

「……力を……」

力が欲しい。

「お前は……力を……」

主人公みたいになれる、

「お前は、力を欲するか？」

そんな、力が。

「……う……」

愛斗が目を覚ますと、そこは保健室だった。

どうやら恭二との一騎打ちの後、ここに搬送されていたらしい。

「……？」

と、ここで愛斗は自分の脚の違和感に気が付いた。

布団ではありえない、少し重めの物体。未だはつきりしない意識のまま、彼はそちらに視線を向ける。

「スー……スー……」

「……優子」

幼馴染である。木下優子が愛斗の脚にうつ伏せになってすやすやと寝息を立てていた。

なぜだろうか、優子の頬は泣いた後のように赤く腫れぼったくなっている。

「……優子、起きて」

「………うみゅ？」

「いや、『うみゅ』じゃないから」

可愛いな畜生、と叫びたくなる気持ちをなんとか押しとどめ、身体を起こす優子を見る。

優子は子供の用にゴシゴシと目を擦り眠気を覚ますと、すぐにいつもの表情に戻った。

「……あ、起きたんだ」

「随分と適当な言葉だな……」

「うるさいわね。……それで？ もう大丈夫なの？」

「は？ ……ああ、俺、また暴走してたのか」

暴走時の記憶はあまりはつきりとは残ってはいない。能力暴走とは、本人の意思とは無関係に起こるいわば発作のようなものであり、使用者にとって良いものではない。

愛斗は、気まづくなっただのか右手でガシガシと自分の頭を搔いていた。

「あー……わりい、また迷惑かけたみてえだな」

「まったくよ。……まあ、お礼やお詫びを入れるのは、アタシにじやなくて彼らにだと思っけど」

「あ？」

優子はそう言うと、保健室のドアに近づき、おもむろに開け放った。

「えい」

「「「うわあっ？」「」」

「……何してんだ、お前ら」

雪崩れ込むように入ってきたバカ達を、愛斗は溜息をつきながらジト目で見ろ。

そこにいたのは、坂本雄二、吉井明久、根本恭二の三人。

彼らは慌てて佇まいを整えると、それぞれ愛斗の方へと歩いてきた。

「よお」

「よお、って……愛斗、さっきまで化け物みたいだったのに、よくそんな平然といられるね……」

「……ということは、見たんだな」

「……うん」

「……そっか」

見られたかー、と愛斗は軽い調子で明久に笑いかける。そんな彼の挙動に、明久は目が点になっていた。

「……おい、説明しろよ」

「……雄二じゃんか、こんなところに何をしに来たんだ？」

「話を逸らすな。お前は俺達に話さなきゃならねえことがたくさんあるだろおが」

「……そう、だな。じゃあ、どこから聞きたい？」

「んー、俺は……まず、これからだな」

瞬間、愛斗の頭に鋭い痛みが走る。雄二が拳骨を思いきり頭上から落としたのだ。

「いつてえええええええ？ 急に何すんだこのゴリラ！」

「黙れチビスケ。勝手な行動ばかりしやがって、指揮する俺の身にもなってみろってんだ」

「……でも、勝ったじゃねえか」

「結果はな。そこまでの過程がアホなんだよ、お前」

「うつ……」

「言い返せないのな」

してやつたり。雄二の表情は正にそんな感じだった。

痛む頭を押さえつつ、愛斗は残りの一人へと顔を向ける。

「……恭二」

「勝負は俺の負けだ。約束通りBクラスはFクラスの手駒になってやるさ。……まあ、気に入らねえ負け方だったけどな」

「……すまん」

「なに、謝る必要はないさ。 あれは勝負だ。お互いのカードを全

部切って、俺は負けた、ただそれだけだろ？」
「……………」

あれは俺の力じゃない。

そう言おうと、口を開こうとした。……が、

「なにがどうであつても、あれはお前の勝ちだ。敗者にそれ以上無駄な言い訳をしないでくれ」

「……相変わらず、お前らしいな」
「よく言われるさ」

そして、お互いに笑う。

何年振りだろうか、こうして二人で笑ったのは。

ひとしきり笑ったところで、恭二は雄二と共に保健室を出た。なんでも、代表同士で対Aクラスの作戦を立てるらしい。

そうして、保健室に残ったのは愛斗、優子、明久の三人。

明久は躊躇いがちに口を開いた。

「愛斗……君の能力について、本当のことを教えてくれない？」
「……そうだな。お前には迷惑かけたみたいだし、これくらいは、な。……優子、いいよな？」

愛斗の言葉に、コクンと頷く優子。それを切り出しに、愛斗は語り始めた。

「俺の能力が『自分以外の誰かに変身する』ってというのは、明久も知っているよな？」

「うん。その人の能力とか、話し方とかも引き継ぐんだよね？」

「そう。……でも、根本的なところが違うんだよ」

「？ どういうこと？」

愛斗の意味深な発言に首を傾げる明久。
それに答えるように、彼は言葉を続ける。

「俺の能力は身体自体を対象に切り替えるんじゃない。……別の世界から、そいつ自身を俺の身体を媒体に召喚しているのさ」

「……というと？」

「……つまり、俺の『変身能力』の正体は『自己憑依能力』なんだ。ゲームとかであるだろ？ 人形とかにそいつの思念を憑依させるヤツ。あんな感じさ。ちなみに綾斗の能力みたいな不完全なヤツは暴走とか起きないんだけど……俺のは完全ってことだろ」

別世界から自分自身に憑依させる。

召喚魔法や、オカルト類の能力。彼の能力はそんなに不安定で危険なものだったのか。

そんなに危険な、いつ暴走してもおかしくないような能力を、この少年は平気で使い続けているのだろうか。

愛斗のあまりに命知らずな無謀さに、明久は呆然と彼を凝視してしまっていた。

「……なんで」

「あん？」

急に口を開いた明久の方を不思議そうに見る愛斗。

明久の顔には、動揺と恐怖の感情が入り混じっていた。

「なんで、そんな危ない能力を使い続けるのさ……？」

「明久……」

「わからない。その能力は愛斗を危険に晒しちゃうかもしれないんだよ？ 愛斗の大切な人までも、傷つけちゃうかもしれないんだよ」

「？」

「……………」

「なのに……それなのに、なんで愛斗はその能力を使い続けるのさ！？」

明久の本音が、保健室中に響き渡る。

彼が心配するのも無理はない。その『変身』能力は一步間違えれば使用者に死を招く。現に、先ほどの試召戦争では危うく死人が出てしまう所だったのだから。

しかし、激昂する明久に、愛斗は穏やかな声質で笑顔と共に言葉を紡いだ。

「……向こうの世界の奴らと、約束しちまったからかな」

「え…………？」

「俺さ、小さい頃から物語の登場人物みたいになりたかったんだ。ほら、あいつらってどんなことがあっても自分の能力を駆使して大切な人を守り抜くだろ？俺、そんな風になりたくて、努力して……でも、結局そんな都合のいい展開は起きなくて………そんなときだったんだよ。俺にこの能力が備わったのは」

「……………でも」

「いいから聞けよ。『変身』能力を手に入れて、俺はキャラクター達の思念と交流できるようになったんだ。んで、自分の力を認めさせて変身許可を貰った。その時に、ほぼ全員から約束させられたんだよ」

そこで言葉を切ると、彼は輝かしい笑顔で言い放った。

「『絶対に、俺達的能力でお前の大切な人を救ってやれ』ってさ」

「……………」

「確かに、俺は優子を傷つけかけた。あいつらとの約束を破っちまった。……それでも、俺は守り続けたいんだよ。優子も、秀吉も、お前達も……あいつらとの約束も。最後には『守ってやったぜ!』って胸を張って言えるようにしたいんだ」

明久は言葉を失っていた。

この少年は、自分と抱えているものの重さが違う。

いくら自分が負けようとも、最後は勝利を掴むような強さが彼にはある。

そして、吉井明久は静かに保健室を出た。……来るAクラス戦の為に。

「……格好いいじゃんか、畜生……」

第十九問 想いの先に存在するもの（後書き）

感想、お待ちしております。

第二十問 最終決戦に向けての作戦会議ってなんか盛り上がるよね (前書き)

こんにちは。

ついに肝試し編には行ったアニメがめっちゃ楽しみです。早く木曜にならないかな

それでは、どうぞ！

第二十問 最終決戦に向けての作戦会議ってなんか盛り上がるよね

翌日朝、Fクラス教室。

「はあ……はあ……」

「おい、大丈夫か？ 五月雨」

昨日の試召戦争で傷ついた後遺症かなんなのか、俺、五月雨愛斗は本日朝から少し風邪気味だった。

そんな俺の様子を心配した須川が、珍しく俺を気遣ってくる。……気持ち悪い。

「オイコラ。人が折角心配してやっているのになんだその言い草は」
「うるせえなあ……キツいんだから、あんま喋らせんなよ……ゴホッ、ゴホッ……あー……」

「……ホント、冗談抜きで大丈夫かよ、お前」

くそう、須川なんか同情されるとは……一生の恥だあ……ゴホッ。

俺が咳をしながら須川と話していると、チャイムが鳴る寸前になつておなじみの二人が教室に息せき切って走り込んできた。

「あ、あつぶねえ……遅刻ギリギリじゃねえか……」

「ゆ、雄二の購買が長かったからでしょ……」

「ああ？ 俺のせいだっていうのかこのバカが」

「100%お前のせいだよこのクソゴリラ」

「やんのか！」

「そっちこそ！」

「……いいから、席に着けよお前ら……」

なに朝から盛ってんだ、このバカ共は……。

そして、ようやく俺の存在に気付いた明久と雄二は、俺の様子に首を傾げながらも自分の席、つまりは俺の後ろ側に歩いてくる。

「……よお」

「なんだお前、病人みたいな顔してんぞ」

「風邪ひいてんだよ……ゴホッ、ゲホゲホッ！」

「マジかよ……こんな大事な時に限って使えねえやつ」

「雄二、君は基本的に何もしてないんだからそういうこと言っちゃだめだよ」

冗談半分で俺を貶す雄二を明久が窘める。

「しっかし……俺も随分と最悪なタイミングで身体壊したもんだな……今度から夜更かしは控えるか。」

そんな会話を何度かつ続けた後、雄二はクラス全員が揃ったのを確認し、いつもの通り教卓に立った。

そして始まる立会演説。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

「ど、どうしたのさ、雄二。らしくないよ？」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「……そんなこと言われるとこっちもなんか感動しちまうな」

相変わらず空気を作るのが上手いな。

周りに奴らも俺と同じように感慨にふけっているようだ。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き

残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の大勝負を目前にし、確かにこのクラスは一つになっていた。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが……今回のキーパーソンは、明久だ」

「へ？」

……明久？

皆が頭に疑問符を浮かべる中、雄二は明久を前に立たせ、言葉を続ける。

「皆が知っているように、こいつは『観察処分者』だ。その操作技術はおそらくこの学年で群を抜いた一番だろう」

『そ、それは……そうだな』

『教師どもに雑用やらされているわけだし』

『いくら吉井がバカでも、そんだけやりや上手くもなんたる』

「ちよっと待つんだ。今会話の中でしれつと僕を貶した人がいるよね？」

「静かにしてくれ、今から説明するから」

バンバンバンと机を叩いて皆を黙らせる雄二。

こういうしつかりしたところも、コイツがリーダーとしての資格を持っていることを示しているのだろう。

「今回の戦争は、はつきり言って厳しい。戦力差が明らかに違いす

ぎるんだ」

「珍しいわね、坂本がそんな弱音を吐くなんて」

「それくらい圧倒的ということじゃろう」

「島田と秀吉の言うとおりだ。普通に当たれば、まず俺達に勝ち目はない」

そりゃそうだ。なんたってあのAクラスには化け物クラスが何人もいる。

この間会った霧島なんか、ダントツで一位を獲っている。いくら成績上位の俺や姫路がいても、所詮はAクラスレベルなのだから、そこまで善戦することはないだろう。

「……それなら、一体どうするんですか？ 点数で勝てないのは今にわかったことじゃないですし……」

「ああ、だから、明久に頑張ってもらうんだ」

「……待て、そこで吉井の名前が出てくる意味が分からない」

「わからないのか？ さっき言っただろうが……明久は、操作技術が優れているって」

……あ。そういうことが……。雄二、無茶な案を思いつきやがる。

いまだに大部分がキョトンとしているのを見て、雄二は満足そうに言った。

「明久の操作技術があれば、Aクラスを圧倒することができる。なんたって攻撃が当たらねえんだからな。倒しようがない」

「でも……吉井の点数じゃ勝てないわよ？ そこはどうするのよ」

「……島田、この戦争で点数を上げるには、どうすればいいと思う？」

「え？ ……回復試験で良い点を取る、とか……？」

「そのとおりだ。……明久に、回復試験で点数を取ってもらう」
「ええっ!? ゆ、雄二! 僕はそんな高い点数をとれる自信はないよ!？」

雄二の発言に明久がわたたと慌てている。

無理もない。明久はこの学園の最低ランク生徒なのだ。良い点数など取れるはずもない。

しかし、雄二はいつも通りのあくどい笑みを明久に向けていた。

「確かに、普通に受ければ無理だろうな。そんなことができるなら今お前はAクラスにいるだろうし」

「う、うん……」

「……じゃあ、時間いっぱいテストを受ければ……どうなると思う?」

「……は?」

ハトが豆鉄砲を喰らったような顔をする明久。

まったく……相変わらず理解が遅えな……。

明久に助け舟を出すように、俺は雄二を見ながら口を開いた。

「戦争時間中一杯試験を受ければ……いくら明久でもとんでもない点数がとれるだろうな」

「! そ、そうか……そういうことなんだね」

「ようやく理解したか。……さて、今ので皆も分かってくれただろうか?」

こくん、と一様にうなづくクラスメイト達。

その反応を見て、雄二はよろしいというように、にかつと八重歯を剥き出しにした。

「皆が分かっているように、Aクラス代表の翔子は、ケタ違いに強い。おそらく、俺達が十人で束になっても到底敵わないだろう」

「じゃが……明久が点数を取りさえすれば……」

「いくら翔子でも、点数を伴った明久には勝てないはずだ。操作技術でこのバカに勝てる奴なんて、この学園には存在しねえからな」

「あはは……そこまで手放しに誉められちゃうと、なんか照れるね」

明久は居心地が悪そうに身じろぎしていた。まあ、日ごろから褒められ慣れてないだろうから、こういう状況はなかなか恥ずかしいのだろう。

話も終盤に差し掛かった頃、何を思ったのか、突然姫路が「あの……」と口を開いた。

「なんだ、姫路？」

「あの……坂本君って、霧島さんと仲良いんですか……？」

確かに。さつきから霧島のことを「アイツ」とか「翔子」とか呼んだりしている。まさかこいつあの日本撫子と良い仲間なんじゃないか……。

急遽、明久とのアイコンタクト会議、開始。

（明久、準備はいいか？）

（もちろん、号令の準備は万端さ）

（グッジョブだ。今回俺は風邪で参加できないから、その分よろしく頼むぜ）

（了解）

ジッとクラスメイトの視線が雄二に集まる。

その殺気に気付いていないのか、雄二は軽い調子で言い放った。

ちなみに、明久と秀吉はそれぞれ姫路と島田に天誅食らってました。ご愁傷様

第二十問 最終決戦に向けての作戦会議ってなんか盛り上がるよね (後書き)

感想、コラボのお誘い、お待ちしております

第二十一問 『バカとテストと召喚獣につ』終わってしまいました……第三期に

こんにちは。

試験期間真っ最中の、ふゆいです。

誰か俺に物理を教えてくれ……。

いよいよ今回からAクラス戦に入っていきます。

まだ戦争には入りませんが、原作とは違うAクラス戦を書こうと思っていますので、楽しんでいただけると幸いです。

それでは、どうぞ

「宣戦布告？」

「ああ。FクラスはAクラスに試召戦争を申し込む」

いつも通りの宣戦布告。

しかし、俺だけで行くと大抵面倒くさい事態になってしまうという意見から、今回は俺、雄二、明久、秀吉、ムツツリー二、姫路と我々Fクラスの首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

まったく……俺だけでも心配いらんというのに。

「今までの結果を振り返ってからそういうセリフを吐くのじゃな」
「……………疫病神」

うるせえよ。

「うーん、何が狙いな？」

現在雄二との交渉席に座っているのは、俺の幼馴染の木下優子だ。今も明らかに猫を被った状態で交渉を行っている。隣の秀吉がジト目で姉を見ているのは見間違いではないだろう。

「おいおい、何を訝しんでいるんだ？俺達はただ単純にAクラスに宣戦布告しに來ただけだぜ？」

「それはそうだけど……君たちみたいな最下位クラスがこんな早くうちに戦争仕掛けに來るなんて、何か作戦があるに違いないでしょ

？ …… まあ、仮に作戦があつたとしてもアタシ達が負けるなんて到底ありえないんだけど、わざわざリスクを犯す必要も無いかな」
「そりゃ、賢明だな。さすがはAクラス交渉役。随分と頭が切れる様子で」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

お互いに皮肉を交換しながら交渉を続けていく二人。

つか、俺達のクラスってどれだけ信用ないんだよ……メンバーを考えれば納得はいくけど。

そして、雄二の目が怪しい輝きを見せ始めた。いよいよ本領発揮のようだ。

「そういえば木下。昨日のコイツと根本の戦い、観戦してどう思った？ ……最後の事故は無視してくれると助かるんだが」

事故？ そんなのあったか？

「五月雨君は意識を失ってましたから……」

「覚えてないのも無理はないよね」

「……ああ、能力暴走の話ね……」

そりゃ覚えてないわけだ。ってか優子への借りがまた一つ増えているような気がする。

優子は一瞬キョトンとしたものの、すぐに調子を取り戻し口を開いた。

「個人的にはすごかったと思うよ。根本君もAクラス並みの点数を取っていたし……愛斗も、いつもどおりの高得点だったしね。後、変身能力を冷静に分析して戦っていたのも驚きだったよ。普通あんな予想外の戦い方されたら混乱するものなんだけど、やっぱり中学

からの知り合いっていうのは利点が大きみたいだったね。最後に一つだけ言わせてもらうなら………とても格好良かったわよ、愛斗」

ニコツと雄二の隣にいた俺にいきなり微笑みかけてくる優子。
ぐ……相変わらず可愛い顔しやがって……。

「……………？（パシャパシャ！）」

突然のベストショットに、ムツツリー二が指が擦り切れんほどの勢いでシャッターを切っていた。

「おいおい、場所を弁えろよ……………後でその写真を全部売ってくれ」

「……………毎度あり」

「お主らはどんなときでも揺らがんのう……………」

これが真の男ってもののなのさ、秀吉。

「いや、わけが分からぬのじゃが」

さいですか。

優子の評価を聞き、ウンウンと頷いていた雄二は話が終わるや否や、すぐに次の言葉を提示した。

「ところで、Bクラスと試召戦争をする気はあるか？」

「え？ Bクラスって、根本君のクラスだよね……………」

「ああそうだ。今しがたアンタが高評価をした、根本が代表をしているBクラスだ。今は宣戦布告をされていないみたいだが、アイツらもAクラスを狙っているみたいだったからな。さてさて、どうな

ることやら」

「でも、BクラスはFクラスに試召戦争で負けているから、後三か月は宣戦布告ができないはずだよね？」

これは試験召喚戦争の決まりの一つである、『準備期間』

戦争で負けたクラスは、三か月の間の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。これは敗北したクラスがすぐに宣戦布告して、戦争を泥沼化させないための措置だ。

「まだそこまで広まっていなくてもかもしれない情報だが、あの一騎打ちは結局和平交渉にて終結ってことになっているんだ。これには鉄人も関わっているから、公式な和睦だぞ？」

これは、なんといっても俺が恭二に勝利したから成立した条件だ。やっぱり俺って役に立ってんじゃない

「勘違い、って怖いですね」

「駄目だよ姫路さん、そんな本当のこと言っちゃ」

少し後ろで姫路と明久がなにか言っていたが、俺には全く聞こえなかった。

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

雄二、今のお前の顔は歴代の悪役を遥かに凌ぐくらいイイ顔しているぞ……。

「うーん……そう来るかぁ……」

優子が腕を組んで悩みこんでいる。

そりゃそうだ。クラスを代表しての交渉なのだから、この結果次第で仲間達の立場が決まってしまうのだから。

しばらくの間、無音の空気が教室中に充満する。く……やっぱり駄目か……？

「……受けてもいい」

「うわっ！」

突然かけられた声に、明久が声を上げながら少し飛び上がる。つて、驚きすぎだろ。

「……雄二の提案、受けてもいい」

静かな、それでいてどこか凜とした声。

いつのまにか、霧島が俺達の交渉席に来ていた。あ、相変わらず気配の分らないやつだな……。

「あれ？ 代表、いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

頷いて、雄二を見た後に何故か俺の方をじつくりと見てくる霧島。

……は？俺が一体どうしたって言うんだ？

しかし、霧島はそのまま雄二の方を向いて、言い放った。

「……負けた方は、なんでも一つ言うことを聞く」

「ま、愛斗のピンチだ！ ムツツリー二、カメラの準備はいい！？」

「……俺を誰だと思っている？」

「ただのムツツリだよバカ野郎。ってかお前ら負ける気満々じゃねえか」

何をやっているのか。

（ま、愛斗、どうする？）

（は？ どうするって、何が……）

（何が、って。もし僕らが負けちゃったら愛斗の貞操が……）

（お前は一体何の話をしているんだ……）

（もう！　なんでそんな無関心なのさ！　いい？　このままじゃ愛斗は霧島さんに　　）

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！　何を勝手に……まだ愛斗の許可は貰ってないじゃないか！」

「だから、なんでそこで俺の名前が出てくるんだよ！？」

さっきからコイツは何を焦ってやがるのか。

「心配すんな。絶対愛斗には迷惑はかけない」

自信満々の台詞。さすがは自信と信条でできている男。勝利を確信しているように聞こえるから不思議だ。

「……アタシからも、一個だけ条件付けていいかな？」

「ん？　どうしたんだ、突然」

ようやく話が纏まりそうなところで、いきなり優子が口を挟んだ。みんなが頭に疑問符を浮かべる中、優子はいつもの調子で淡々と言い放つ。

「アタシが提示する条件は……愛斗個人に対しての条件よ」

「……俺？」

「そう。アタシとアンタ、戦いで負けた方が、相手の言うことを何でも一つだけ聞く。……どう？ アンタにとっても悪い話じゃないと思うけど？」

「なんでまたそんな面倒くさいことを……悪いが、その話はパスで

」

「ビビってるのね、この負け犬」

「……と思ったが全力でOKだ。後で吠え面搔いても知らねえからな！」

馬鹿にしてんのかコイツは！

俺達の話も一段落したところで、代表同士が打ち合わせを始める。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

ほんと、独特の雰囲気を持つやつだな。変わった口調だし、喋り方はムツツリー二に近い感じが。

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね、みんなにも話さなきゃいけないし」

無事に交渉も終了し、Aクラスを後にする。

さあて、俺達の試召戦争もいよいよ大詰めだ。気合入れていくとしますかね！

.....風邪ひいているけどな。

第二十一問 『バカとテストと召喚獣につ』終わってしまいました……第三期に

感想、お待ちしております

第二十二問 MP3プレイヤーって、俺の周りじゃあまり知られていないんだは
こんにちは。

最近パソコンを使う機会がめつきり減りました。やっぱり勉強って
怖いですね

さて、ついにAクラス戦です。当作品では原作とは違い、一騎打ち
形式ではなく純粋な戦争形式となっています。はてはて、どうなる
ことやら。書いている僕もハラハラドキドキです（おい）

原作とは一味違うAクラス戦。少し長くなるかもしれませんが、
是非とも楽しんでいただければ僕も嬉しいです。

それでは、お楽しみください。

第二十二問 MP3プレイヤーって、俺の周りじゃあまり知られていないんだは

AM10:00

Fクラス対Aクラス 開戦

愛斗SIDE

旧校舎新校舎間渡り廊下

「いよいよ開戦だな……」

緊迫する空気の中、俺は流れる汗をぬぐうことなく緊張した面持ちで敵を待っている。

こ、これが戦場ってヤツかア……面白エ。

「出てる。一方通行出てるから」

「よし。よく気付いたな須川。ツツコミができる男はモテるぞ」

「喧嘩売ってんのかコラ」

なんだよ折角気分を和ませてやろうと思ったのに。

まあまだ敵さんも来ないみたいだし、暇つぶしに今回の俺達の作戦内容でも説明するでしょう。

まず、雄二率いる本隊は教室に引き籠って籠城する。基本的に戦力が下なんだから、妥当と言っちゃ妥当だろう。

そして、Aクラスがシビレを切らして攻めてくるはず。そこで俺達の出番だ。

ここには俺含め召喚獣の扱いが上手い奴らが集められている。勉強ばかりで体力のないAクラス戦力を少しでも多く減らすための配置だ。

俺達の目的はただ一つ。明久の準備が整うまで戦況を維持すること。必要であれば腕輪の力を開放してもいいらしい。ふっ、ついに俺の『変身』を応用した技を見せる時が来たということか……。そんな感じで、今現在俺達は敵さんが来るのを今か今かと待っているのである。

「それにしても……五月雨、お前風邪は大丈夫なのか？」

「ん？ あー、大丈夫なわけじゃないんだが……ちよっち『変身』を応用して風邪をひいていないという精神状態にしてみた」

「お前もう学園都市に行けよ……」

俺のあまりのハイスペックさに須川は呆れ半分尊敬半分といった様子でため息をつく。まあ、これも戦闘前のインターバルつつつことだな。

「それにしてもよ……」

「ん？」

と、ここで須川が頭の後ろで手を組みながら、ぼんやりと呟いた。

「坂本はああ言っていたが、本当に俺達でAクラスなんかには勝てるのか？ 常識的に考えたら、明らかに勝率低いだろ？」

「あー……ま、言いたいことは分かるな」

おそらく、今回の戦争に参加しているほとんどの生徒が思ってい

ることだろう。

学力カーブ制とも言われるここ文月学園のクラス分け制度は、世間一般から見ると学力の優劣によってクラスが分けられるため、授業進度もソイツにあった速さになるという点から、なにかと評判は良かったりする。召喚獣っていう最新科学技術を扱えるという点もあるが。

しかし、それは裏を返すと学力の優劣によって、学園での優劣が決まってしまうと言っても過言ではない。現に、文月学園でのクラス間の差別意識は、通常の学校から比べて些か強いようにも思われるしな。

Aクラスに所属しているから、俺は偉い。Fクラスに所属しているから、俺は弱い。

そんな風に考えてしまう生徒が多くなっているというのも、また事実ではある。

しかし、そんなことだけで人間の価値や人生の優劣が決まってしまふのならば、こんな学園が成り立つはずがない。もしそうなら、学力の低い受験者がこの学校から消え去ってしまうだろう。

ここの学園長のモットーは『実力主義』

一見、学力のみを示しているようにも思われるが、少し視点を変えてみるとそれだけではないということがわかる。

本来、実力というものは人間の実行できること全体を指す。つまり、体力、行動力、決断力、知略、チームワーク……などなど、いわゆる学力以外の『実力』を育てるのも、この学校の目的だったりするわけだ。

ようするに……

「たえ学力が低くたって、俺達がそれ以外で優れていれば勝つことができるだろ」

「それ以外って……俺達がAクラスに勝っているところなんてあんのかよ？ 俺が言うのもなんだが、第二学年Fクラスは今までに類を見ないくらいの最低クラスだぞ？」

「大丈夫。みんなを信じろって。いくらバカだろうが、この戦争にかける思いはみんな誰にだって負けやしないんだからよ」

そうさ、たえ戦力が最低クラスの上、根性が腐っていたとしても、俺達は生死を共にする戦友なんだからな！

須川と話し始めて数分が経とうとした時、とうとう奴らは現れた。

『いたぞ！ Fクラスだ！』

『私達に挑むなんて馬鹿な真似をしたあいつらに痛い目を見せてやりましょう！』

『総員、出撃！』

『『『『おおおおおおおおおおおお？』』』』

『『『『……………』』』』

えーと……

『なんであんなに士気が高いんだ！？』

予想外の事態に、俺と須川は顔を見合わせて絶叫した。

本当に、大丈夫……だよな？

優子SIDE

Aクラス教室前廊下

「先遣部隊がFクラスと接触したようです」

「ん。わかったわ、引き続き監視をお願いね」

「わかりました」

偵察部隊の佐藤さんの報告を聞き、アタシは「はあ」と溜息をついていた。

そんなアタシの様子を不思議に思ってたか、ボーイッシュ少女の愛子がこちらへと歩いてくる。

「どうしたの？　なんか元気がないみたいだけど」

「どうしたもこうしたもないわよ……そもそも、なんでアタシ達がFクラスなんかの相手をしないといけないの？　こんなの、最初から結果が決まったような出来レースじゃない」

「あはは……まあ、優子の言ってることも一理あるよね。いくら知略に長けた指揮官を持っていたとしても、戦力自体が劣っているんじゃない、勝利するのは難しいし。ボクだったら迷わず降参するかもね」

「嘘おっしやい。戦死覚悟で特攻するでしょーが」

「あらら、断言されちゃったよ？」

優子はクールだねー、と笑う愛子。しかしまあ、戦争だからと言ってむすつとされているよりは、いくらか気が楽だわ。

今回の試験召喚戦争。新学期が始まって歴代最速の頂上決戦という話だ。最低クラスが最強クラスに挑戦状をたたきつけるなんて、空想の世界ならいざ知らず、現実でもやるようなバカがいるとは……、

「愛斗が楽しそうなわけだわ」

あの中二病患者にとってはこの上ない幸福状況でしょうね。アイツが変身能力を手に入れたのだって、空想上の人物に憧れを抱いていたからだし。……まあ、原因作つたのはアタシと秀吉なんだけどね。もうちよつとアタシ達がしっかりしていたら、愛斗もあんな人外能力を手に入れることもなく、アタシと一緒に普通の学生生活を楽しめたのかな……。

「っ。だめだめ。こんなもう過ぎたことをいつまでもうじうじ言うてちゃ。ちゃんと参謀らしく毅然としてないと」

一先ず、昔の件については頭の隅に追いやっておこう。深呼吸をし、作戦モードへと脳内をシフトさせる。さて、まずはどう攻めようかしらね……。

「ふふ、なんか面白くなってきちゃった」

こんなだから愛斗に『バイサーカー戦闘狂』なんて呼ばれちゃうのかしら。まあ、なんかノベルチックでアタシは気に入っているからいいんだけど。

『現在、Aクラス被害少数。対するFクラスは被害皆無です。押さ
れています』

無線から佐藤さんの声が聞こえてくる。押されている、か……お
そらく、あのバカが能力総動員しているんでしょうね。いいわ、愛
斗。そっちが全力で抗うって言っなら……

「まずはアタシが、その薄っぺらい淡い幻想を、完膚なきまで叩き
潰してあげるわよ」

アタシの口元には自然と楽しそうな笑みが浮かんでいた。

第二十二問 MP3プレイヤーって、俺の周りじゃあまり知られていないんだは

感想、お待ちしています

第二十三問 変身能力の神髄（前書き）

こんにちは。最近「Fate」にはまっているふゆいです。
おもしろいですよね、フェイト。物語の難解さが毎回毎回楽しみです。

さて、今回は愛斗が大活躍……かな？
それではお楽しみください。

第二十三問 変身能力の神髄

No Side

開戦から十分経過。

Fクラス先鋒兼最前線防衛部隊を率いる五月雨愛斗は、何故か激しく士気が高いAクラス相手に苦戦を強いられていた。

「横溝はダツシユで雄二に報告！ 柴崎は部隊の半分連れて一時後退しろ！ 残りの半分は俺と須川から離れるなよ？」

『り、了解！』

「ちつ、もうちょっと楽かと思っていたんだが……流石は天下のAクラス。そう簡単に勝たせちゃあくれねえか」

Aクラス先遣部隊のあまりに突然すぎる突撃作戦。予想外の事態に虚をつかれたFクラス部隊だったが、いち早く気を取り直した愛斗の咄嗟の指示によって、戦死者を出すことだけは免れていた。

戦力確保のために部隊の半分を本隊へと退却させたことで現在の戦力は当初の半分以上。最高戦力を誇る愛斗と須川に頼り切った前線部隊にとっては大きなダメージである。

現在は部隊員を中心に囲んで守りつつ、点数の高い生徒を主にして迎撃にあたっているところだ。

『Fクラスだからって油断しちゃダメよ！ 絶対に二人以上のチームで殲滅してね！』

「優子のヤツ……なかなかエグイことしてくれんじゃねーかよ……」

人数的には十人ほどと全戦力の四分の一にも満たない員数だが、個人個人の点数がFクラスに比べ圧倒的に高い。孤立した生徒をタコ殴りにしてもなんとか倒せるという状況にもかかわらず、複数でかかってこられているため愛斗達の点数も風前の灯だ。

そんな彼らの心境を知ってか知らずか、Aクラスの猛攻はますます激しさを増していく。

『喰らいなさい五月雨愛斗！』

『大将格の首、もらったぁ』

『？』

そして、二人組の生徒が満を持したように愛斗へ召喚獣を突貫させてくる。彼らとて愛斗の強さを知っているはずだろうが、点数の減少しているこのタイミングならば倒せると踏んだのだろう。

まさに多勢に無勢。劣勢の状況に追い詰められながらも、愛斗は取り乱すことなく、一度舌打ちをした後に、行動を開始した。

「……『素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シユバインオーグ。』

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

満たせ。満たせ。満たせ。満たせ。満たせ。満たせ。繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

セツト

A n f a n g

告げる

告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

！ 『変身？』

愛斗を中心にして、魔方陣のようなものがリリウム製の床に広がる。巻き起こる風。吹き出す眩い光。

『な、なんだ！？』

『なによ、これ』

！

動揺の色を見せるＡクラス生徒達。それもそのはず。今までの愛斗の能力使用に、こんな大掛かりな展開はなかったのだから。

廊下中に沈黙が走る中、ゆっくりと光が晴れる。

「……………問おう」

蒼を基調にしたドレスのような服の上に複雑な模様が走った銀色の鎧を装着し、右手には金主体の宝剣が。

「……………貴方が」

輝かんばかりの金髪は後頭部で括つてある。そしてなにより目を引くのはおそらくそのずば抜けた端正な顔立ちであろう。

そう、彼女こそ、

「私の契約者か？」
マスター

『剣の騎士』の位を冠する者。イングランドの英雄、アーサー王だ。

『『リ……リアルセイバーキタ
？』』

Fクラス生徒全員が感嘆の絶叫をあげる。基本的に女に飢えているFクラスでは、こういった創作キャラの知名度が段違いである。そのため、彼らは空想と現実が混ざった今回の変身に対して激しい喜びを見せていた。

『ひ、怯むな！ 所詮はFクラスなんだ！』
『突撃 ？』
『あ、コラ！ 待ちなさい！』

能力を使用させてしまったことから起こる焦りからか、我先にとセイバー【愛斗】に突っ込んでいくAクラス生徒達。部隊長である優子の制止の声も空しく、彼らは各々の武器を構えて召喚獣を突貫させる。

頭上に表示されるお互いの点数。

『Fクラス	五月雨愛斗	V S	Aクラス	生徒八人
日本史	180点	V S		平均270点』

当初は450点ほどだった点数も、激戦の中減少し続け遂に200点未満に。対するAクラスは皆が200点台中盤。その中でも二人が300点越しという圧倒的戦力差。

Aクラスの彼らも、己の戦力に過信があつた上に、愛斗の減少した点数を見て余裕だと思つたのだらう。当たり前のように召喚獣に攻撃の指示を与えていく。

「……確かに、今までの【愛斗】だったらこの劣勢を乗り越えることも難しかつたでしょう。総じておよそ100点超の戦力差。勝利法を模索することも馬鹿馬鹿しくなっていたでしょうね」

そうは言いながらも、チャキと【エクスカリバー約束された勝利の剣】を構えるセイバー【愛斗】。彼女の動きに連動して、召喚獣も同じように剣を構えた。心なしか、その顔には笑みのようなものが見て取れる。彼女の奇妙な言動にも気付いていないのか、次々と攻撃を仕掛けるAクラス部隊。しかしセイバー【愛斗】は【約束された勝利の剣】を巧みに操り、全ての攻撃をいなしていく。

『なっ!?!』

『嘘でしょ……この人数なのよ!?! なんて避けられるのよ!』

「随分と動揺している様子ですね。……まあ、私みたいな雑魚に一度も痛手を負わせられないのが悔しいのは分らないでもありませんが……貴女方は少し思い違いをしているようです」

『ど、どういう意味よ!』

繰り返される剣戟の応酬。圧倒的戦力差にも拘らず、Aクラス生徒達の点数が見る見るうちに減少していく。それに比べてセイバー

【愛斗】の点数は一切の揺らぎを見せない。

「……一つ質問をしましょう。彼、【五月雨愛斗】の【変身】には複数の段階があるのをご存知ですか?」

『知らねえよ……そんなこと!』

「そうですか。それならば、自分自身の目で実際に確かめられた方

ファーストエディション セカンドエディション
がいいでしょう。普段の彼が使用する【第一段階】や【第二段階】
とは戦力も召喚獣連動率も完全に段違いである、【第三段階】の威
力を」

剣を動かす手を緩め、ずさつと後退するセイバー【愛斗】。しか
し逃げるわけではないらしい。彼女は肩越しに【約束された勝利の
剣】を掲げると、叫んだ。

「【エクス……カリバー？】」

瞬間。

【約束された勝利の剣】から黄金の光が放たれ、廊下一帯を包み
込む。その場にいる全員が混乱の感情に流される中、セイバー【愛
斗】は確固たる意志で、大きく剣を振るった。

光の奔流に飲み込まれ、為す術もなくAクラス生徒達の召喚獣が
消滅していく。

そして光が晴れた時には優子とFクラス生徒を除いて、全召喚獣
が戦死してしまっていた。

『Fクラス	五月雨愛斗	V S	Aクラス	生徒八人
日本史	50点	V S		0点

「戦死者は補習 ?」

『い、いやあ!』

『助けてくれー?』

風のように現れた鉄人こと西村宗一に次々と補習室へと連行され
ていく生徒達。いくら優等生であっても戦争で戦死してしまえば強
制的に補習となってしまうのがこの戦争のしきたりである。それに
乗っ取り、Aクラス先遣部隊は部隊長の優子を残して連れ去られて

しまった。

「くっ……ここまでの戦力差があるなんて……！」

「さて……残るはあなただけです、まだ戦いますか？」

完全に委縮してしまっている優子に、聖剣を向けながらセイバー【愛斗】が静かに問う。その言葉に優子は一瞬たじろいだものの、圧倒的劣勢を読み取ったのか、捨て台詞もなしに本隊へと引き返していった。

『『『や……やったあ

？』』』

Aクラスを退けたという夢のような状況に、Fクラス部隊が互いに手を取り合って激しく喜び合う。最低クラスが最強クラスの一角を相手に犠牲ゼロで生き残ったのだ。そう考えると彼らの喜びようもつなずける。

歓喜乱舞の仲間達を、流れに乗り遅れてしまったセイバー【愛斗】が穏やかな笑みを浮かべて見守る。

しかし……、

「……くっ」

「？ さ、五月雨！ どうしたんだ！」

彼女はいきなり膝から崩れ落ちてしまった。幸い剣を杖代わりにして、倒れることは防いでいるが、今にも意識を失ってしまいそうなほど真っ青な顔で身体をわずかに震わせている。

隣に立っていた須川は、いきなり異変を起こした仲間の下へと思わず駆け寄っていた。

心配する須川に、彼女は引き攣りながらも笑顔を返す。

「こ、この『第三段階』はなかなか体力と精神力を使うものでして……その上【約束された勝利の剣】まで使ってしまったので、形態維持が困難になってきてしまいました……。普段ならまだ維持できるはずなんですけどね……。ここにきて【愛斗】の体調不良が響いてしまったようです」

「体調不良……風邪を誤魔化した結果ってことか」

「はい……。残念ながら私はここまでのようです。もし【変身】が解けてしまったら……その時は、彼にお詫びをお願いします……」

「え……？ お前は【五月雨】だろ？ なんで本人が本人に伝言を……いったい、どういうこと……」

「詳しくは彼に聞くことをお勧めしますよ……。……。そろそろ時間そうですね。それでは、私は一度【解除】されるとします。」

……【変身解除】」

「ちょ、おい！」

須川の叫びも空しく、セイバーは光の粒子となって消えてしまっていた。後には、わずかに息を荒げ、火照ったような顔色で倒れ込んでいる愛斗がいるだけ。どうやら気を失っているようだ。

「いったい、なにがどうなってるっていうんだ……」

そんな彼の呟きは、歓喜に酔いしれる仲間達に届くことなく静かに空中へと消えていった。

第二十三問 変身能力の神髄（後書き）

感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9450p/>

バカとテストと万能演人（オールアクター）

2011年11月17日19時58分発行